調査資料 No. 82

受附第　　号
42. 5. 31
海外技術協力事業団

資　料

マット・グロッソ州における戦後雇用農の概況

調査統計課

（雇用農家実態調査報告）

（1967 年 3 月）

海　外　移　住　事　業　団

国際協力事業団	
受入月日 '84. 4. 10	703
登録No. 03143	23.4
	EM

ま　え　が　き

当事業団サンパウロ支部は，昭和39年のサンパウロ州，同40年のパラナ州の雇用農実態調査に引き続き41年度にはマット・グロッソ州における戦後雇用農移住者の調査を行なった。

本報告書は，その調査結果をとりまとめ集計分析と考察を行なったものである。

これが移住実務担当者の業務遂行の一助となれば幸である。

昭和42年3月

業務第2部

JICA LIBRARY
1024351[7]

目　　次

1. マット・グロッソ州調査概況 …… 1

2. マット・グロッソ州概況 …… 2

(附) マット・グロッソ州植生図 （図１） …… 5

3. マット・グロッソ州に於ける邦人の歴史と活躍状況 …… 4

4. マット・グロッソ州に於ける日系子弟の活躍状況 …… 7

(附) ブラジル日系二世の進出状況 （表１） …… 8

(1) マット・グロッソ州の日系人分布状況（北部）（表２） …… 10

(2) マット・グロッソ州の日系人分布状況（中部）（表３） …… 11

(3) マット・グロッソ州の日系人分布状況（南部）（表４） …… 12

(4) マット・グロッソ州の日系人分布状況（総計）（表５） …… 13

(5) マット・グロッソ州の日系人分布状況（表説明） …… 13

5. マット・グロッソ州に於ける日本語教育 …… 15

6. マット・グロッソ州の教育事情について …… 19

7. マット・グロッソ州の治安状況について …… 20

8. マット・グロッソ州の保健衛生事情について …… 21

9. マット・グロッソ州の金融事情について …… 24

(附) 為替相場推移表 （表７） …… 26

(附) 為替相場推移グラフ（図２） …… 28

10. マット・グロッソ州に於ける食生活事情について …… 27

11. マット・グロッソ州の交通事情 …… 29

(1) マット・グロッソ州の交通料金表（表８，９，10） …… 32

(2) マット・グロッソ州の航空図（図３） …… 34

(3) マット・グロッソ州の主要幹線図（図４） …… 35

12. 独立時の土地の選定方法 …… 36
13. マット・グロッソ州の地域概況（序文） …… 37
(1) マット・グロッソ州地域概況（北部） …… 37
(2) マット・グロッソ州地域概況（中部） …… 52
(3) マット・グロッソ州地域概況（南部） …… 58
14. 戦後移住者県別農業形態及び家族数（表11） …… 68
15. 渡航前の職業別表 （表12） …… 69
(1) 渡航前の職業別表（説明） …… 69
16. 家族移住者の学歴別農家形態表（表13） …… 69
17. 在伯年数別表（表14） …… 70
18. 営農形態別に見た家族構成（表15） …… 70
19. 戦後移住者農業形態別家族戸数と人員数（図5） …… 71
20. 営農形態別に見た滞伯年数とその家族数（図6） …… 72
21. 営農形態別労働換算率表（表16） …… 73
22. マットグロッソ州の地域別・年次別入植状況（表17） …… 74
(1) マット・グロッソ州の地域別・年次別入植状況（表説明） …… 74
23. マット・グロッソ州の地域別農産物及び営農形態（表18） …… 76
(附) 主要農産物（図7） …… 78
24. 移動の主なる理由（表19） …… 78
(1) 移動の主なる理由（図8） …… 79
(2) 移動の主なる理由（表説明） …… 79
25. 家族移住者の営農形態別に見た滞伯年数と移動回数（表20） …… 80
26. 資 産 状 況 …… 83
(1) 地 域 別（表21） …… 83
(2) 地域別資産所有状況（表22） …… 86

(3) 資　産　額　別（表23）…… 89
(4) 地　　域　　別（図9）…… 90
(5) 資　産　額　別（図10）…… 90
(6) 項　　目　　別（図11）…… 91
(7) マット・グロッソ州に於ける地域別資産状況（表説明）…… 91
27. 年　収　状　況 …… 93
(1) 地域別の年収状況（農産物）（表24）…… 93
(2) 地域別の年収状況（家畜，労賃）（表25,26）…… 96
(3) 地域別の年収状況（その他の収入，借入金）（表27,28）…… 99
(4) 地域別の年収状況（合計）（表29）…… 100
(5) 年　収　状　況（項目別）（図12）…… 101
(6) 年　収　状　況（地域別）（図13）…… 101
(7) 年　収　状　況（表説明）…… 102
28. 年間支出状況 …… 104
(1) 地域別の年間支出状況（営農費）（表30）…… 104
(2) 地域別の年間支出状況（不動産設備費，機械器具費）（表31,32）…… 105
(3) 地域別の年間支出状況（生計費，借入金返済その他）（表33,34）…… 107
(4) 地域別の年間支出状況（合計）（表35）…… 108
(5) 年　間　支　出（項目別）（図14）…… 110
(6) 年　間　支　出（地域別）（図15）…… 110
(7) 年　間　支　出（表説明）…… 111
29. 独立時の資金調達状況（表36）…… 113
(1) 表　説　明 …… 114
30. 独立時の資金使途状況（表37）…… 115
31. マット・グロッソ州在住者の事業団融資利用現況表（表38,39）…… 116

32. 地域別借入金表（表 40 ） …… 120
33. 借　入　金（借入先別）（図 16 ） …… 122
34. マット・グロッソ州主要生産物分布図　（図 17 ） …… 123
35. マット・グロッソ州日系人分布図（図 18 ） …… 125
36. マット・グロッソ州戦後移住者（農業従事）地域別名簿（図 41 ） 127
37. 編　集　後　記 …… 147

1. “マット・グロッソ州調査概況”

1. 目　的

マット・グロッソ州における戦後移住者の動静，生活状況，営農収支状況及び定着状況を把握し融資及び援護斡旋の資料にすると共に実態に即した移住者（地）指導対策を計るを目的として調査した。

2. 調査地域及び対象者

マットグロッソ州全域の現在農業を営んでいる戦後移住者。

3. 調査方法

戸別訪問による聴き取り調査。

4. 調査期間

イ　調　査　　1966年8月1日～9月19日

ロ　集　計　　1966年9月25日～12月20日

5. 調査員

イ　調査主任　上園義房

柳田昌昭

調査員　小川全夫　22才　大在

松平和也　29才　高卒

八木孝雄　27才　大卒

上村征二郎　23才　大卒

寺村武史　24才　大在

ロ　調査集計主任　上園義房

野水克修

松平和也

八木孝雄

小柳美佐子

2. マット・グロッソ州概況

マットグロッソ州は総面積1,231,549km²を有する。

アマゾーナ州（1,564,445km²）パラ州（1,248,042km²）に次いで広大な州でありブラジル全土の14.47%を占めている。

反面その人口は1,189,000（1965年推定）とロライマ，アマパ，ロンドニアの連邦直轄地及びアクレ，アマゾーナ両州に次いで少なくブラジル全人口の1.4%に過ぎず人口密度は1km²につき0.96人である。

又人口1万以上の都市はカンポグランデ，クヤバ，コルンバ，トレースラゴアス，アキダウアナ，ドラードス，ポンタポラン，リオベルデ，ベラビスタ，アセレスとわずか10市を数えるに過ぎない。

これを日本の場合と対比してみると面積では日本全土の5.4倍であり人口はおよそ宮崎県の人口に匹敵する程度であり人口密度では実に日本（252人）の0.38%と云う数字である。

「マットグロッソ」の州名は現在のクヤバ市に移る前の首都がマットグロッソ市に置かれていたことに由来する。

地理的には南米大陸の中心部に位置し北はアマゾーナ，パラ両州，西はロンドニア州，ボリビア国，パラグワイ国，南はパラナ州，東はサンパウロ，ミナスジエライス，ゴヤス各州に境を接している。

又その州境は北端を除いた部分は河川（パラグワイ河，パラナ河，アラグワイア河）が境を成しているのが特徴である。

マット・グロッソ州は熱帯，パンタナール（低湿地），亜熱帯の三地帯（図1）に大別することも出来る。

熱帯地方に属するのは首都クヤバ市の約500km以北のアマゾーナ，パラ両州寄りの森林地帯であり，その殆んどが未開発で州政府による今後の開発が待たれているが道路工事すら本格的に着手されていない現状で早急の開発は望めない。日系人の集団地であるリオフェーロ植民地も熱帯地に入るが同地で大量に栽培されている植林ゴムは永年作物でもありゴム園経営に成功し，生産が軌道にのると近年とみに斜陽化の傾向にある。

ブラジルのコーヒー栽培にとって代る主要農産物になり得るものと考えられる。

植林ゴムは現在の時点では未知数の生産物であるとしか云えないがリオフェーロ植民地のケースは熱帯植物栽培の最前線と云う意味でも今後のマットグロッソ州の農業開発の試金石とい

える程重要な問題を含んでいる。

パンタナール（低湿地）地帯と云うのはパラグワイ国寄りの一帯であり，その面積は250,000 km² といわれ全州の約20％ に当り又これは日本の本州と四国とを合わせたほどの面積でもある。

この地帯の標高は海抜130 米に過ぎず11月～2 月の雨期には河川の氾濫に伴った泥海と化し全面に滞水する。

パンタナール地帯は乾燥期には大規模な放牧地帯ともなり，塩水湖沼が点在するため給塩の必要もなく無数の沼沢は牧牛を始め獣類の飲水場ともなるため狩猟と釣りの宝庫ともなっている。

亜熱帯地方はその他の地区を総称するのであるがセラードと呼ばれる不毛の草原地帯が大半を占め牧畜にしても小規模なものであり広大な面積の割に肥沃な土地は少なくその上道路も完備していない所が多いため雑作に適する可耕地はごく限られておりマットグロッソ州の日系移住者の大半はこの地帯に点在して小部落を形成しコーヒーを始め雑作，マテ茶，野菜を栽培しているものである。

マットグロッソ州は世界の後進国であるブラジルの中でも特に開発が遅れた州の1つであるがもともと農業面にしても，ポワイヤ（薬草），天然ゴム，バウニーリヤ（香料），マテ茶など総てが野生のものの採取によって開けた州であり，それがここ十余年間の日系人の入植につれて栽培作物の段階へと脱皮しつつあると云うのが現状である。

とは云え彼等の農法にしても未だに略奪農業の域を脱しておらず例えば雑作を例にとっても比較的，土地の肥沃な地帯を選んで山を焼き払いそのまま米，フエイジョン，棉を播きかけると云う典型的な原始農業であり肥料も施こさず，消毒も数回程度にとどめ灌水も行わないもので機械化には程遠いものがある。

又，南部の日系移住者の場合はコーヒーを主体とした雑作農であり同州でも比較的恵まれた環境にあり経済的にも豊かな農家が多い。唯コーヒーは強弱の差はあるが毎年降霜の害に悩まされている状態である。

その他各市の近郊では日系人の野菜作りが多く特にカンポグランデ市の場合は中央マーケットにしろフエイラ（露天市）にしろ野菜（中買人は殆んど日系人で占められている。

その他，ダイヤモンド原石，砂金の産出でも知られているが産業と名のつくものは皆無であるマットグロッソ州の本命は何んと云っても畜産である。

牧牛の数は11,573,000頭を数え（1964年）伯国総数の13.7％を占めており，ミナス・

ジエライス州に次いで第２位の畜牛州であり，これは今後も激増するものと予想される。

しかし畜産加工の面では未だの感が深く牧牛以外の家畜でも馬（第７位　6.6％　）豚（第９位　４％）程度でそれ以外は見るべきものはない。農産物の収量の統計（１９６４　年）ではまず米が４１７,３７７トンで第６位（6.5％）コーヒーが５７,６３６トンで第６位（2.7％）とうもろこし１５１,９０７トン（第１２位），フエイジョン　４９,１６４トン（第１２位），マンジオカ４４８,３０６トン（第１７位）と云う数字である。又天然植物ではマットグロッソ州はかなり高率を示しており，ボワイヤは４８トンでロンドニアに次いで第２位（２９％），マテ茶は6,９４４トンで第４位（5.4％），天然ゴムは1,５９７トンで第６位（4.3％），パラ栗は１３　トンで第７位となっている。

3.　マット・グロッソ州に於ける邦人の歴史と活躍状況

マットグロッソ州に於ける邦人の歴史を見るにはまず沖縄出身者の歴史を知る必要がある。沖縄出身者のこのマットグロッソ州への入植をたどるとその歴史も古く他の南米諸国からでありその主な地域としてはブエノスアイレス近郊（アルゼンチン）サンタクルス近郊（ボリビア）ペルー等である。

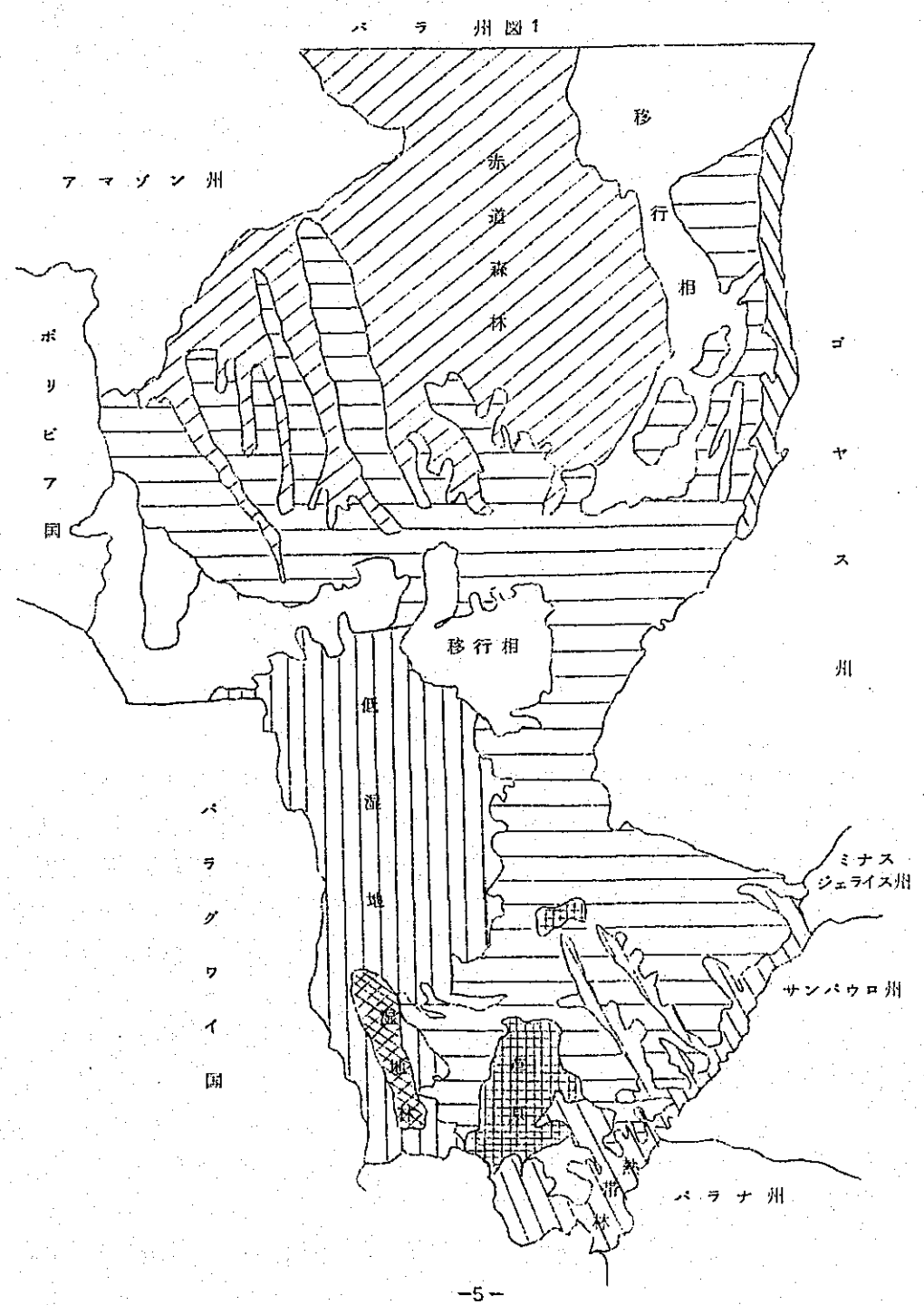
ブラジル国に於いてはサントスジュキア線，バウルー近郊（ブラジル　サンパウロ州）からであり，今回のマットグロッソ州に於ける戦後の農業移住者実態調査の際に同地出身者の二大集団地であるカンポグランデ市周辺及びドラードス市周辺の両地区を中心に沖縄出身者の活躍はめざましいものがある。マットグロッソ州への日本人移住者の最初の進出は１９１０年前後であるがこれがとりもなおさず沖縄出身者によってなされたものであり，これがカンポグランデ市はじめ，マットグロッソ州に於ける日本人発展の先駆者となったのであるその進出の経緯はノロエステ鉄道の歴史と一致する。

即ち最初ペルーに入った邦人はゴム採取労働に従事しつつよりよき土地を求めて南下しボリビア，アルゼンチンを経由して１９１１年にブラジルに入り，丁度建設に着手したノロエステ鉄道（サンパウロ州バウルー市～マットグロッソ州コルンバ間）のコルンバ側からの建設に従事した。

他方サントス港に下船したブラジル向け移住者も割当て耕地に対する不満等から脱耕してこの工事に従事する者が多くこれはサンパウロ側から同鉄道工事に従事するようになった。

この工事が１９１４年完遂するに至りカンポグランデ近郊で感激の解逅をしたのである。これ

2.一(附)マット・グロッソ州植生図



等の人達は工事の完成後も同市周辺に腰を下ろし農業に従事するようになったが1917年頃には既にカンポグランデの街に3戸の邦人とこの街を中心とする近郊に100 家族前後の沖縄出身移住者がいたと云う。

その後1940年頃にかけてカンポグランデを基点にしてパンデラ植民地（1918年）セローラ植民地（1920年）等が出来ると共にテレーノス及びシドロランジャ地方へと邦人は進出して行った。

この鉄道の開通はとりもなおさず，パラグアイ（パラナ鉄橋1928年開通）ボリビアとの交易が開かれた事を意味し以後南部マットグロッソ州及びこれを機会に急激に開発されて行った。

その後日系移住者は近親呼寄せその他の形で漸増してゆき，第二次大戦勃発時には約360家族約2,000人近くの日系人がマットグロッソ州に居住していたがその80% 近くは沖縄出身者である。

戦後昭和27年に日本政府が移住再開して以来，組織的な送り出しが現在まで行われて来たが沖縄の場合はその特殊な事情から移住再開当初は日本政府を経ず主として旅行社又は現地の沖縄協会扱いによる近親呼寄せ，開発青年隊及びカッペン（Companhia Agro — Pecuaria Extrativa Mariopolis LTDA）移住の形で送出が行われて来た。

カッペンについて少し言及するとこの会社（民間会社）が北マットグロッソの連邦所有地に入植を進めるべく沖縄でその土地を売り出した機会に1953 年から入植を開始し1956年度には最盛期で80戸を送出している。

しかし立地条件が悪いことと会社側の援護対策も適当でなかったため，現在ではわずか数戸が残留しているのみである。

現在マットグロッソ州内には戦前戦後を含め表(5)の通り，9,541人（1部推定人口）でありマットグロッソ州を大きく3地区に区別し北部（クヤバ市を中心として）1,444人の全体の15.1%，中部（カンポグランデ市を中心として）5,592人の58.6%，南部（ドラードス市を中心として）2,505人の26.3%である。

又，戦前戦後に大別して戦前7,332人で全体の76.8%，戦後2,209人で23.2% を示しており戦後移住者の奥地への進出が如何に少ないかがうかがえる。

表（17）でみられる如く現在農業を営んでいる戦後移住者でマットグロッソ州への入植も1953年より1960年頃までの8年間位であり近年のマットグロッソ州入植は極めて少ない。現在農業を営んでおり今回の調査対象者になったのは表(5)にみられる通り295 家族（単身16を含む）1,683人であり全体（9,541人）の17.6 %，又戦後移住者で農業に従事していない

者は119家族526人で全体の5.5%と云う極めて少ない数字を示している。

調査対象者を出身県別に見ると表(11)の通り沖縄の70家族433人(25.73%)を筆頭に和歌山県67家族391人(23.23%)，北海道40家族294人(17.47%)山口県26家族142人(8.44%)が多くこの4県で全体の74.9%を示しており他の県はいずれも少ない。

日系人を地域的にみると前述の如く最も多いのはカンポグランデ市を中心とする中部地区であり5,592人中でもカンポグランデ市内に640家族3,200人と中部地区の57.2%で全体の33.5%がこのカンポグランデ市内に居住していることになり，更にカンポグランデ市近郊を含めると日系人は約800家族4,000人と云われマフトグロッソ州日系人の41.9%，約半数近い日系人が集中していることになる。

そしてその内80%が沖縄出身と云われ又マットグロッソ州全体からみると75%の7,155人は沖縄出身者と推定されている。このカンポグランデ市に日系人の親睦団体として沖縄協会カンポグランデ支部とカンポグランデ連合日本人会の二団体があり夫々立派な会館を持っている。

その他の地区にも夫々その地区の日本人会が組織されており，相互の親睦を計っている。

これら日系人の職業別については詳しく調査をしてないがカンポグランデ地区以外の人は殆んど農業が主であり若干商業に従事している。

カンポグランデ市の例を見ると市近郊でそ菜作りが150戸位，フエイラ(露天市場)での野菜売り250戸，市場で野菜売り130戸等であり，市近郊800家族の約半数が農業に関係があり，その他雑貨商9，食料品店8，八百屋8，軽食堂38，薬店4，ガソリンポスト2，建築材料店5，写真店6，美容院18，時計店5，理髪店6，小間物店3，靴店1，呉服店1，等が主でありその他修理業，ホテル業，洗濯業等夫々数軒ありいずれも安定しており事業面でも大きく伸びている人もあり地元発展に寄与している。

4. マット・グロッソ州に於ける"日系子弟の活躍状況"

マットグロッソ州に於ける一世移住者の活躍が即ち2～3世の活躍に基因することは云うまでもない。

日系人9,541人の内60%の5,724人が2～3世の推定人口と云われ農業部門はもとより商

業，医療，教師，政治方面へと伯国社会に於ける重要部門で活躍中でありその進出分野は広い。

いずれの地域でも云えることであるが日系二世達の上級学校への進学率は他国移住者子弟よりもはるかに高く，これは一重に父兄の子弟教育に対する関心の深さを示すものである。

今回の調査でマットグロッソ州の2～3世の伯国社会への進出状況を調査することは出来なかったがカンポグランデ市出身の日系2世の活躍状況を見ると

医師42，弁護士10，薬学士3，牧師1，農業技士2，農博1，工学士9，経済学士2，中大教授3，小学教師7，市会議長1，その他，会計士，銀行員等へ進出し次代をになう人材を多く伯国社会に送り出している。参考までにサンパウロ日本文化協会が調査した全伯での日系二世の進出状況をあげると次の通りである。

ブラジル

4.－（附）　日系二世の進出状況（1966・6現在）

表　1

政治関係	州議員	5名
	連邦議員	4
	市長	1
	副市長	10
	市会議長	12
	市会議員	200
珈琲院評議員		4
LAFTA		1
ブラジル産業組合連合会副会長		1
博士		20
大学関係	教授	10
	助教授	10
	助手	120
行政部	サンパウロ州労働長官	1
	サンパウロ市配給局長	1
	州農務長官秘書	4
	州保安長官秘書	2

新聞記者	（上席）	10名
軍人	陸軍大佐	1
	陸軍大尉以上	6
	陸軍少尉以上	350
	海軍大尉	2
	海軍少尉以上	5
判事		5
検事		2
警察官		45
婦人警官		2
高級官吏	税務署長	1
	教育視学官	3
	税務監督官	20
	土木〃	5
	その他の官吏	1,500
教師	（小・中・高校）	1,200
自由職業	技師（電気，機械，化学，建築）	560
	歯科医	650
	薬剤士	250
	経済学士	350
	医師	450
	弁護士	450
	文学士	200
	映画監督	2
	男優女優	2
	バイラリーナ	2
	フットボール選手	2
	柔道陸上水泳選手	10
	画家	10

	音楽家	3
大学卒業生，在学生	大学卒業者	2,910
	在学者	3,300
	計	12,704 名

4 −(1) マット・グロッソ州の日系人分布状況（北部）

表 2

地域	戦前移住者		戦後移住者						合計	
			調査対象者		その他		計			
	戸数	人数	戸数	人数	戸数	人数	戸数	人数	戸数	人数
Cáceres	29	169	3	15	9	26	12	41	41	200
Cuiabá	44	229	8	45	8	20	16	65	60	294
Alto Paraguai	2	11	3	12	—	—	3	12	5	23
Barra do Burge	7	40	2	10	—	—	2	10	9	50
Rio Ferro	28	179	13	47	—	—	13	47	41	226
Rondonópolis	*45	225	6	29	4	20	10	49	55	274
Pedro Preta	12	71	7	31	1	5	8	36	20	107
Irenopolis	11	72	8	31	—	—	8	31	19	103
Rio Verde	—	—	—	—	1	5	1	5	1	5
Capem	5	42	—	—	—	—	—	—	5	42
Mutum	12	101	—	—	—	—	—	—	12	101
Poxoreu	4	19	—	—	—	—	—	—	4	19
合計	199	1,148	50	220	23	76	73	296	272	1,444

＊印は推定人口で1家族を5人と算定したもの

4－(2) マット・グロッソ州の日系人分布状況（中部）

表　3

地域	戦前移住者		戦後移住者						合計	
			調査対象者		その他		計			
	戸数	人数	戸数	人数	戸数	人数	戸数	人数	戸数	人数
Dois Irmões	22	156	5	33	—	—	5	33	27	189
Quebra Côco	10	50	1	13	—	—	1	13	11	63
Corumbá	7	35	1	1	4	4	5	5	12	40
Vargea Alegre	—	—	29	162	4	20	33	182	33	182
Aquidauana	*30	150	—	—	—	—	—	—	30	150
Terenos	5	25	4	17	—	—	4	17	9	42
Col.Nipo Brasileira	2	10	14	98	—	—	14	98	16	108
Seroura	*25	105	11	67	2	10	13	77	38	182
Casselinho	* 3	15	1	6	—	—	1	6	4	21
Prousa	* 3	15	2	17	—	—	2	17	5	32
Mato Segrêdo	15	75	7	48	—	—	7	48	22	123
Jaragua	3	15	6	34	2	6	8	40	11	55
Bandeira	*22	110	2	12	2	10	4	22	26	132
Anjico	7	21	3	15	1	5	4	20	11	41
Rajado	1	5	4	20	—	—	11	20	5	25
Cascudo	*38	190	11	80	—	—	2	80	49	270
Remonta	5	15	2	10	—	—	2	10	7	25
dincoln	3	27	2	8	—	—	2	8	5	35
Nas Voltas	* 4	20	2	7	—	—	—	7	6	27
Imbirussee	3	19	—	—	—	—	—	—	3	19
Rio Negro	90	450	—	—	—	—	—	—	90	450
大和植民地	*10	50	—	—	—	—	—	—	10	50
Campo Grande 市内	*600	3,000	—	—	40	200	40	200	640	3,200
Bom Fim	14	106	1	10	—	—	1	10	15	116

地　域	戦前移住者		戦後移住者						合　計	
			調査対象者		その他		計			
	戸数	人数	戸数	人数	戸数	人数	戸数	人数	戸数	人数
Tres Barras	* 5	15	—	—	—	—	—	—	5	15
合　計	927	4,679	108	658	55	255	163	913	1,090	5,592

* 印は推定人口で1家族を5人と算定したもの。

4 −(3) マット・グロッソ州の日系人分布状況　（南部）

表　4

地　域	戦前移住者		戦後移住者						合　計	
			調査対象者		その他		計			
	戸数	人数	戸数	人数	戸数	人数	戸数	人数	戸数	人数
Ponta Porã	1	5	1	6	17	85	18	91	19	96
Nova Andradina	20	100	1	3	—	—	1	3	21	103
Vila União	5	25	1	4	1	5	2	9	7	34
Gloriade Dourados	18	90	2	14	—	—	2	14	20	104
3ª linha	5	25	36	217	3	15	39	232	44	257
Vila Vicentina	14	70	10	68	1	5	11	73	25	143
Fatima do sul	15	75	2	12	—	—	2	12	17	87
Barrerão	8	40	19	135	—	—	19	135	27	175
Laranja dima	13	65	6	40	—	—	6	40	19	105
Ita Porã	30	150	6	26	—	—	6	26	36	176
Panambi	4	20	5	25	—	—	5	25	9	45
Vila Vargas	—	—	1	5	—	—	1	5	1	5
Curpai	1	5	10	55	1	5	11	60	12	65
Café Porã	22	110	5	22	—	—	5	22	27	132
Nauirái	20	100	4	34	1	5	5	39	25	139
Fagenda Caiua	* 12	60	7	26	—	—	7	26	19	86
Dourados市内	113	565	21	113	17	75	38	188	151	753

地　域	戦前移住者		戦後移住者						合　計	
			調査対象者		その他		計			
	戸数	人数	戸数	人数	戸数	人数	戸数	人数	戸数	人数
合　計	301	1,505	137	805	41	195	178	1,000	479	2,505

＊印は推定人口で１家族を５人と算出したもの。

4 −(4)　マット・グロッソ州の日系人分布状況　（総合計）

表　5

地域	戦前移住者				戦後移住者							
					調査対象者		その他		計			
	戸数	%	人数	%	戸数	人数	戸数	人数	戸数	%	人数	%
北　部	199	73.2	1,148	79.5	50	220	23	76	73	26.8	296	20.5
中　部	927	85.0	4,679	83.7	108	658	55	255	163	15.0	913	16.3
南　部	301	62.8	1,505	60.1	137	805	41	195	178	37.2	1,000	39.9
合　計	1,427	77.5	7,332	76.8	295	1,683	119	526	414	22.5	2,209	23.2

地　域	総合計			
	戸数	%	人数	%
北　部	272	14.8	1,444	15.1
中　部	1,090	59.2	5,592	58.6
南　部	479	26.0	2,505	26.3
合　計	1,841	100	9,541	100

4 −(5)“マット・グロッソ州日系人分布状況”

（表説明）

戦後移住者についてはすでに他の地域概況に述べられているため戦前移住者を主体とした分布概況となる。

戦前移住者はカンポグランデ市を基点として各都市に散在しているが主として農業に関連性を持っている職業に進出している。

北部のカセレス29家族の戦前移住者を見ると農業17，精米業2，その他10，となり戦後

移住者の非調査対象者の9家族の職業内容は自動車修理工3，写真店2，薬草研究2，その他2，となっている。

北部地域及びマット・グロッソ州の主都であるクヤバ市において44家族のうち農業者15家族34.1%であり野菜仲買商人7，軽食堂3，写真店2，時計修理店2，その多12，である。

戦後移住者非調査対象者8家族は洗濯店2，時計修理1，電気器具修理1，食料品店1，その他2，となっている。リオ・フエロに於いての戦前移住者28家族は全て農業従事者でゴムビメンタを栽培している事はすでに地域概況で詳細に述べているのでこの項目では説明を省略する。

ロンドノポリス地域に於いての戦前移住者45家族はその過半数23家族51.1%が農業であり商業12家族，工業7家族，その他3家族となっている。

北部に於いてはクヤバ，カセレス，ロンドノポリス，リオフェーロの4地域に北部の戦前，戦後移住者共集中しておりこの地域のみで北部に於いての72.7%の日系移住者が居住している。

以上が北部日系人の主な居住地域及び職業であるが，特に北部の独特な職業として薬草採集者，金鉱採掘者などに従事している移住者が見られる。

表(5)を見るにマット・グロッソ州中部に日系人の大半58.6%が集中しているがその中でもカンポグランデ市内に640家族58.7%が居住している。

戦前移住者が多い地としてリオ・ネグロ90家族，アキダウアナ30家族となるが，この両地域に戦後移住者は居住していない。

カンポグランデ市周辺に於いては，10ケ所余りの植民地があるがその中でもセローラ，カスクードなどは戦前戦後移住者の農業の集団地として知られており，最近戦後移住者の集中植民地となっているところはコロニア，ニッポ，ブラジル（日の出植民地）である。

数年前までは相当数の移住者が居住していた植民地としてはカセリィニョ，インビリスー，リンコーンなどの地域をあげることが出来る。

マット・グロッソ州中部に於いて戦前戦後移住を比べるに戦前62.8%，戦後37.2%であってドラードスを中心としたその周辺に散在している。松原植民地，ポンタポラン市，クルバイ植民地などは戦後移住者の集団地でありこれに反してノーバアンドラジーナ，グロリアデドラードス，ファチマドスール，イタポランなどの地域に於いては戦前移住者が多く夫々農業及び商業などに従事している。

北部，中部，南部共全ての地域において夫々日本人会，青年会などが結成されており戦前，

戦後移住者及び一世，二世などの親睦をはかっている。

5. マット・グロッソ州に於ける日本語教育

マットグロッソ州に於ける日本語教育の現況について述べる前に，先づ同州に対する日本人移住者の進出状況をみると次の通りである。

記録によれば，マットグロッソ州への最初の日本人移住者の進出は1908年であり，その時は僅かに一家族であったが，翌年には二家族となり，その後漸増して行ったものの，1958年においてすらやっと569家族であり，現在の人口に達したのは，こと最近の数年である。

同州の移住者の動態は，戦後計画的に入植した数ケ所の移住地を除いては，その殆んどが戦前の移住者（その殆んどが沖縄出身者）であり，且つ，初期のペルーよりの転入移民以外は，その大部分が，主としてサンパウロ州内各地からの転住で，同州でのよりよき生活を目指しての進出となったものである。

ブラジルにおける日本語教育の歴史を眺めて見ると，戦前の，大和魂涵養の精神的媒体としての日本語教育から，戦後の，日本文化の伝達体としての日本語教育へと，その目的の大転換が見られ，又，その実施方法も，日本政府の人的，経済的両面での積極的援助を受けていた戦前に比べ，戦後は，現地日本人会を中心とした，その経済能力の範囲内での実施へと，全面的な変化が見られる。

日本語教育を実施する上に必要な諸条件としては，

① 日本語教育に対する要求の度合

② 移住者の経済的基盤

③ 教師適格者の有無

の三項目に大別されよう。理論的には，これらの三条件が完備した時に，初めて日本語教育が実施に移されるわけであるが，現在既に実施されている各地区が全て上記の三条件を完備しているというわけではなく，その実施を支えている最大のものは，①の日本語教育に対する強い渇望であろう。①が他の②，③を押え得る程強い場合，他の②，③の条件はそれ程重視されずに①に牽引されて日本語教育が実施に移されていく。尤も，此の時は内容的には満足すべきものであるとはいい難いが，その熱意は他の不備を補って余り有るものがある。

ところでこの要求度は，その日系集団地の世代構成，その稠密度によって大いに差がある。

全般的に云える事は，二世にその主導権を譲った集団地では，その要求度はかなり低くなる。又極く新しい移住地の場合も，当初の五，六年は，その思考の伝達に不自由しないのと，経済力の影響もあってその要求度は比較的低い。その他，人口の　密度もその要求度に大きく影響し，これは農村地帯に特に強く現われる

上記の諸因子を考慮しつつマット・グロッソ州の日本語教育を眺めると，実施出来ない地区は，上のいずれかが原因となっている。

マットグロッソ州内の日本人集団地としては，ドウラードス市を中心とする地区，イタポラン，アキダウアナ，カンポグランデ市及び周辺地区，ロンドノポリス，トレス・ラゴアス，リオ・フェロ等が挙げられ，又，実際これらの各地には日本人会も結成されて各自の文化活動を行なっているが，日本語教育を行なっているのは，カンポグランデと，リオ・フェロの二地区だけであった。（1965 年日語普及会調査）然し，今回のマットグロッソ州雇用農実態調査によって，これら以外の地区でも実施されている事が判明した。

以下，地区別にその現況を述べて行く。

1. 松原移住地（Fatima do sul ・ファッチマ・ド・スール）

本移住地は入植後現在まで13 年を経過したが，最近，漸く，青年会で日本語教育が採り上げられ，毎日曜日，日本人会館に集まって読書会を開く様になった。然し，幼少年に対する本格的な日本語教育は未だ行なわれていない。これには，現地の伯語教育が大きく影響しているのである。即ち同移住地の学校は，移住者達の協力で設立され，教師も有資格者を雇っているが，一人で幼稚園から小学校4年までを担当しているために手が廻りかね，当然，宿題の比重が大きくなり，下校後も，その遂行に追われて日本語教育に充当する時間の余裕がないという現況である。

2. グロリア・デ・ドウラードス（Glória de Dourados）

同地日本人会の世話で，女子青年が教師となり，日語普及会編纂の教科書を使用して開始したばかりである。その対象は幼少年となっているが，野球・柔道等日本人会が行なう青少年教育の一環として採上げられたものである。この地には戦後渡航者は2家族で殆んどが，戦前渡航者及び，その2・3世であるが，第一回笠戸丸の移住者も居て，2世といっても，年令的にはかなりの年配の人も居り，日本人会長に就任するなど，その活動に深い理解を示している点で特徴がある。

3. ノーバ・アンドラジーナ（Nova Andradina ）

本移住地も大部分が戦前渡航者及びその2世である。しかし，ここでは，日本語教育は，中

断されている。一時は，戦後渡航者の奥さんである2世の人が，幼少年を対象に，日本人会の援助を受け，日語普及会編纂の教科書を用いて実施されて来た。然し，同女の出産に依る退職後は，後継者が見当らない事もあって，再開を望む積極的な空気は感じられない。

4. ポンタポラン（Ponta Porã）

パラグァイとの国境に位置する町であるが，この町にはパラグァイから転入した者が多く，ポンタポランで商業をやりながらパラグァイ側に農地を持っているという人も居る。こうした事情もあって，日本語教育はパラグァイ側と一緒に行なっているという事であったが，詳細は不明である。

5. カンポグランデ（Campo Grande）

同市では父兄により日本語教育が熱心に行なわれている。即ち，日本人会館内に小学生を対象とし，東本願寺の僧及びその夫人が教師の任に当っている。1965 年度に日本語普及会が行ったアンケートによると，その内容は次の如くである。

表　6

性別	人数(名)	年令(才)	人数(名)
男	57	6	4
女	56	7	4
計	113	8	28
世代別	人数(名)	9	26
1世	7	10	24
2世	45	15	7
3，4世	60	16	3
その他	1	21才以上	2
計	113	0～5才（幼稚園部）	15
		計	113

学童授業時間数　　週に9.5時間

教科書：日語普及会編纂のもの及び柳田国男編のもの。

月　　謝　　1人当りCR$ 1,500

教育給料　　CR$ 100,000（別に宿舎を提供）

授業内容

課　目	日本語	唱　歌	舞　踊	体　操
時間数	6	1	1.5	1

行事内容：運動会，学芸会，遠足，父兄会

6. ロンドノポリス（Rondonópolis）

毎日曜に一人の教師が20人の生徒を対象に実施している。

7. クイアバ（Cuiaba）

同市では文化協会が中心となって実施している。

約40人の生徒を対象に日語普及会編纂の教科書を使用して毎日曜日に開かれている。

8. リオフェーロ植民地（Rio ferro）

本移住地は数多くある日系人集団地の中でも特に僻地である点で知られて居り，全く陸の孤島の感が深い。ここでは青年会が中心となって日本語教育にあたっている。即ち23人の生徒を対象に3人の青年が毎土曜日に2時間づつ授業を行なって居り，費用は月額10コンドス程度であるが，全て青年会の費用で賄われている。

以上，各地の例を挙げて来たが，全体的に云える事は，カンポグランデの如き大集団地は別として，他は，いずれも不完全な内容で行なわれて居り，既述した必要条件を完備していない例が多い。しかし，反面，この現状こそ，或る意味では，ブラジルに於ける日本語教育の真実の姿――上から与えられたものでなく，自分達の現状を考えた上での実施方法を取っている点で，一を示していると考えるのである。

序論にも述べた様に，戦後の日本語教育は，その目的を大転換して，① 一世と二・三世の意思伝達の媒体，及び，② 二・三世が日本文化を理解するための手段の二点にしぼられて来ると思われるのであるが，カンポグランデの例から云える事は，あれだけ組織立てて日本語教育を実施しても，日本語による一世から二・三世への意思の伝達は，それ程スムースには行なわれていない実状であって，日本語のみによる意思の伝達は全般的に眺めて，将来益々困難になって行くものと考えられる。

こう考えると，個々の父兄がよほど注意しない限り，将来は①の目的は段々その影を失って行き，②の目的をより強く表面に出して行かねばならないものと考える。

即ち，個々の家庭内，或は広く日系，コロニア全体の主導権が，漸次二・三・四世へと受け継がれて行けば行く程，彼等日系人子孫の，ブラジル人社会への同化は強まって行くわけであ

るが，それに比例して，日本及び日本語は彼等の身辺から遠去かって行く事になる。

ただ考えられる事は，日系子孫の知識人が，ブラジル人知識社会と交流を持つ様になり，その先祖の国である日本の諸事情を紹介，説明する必要に迫られる。そういう際に備えて教養として身につけて置くという方向に進む様になると考えられる。

この傾向は，新しい移住者の進出の見られない地域に将来，当然起って来ると考えられ，マット・グロッソ州もその例外ではないと考えられる。

つまり，日系一世にとっては母国語であった日本語もその子弟にとっては外国語と化して行くくという事で，特に，日本語教育を実施する者にとって，この事象を冷静に受け入れる必要がある。

6. マット・グロッソ州の“教育事情について”

教育問題は低開発地域の最も大きな問題の一つで伯国政府でも力を入れているが土地の広大と人口の稀薄とそれに伴っての国民性及び現地伯人の向学心不足が基因して教育進展を阻害している。

マット・グロッソ州でも，クヤバ市，カンポグランデ市等の中心都市はサンパウロ州と変わりない教育環境も完備されているが，一旦農村に足を踏み入れると事情は全く変り深刻な教育問題が生じている。この事が向都離村の一原因にもなっており農村問題，農業問題とも大きな関係をもっている。農村部では中学校を出た人がそのまま教師の資格有無を問わず小学校の教師の職についていることもあり，ややもすると奥地では俗に云う寺小屋式的な教育が行われているところもある。教育内容については移住地の児童数が各学年別に1学級を編成するに足りず，勿論1学年に1学級と云う学級形態も取られていないため1学年から4学年までの複合学級の場合が多く充分な教育が出来ない状態である。

例えば，共栄植民地の小学校には2人の教師がいるが学年別に生徒を受けもつようなことはなく1学年から4学年までの生徒を2分して複合学級制にしている。この場合当然学年別の授業時間は短縮されざるを得ない。

かかる現状にあって父兄及び教師の双方から不満が起っているが結局は父兄の方が懐柔策に出る場合が多い。

松原植民地の場合は小学校には1人の教師しかおらず既に子供をもつ女性である。一応師範

を出ていると云うので日本人会の方で依頼し校舎，宿舎を建設して呼び寄せた形になっているが1学年から4学年までの生徒を引き受けるのは重荷と云う理由で生徒1人当り月1コントの謝料を父兄からとっている。このため近所の現地伯人の子弟は経済的理由により登校率は低下している。

生徒数が少ない事は立派な教師が派遣されない原因にもなる。

移住者の子弟が日本の小学校を卒業して移住して来た場合，現地に於いては小学校1学年より開始しなければならず，その場合勿論言葉は未知のもので初めて学ぶものであるが，授業内容は既修のものであったりすることから学習への不満足が起り休学している例もありそのまま学校を放棄する場合もみうけられる。移住地が殆んど集団移住の形態をとっているため学校では教師が日本語を話さないよう注意しているが生徒同志集った場合及び帰宅し一歩家庭内に入ると日本語が話される生活にあるため伯語の習得に大きな障害となっている。

日系子弟は数学系統は一般的には良い成績を納めているが伯語（国語）に於いては悪く現級に留る生徒の多くは伯語成績不良が原因となっている。小学生の場合自宅通学が多いが中学校以上になると近くの中心都市に寄宿生活又は下宿しながら教育を受けることになる。

ドラードス市やアキダウアナ市の方にはインデオ教化のための学校があり立派な教育のため水準は高くそれ故にこの学校に入れたい云う希望者の人が多かった。

日系移住者が，都市周辺に於いてそ菜栽培を行う理由としては小資本で営農可能の点もあるが奥地においては優秀な教師もおらず設備も不完全なため満足な教育も出来ないことが大きな一原因でもある。

7. マット・グロッソ州の“治安状況について”

奥地農村地帯に於いては治安体制は確立されていないが一般的に見て治安は安定していると云える。

本年当初（1966年）に松原植民地に於いて惨事が発生したが入植以来（13年経過）勿論はじめての事でありその件を除いたら問題にすべき大きな傷害事件はなく至って平穏であるとの地元移民者の声であった。点在している各都市に於いては一応警察署が存在して治安維持に当っていて平安であるが時々空巣等「コソ泥」が侵入し田畑及び家具類を荒すこともあり，又雇用人夫との賃金問題でいざこざがあるがそのことでその地域の治安を乱すこともなく問題

にすべき程ではない。

なお一歩農村地帯に入ると駐在所も存在しない地域もあり各地方の有力者に警察権を与えて治安維持を保っているところもある。

現地伯人使用人の多い地域に於いては娯楽設備も整っていない関係から，飲酒し時々伯人同志傷害事件を起すが日系人はそれら現地伯人の傷害沙汰に巻き込まれる事は見られない。

リオ・フェーロ地帯に於いては天然ゴムの採液のためセリンゲイロと称するゴム採液夫が入り時々傷害事件を引き起し治安を乱すこともあるがこれらも彼等伯人同志内だけの問題である。

日系人と直接の関係はないが，セリンゲイロ及びガリンペイロ（鉱石採掘人夫）は現地伯人の中でも兇暴な人達の職業と云われている。

その他パラグアイ国境のポンタポラン市には伯国騎兵連隊及びボリビア国境のコルンバ市隣接のラダリオ市に陸，海，空軍が駐屯し夫々国境警備に当っている。

なお，カンポグランデ市には第9陸軍管区があり，中央西部の軍事治安に当っている。

8. マット・グロッソ州の保健衛生事情について

未開発地帯の多いブラジルには特殊疾病と呼ばれる風土病の種類も少なくない。

移民の入植歴も古い。比較的に開発の進んだサンパウロ州の一部，パラナ，サンタカタリーナ，リオグランドスール各州の地は全体が発生地帯でありかっては各地に蔓延が見られた。

近年奥地開発が進むにしたがって予防も普通化し医療設備も備わって来たので被害は激減したものの未だに完全撲滅とまではいっていないと云うのが現状である。

サンパウロ州の奥地でも日系の初期開拓者は大半がいずれかの風土病に冒された経験を持っているがマット・グロッソ州でも北部の入植者は現在でもその危険性をもっていると云っても過言ではない。

南部のカンポグランデ，ドラードスの周辺の場合は殆んど罹病者は見られず，ごく一部の者が川釣りに行ってマラリヤに罹った例が数えられる程度である。

マット・グロッソ州全体については北部の場合は年に一度（地方によっては二度）の州政府からの巡回診察が定期的に行われる他，日系人の集団地には，事業団より委託を受けた日本移民援護協会の医師が年に一度巡回して診察にあたっている。

北部の場合は特に奥地に病院はおろか薬店すらないのが普通なので最少限度の薬品は家庭常

備品として必須のものとされている。

日系人は一般に衛生面の常識は持っているため比較的罹病率は低いとはいえ，仕事に熱中する余り食生活が軽視しがちで栄養がかたより易く体力が弱った場合風土病に罹る例は少なくない。

これに対するにマット・グロッソ州の保健衛生施設はと云えば病院数はわずかに34（うち7院がクヤバ市）でブラジルでも連邦直轄区を除くアマゾーナ（28），ゴヤス（29），パラ（31），マラニョン（34），ピアウイ（34）の各州と並んで病院数の少ない州となっている。

なお医者の数では258人でアマゾーナ（57人），セルジッペ（95人），ピアウイ（98人）リオグランデドノルテ（137人），マラニョン（157人），パラ（177人），エスピリットサント（190人），アラゴアス（221人）に次いで少数である。

ブラジルの風土病のうち最も恐ろしいのはシャーガス病（バルベーロ病）といわれているがこれはバルベーロと云う油虫に似た昆虫が媒介するもので赤血球を破壊し神経系統を冒し除々に死に至らしめるものである。

シャーガス病は医学の進歩した今日でも決定的な治療法は発見されておらず根治は無理とされている。

唯一の予防対策としてはB．H．C．剤でバルベーロの侵入を防ぐ他ないと云う難病で特にミナスジェライス州に多く発生が見られ，他マラニョン，ピアウイ，バイア各州及びサンパウロ州の一部に流行したがマット・グロッソ州では僻地の割りには発生率が低い。

マット・グロッソ州で特に猛威をふるったのは悪性マラリア（マレイタ）で熱帯地方はかってはマラリヤの巣であり漸次駆逐されつつあるものの未だにリオフェーロ植民地などには突発的に発生している。

マラリヤの伝播はマラリヤ蚊（アノフェレス蚊）によるもので主に湿地又は濁った水溜りに発生するものでこの蚊にさされると24時間位に間歇熱の発作をおこす。

急性の場合は応急手当で治療出来るが悪性になると2～3年間マラリヤ菌が潜伏するので完治し難く，体が衰弱した時に再発するおそれが多分にある。

それにこの病気に数回罹ると十二指腸病を併発するのが常である。

日系移住者の歴史を見るにマラリヤの犠牲者の数は無数であり当時は効果的な治療法もないままに病死者も頻出した。

しかりキニーネが発見されて以来，特効薬も種々と新しいものが出ており現在ではプラチノール，カモキン（錠剤）を一週間に一粒服用しておればほぼ完全に予防出来るものと云われて

いるが濫用すると副作用があり肝臓を害することがある。

マラリヤの流行地帯は，パラ，アマゾーナス，マラニョン，ゴヤス，マット・グロッソ，バイア，ペルナンブーコ各州の広大な地域に及び特にパラ，アマゾーナスなどの北部の熱帯地に行くほど悪性を増すものと云われている。

又マラリヤの予防対策としては次のようなものが考えられる。

(1) 家屋を病原菌の発生地である小川，低湿地から遠ざけること。

蚊の飛朔能力は平地で1.4km　45度に近い傾斜だと約500m　なのでそれ以上離れた地点に家を建てることが望ましい。

尚この蚊は地上2m以上の高度では飛朔し得ないので床を高くするのも一つの方法である。(しかし以上の条件に適った住宅は程んど見当らない)

(2) 少なくとも年に一度の消毒を実施すること。(B.H.C,D.D.T)

(3) 夜熟睡出来るような環境を作り常に体を丈夫に保っておくこと。

(4) 予防薬を家庭或いは診療所に欠かさないこと。

フェリーダ・ブラーバは日系人の間では森林微毒の名で通っており，ブラジル諸州のうちでは特にサンパウロ州の奥地に多く発生した。

ピリグイ蚊(フレボトムス)が媒介し特徴は皮膚の粘膜を傷つけ病勢が進むと鼻梁が落ちこんだり耳が消失したりする。

マット・グロッソ州でも少しではあるが発生が見られ原始林の開拓に従事する者が罹病しやすく治療薬はフーアキーナ(筋肉注射)が最新のものである。アミーバ赤痢もブラジルの農村に多く見られる病気であるが，経口伝染であり，赤痢菌は主として溜り水に発生する。

腸壁を冒すため血便が出て大便が非常に近くなるのが症状で発熱はないが，栄養を吸収しないため体が急激に衰弱してくる。

一般には命にかかわることはないが気をつけないと慢性になり易く稀に内臓膿瘍を併発して死ぬ例もある。予防としては生水は濾過したものを飲用することが第一であり治療薬にはエメチーナ，ジオドキン，ブラキノールなどがある。

その他黄熱病，肺結核，癩病，ペストなどの疾病は現在では殆んど撲滅されており，又治療薬も効力の強い新薬が相次いで発見されているため不治の病いではなくなっている。

寄生虫病も農村では看過出来ないものでそれ自体は大した病気ではないにしても体力が弱まった結果熱帯病を誘発する恐れがある。

かかる風土病にもまして憂慮されているのは農薬中毒である。

これは近年農作物の病害の蔓延がひどくなり抵抗力が強くなっている病原菌に対して農業者も次第に濃度の強い農薬を使用せざるを得なくなった結果，年々増加の傾向にあるものである。

マットグロッソ州は北部では雑作農が多く消毒回数も少ないため弊害はほとんどないがアンボグランデ，ドラードスなどでは2～3羅病者が見られた。しかしこれらの風土病さえ完全撲滅がなり保健，衛生事情が好転すればマットグロッソは必ずしも住み難い州ではなく，むしろ健康地と云えるほどである。

真夏の暑さも日蔭に入ると涼しいし雨期にあたるため曇天の日が多いので想像するよりしのぎやすい。

ともあれ移住と保健衛生とは切っても切れない密接なつながりがあるものであり今後の完全予防対策の確立が望まれる。

9. マット・グロッソ州の“金融事情について”

全ての移住者が最も痛切に感じているのが営農費に対しての融資機関問題である。

昨年のマットグロッソ州移住者の借入先機関は第16図に見られる通りであるが，Bauco do Brasil の利用度が件数及び金額でも最も多く件数はマットグロッソ州全体の（61.9%）金額を見ても（72.1%）を占めている。

バルゼアアレグレ移住地は事業団の直営移住地のため事業団融資も活発に利用している事は第40表を見て解るがその他クルバイ（和歌山植民地）及びリオ・フェーロ等にも利用されている。この度の奥地集団移住地入植者に対し積極的融資援助を行うとの事業団の方針は多くの移住者に期待されている。

本年ドラードス市に於いてのBauco do Brasil が同地区外国人に対し融資の一時中止を行い現地日本人会及び現地公館のはたらきかけで一応解決したが，国境近くに在するため今後もこの様な事態が発生する可能性もありその際の事業団の融資に期待かけるのは大であると思う。

なお，ドラードスの地域は肥沃であり多角経営面に於ての利用も可能で雑作を主体とした永年作物養豚の導入等の希望者が多くそのための融資を希望していることが見られた。

コーヒー地帯に於いてはコーヒー生産過剰のための国際価格暴落が続き不良コーヒーの抜根奨励を伯国コーヒー院が行っており，全体に対し40% 以上の抜根は400 クルゼイロス39%

以下25%までは320クルゼイロス24%以下15%までは260クルゼイロス夫々コーヒー1本につきBanco do Brasil より支払われる。

ナビライ地域のファゼンダカイウアに於いてはBanco do Brasil の利用はマット・グロッソ州の30.8%の利用を占めているが第40表これは会社組織として2つの会社が入植しているためで個人的には利用は行われていない。

カンポグランデ市周辺は戦後移住者も多いため融資借入希望者も多数である。

そ菜栽培者としての借地農，分益農，雇用農が大半（80.8%）を占めている関係で土地購入の独立農として踏み出すことが第一目的となるが市周辺は地価1 alg 当り3,000 コントス前後の高価格であるためとりあえず借地農において蓄積し土地購入へと目指していくことが望まれるがそれにはより一層の生産向上を必要とするため耕運機，動力噴霧機等の機械化導入への融資が最も必要となってくる。

なおそ菜栽培はフェイラ（市）及びメルカード（市場）にて生産物販売を行うが運搬はトラクター・トラック，荷馬車であるが輸送機関を所持していない移住者は便乗し運搬に当っているが1回の運賃は往復10コント前後であり，フェイラは週2回のため月額80 コント以上の運賃支払いが出るため小型トラックの必要性の声も聞かれる。

リオフェーロ植民地の金融事情を見ると入植歴も既に10年を経過し且つ全員が地主であるにも拘ず銀行からの融資利用は全然見られないがその主な原因としては次のようなことが考えられる。

(1) 至近都市である。クヤバ市まで580kmと云う遠隔地であり，その上定期的な交通機関もないため現地調査が不可能なこと。

(2) 栽培作物もゴム，ピメンタの永年作物と云う特殊なケースであるため回収が永引くものと危惧されること。

(3) マット・グロッソ自体が畜産州であるため各銀行とも牧畜用の営農資金に主力を置いていること。

(4) 州政府からの本地権交付が遅れたこと等である。

唯一の例外はアマゾン銀行が天然ゴム用に融資されているものであり，同植民地内の天然ゴムの採取権利は，松原義和氏が所有しておりセリンゲイロ（ゴム採取人夫）を40人余り雇用している。

採取液されたゴムはアマゾン銀行に収められるが収益の大体$\frac{1}{3}$を人夫に歩合として支払い$\frac{1}{3}$を採取業者（リオフェーロの場合　松原氏）残りの$\frac{1}{3}$を銀行が徴収するものである。

そういう不利な金融事情にあり営農資金面でも逼迫していた。リオフェーロ植民地に移住事業団の融資が出たのは1966年5月でありリオフェーロ組合に39,900コントスが貸し出されてどうにか再建のメドがついた現在である。

なお植林ゴムの採取が始まるとアマゾン銀行からのかなり大巾な融資も期待出来るであろう。現地金融機関利用について連邦植民地である松原植民地に入植した移住者は一応入植と同時に仮地権を受け10年後の1963年に本地権を取得したが，法的効力を発揮出来るのは本地権取得より10年後の1973年のため土地売買は法的に禁止されているが（実際には行われている）当本地権取得者は保証人を必要とせず融資借入は可能である。

仮地権の場合は保証人を必要とする場合と不必要の場合もありその点は個人差によるが保証人は市の有力者が主に保証している。

一般的に他の市中銀行に於いては営農実績の80％までは無担保で貸出しを行っているが利子は短期の場合平均して月3.4％前後でありBanco do Brasilの利子は月1％である。

借入れまでには数度足を運ばなければならず市より遠距離にある移住地の場合時間のロスと滞在費とは大きな損失となっている。

以上のことを総合するに北部地域に於いての融資借入希望の主な理由は雑作を主体とした養豚及び永年作物の多角経営面への営農拡張である。

中部地域に於ては土地購入に先だつ生産向上のための機械及び車輛導入である。

9－（附） 為替相場 推移表

表 7

平均為替レート（売り値）1ドル当りのクルゼイロ

年度	平均	最高	最低
1946年	19.34	—	—
1947年	18.73	—	—
1948年	18.72	—	—
1949年	18.72	—	—
1950年	18.72	—	—
1951年	18.72	—	—
1952年	18.72	—	—
1953年	43.32	58.07	37.97

年　度	平平　均	最　高	最　低
1954 年	62.18	78.32	47.33
1955 年	73.54	92.64	66.54
1956 年	73.59	87.15	65.35
1957 年	75.67	95.54	65.15
1958 年	130.06	169.82	91.99
1959 年	159.83	213.99	132.83
1960 年	189.90	214.41	185.48
1961 年	278.66	347.86	205.63
1962 年	390.52	499.89	318.00
1963 年	577.66	620.82	475.00
1964 年	1,293.42	1,850.00	620.00
1965 年	2,000.00	2,225,00	1,820.00
（8月1日現在）1966 年	2,220.00	2,225.00	2,210.00

10.　“マット・グロッソ州に於ける食生活事情について”

全般的に見て食生活は充分な栄養素を摂取しているとは云えない。入植当初は日本食を食しているが次の項目により除々に和洋折衷へと変る傾向にある。

1）滞在年数の増加

2）伯人農夫の使用度合

3）労働の度合

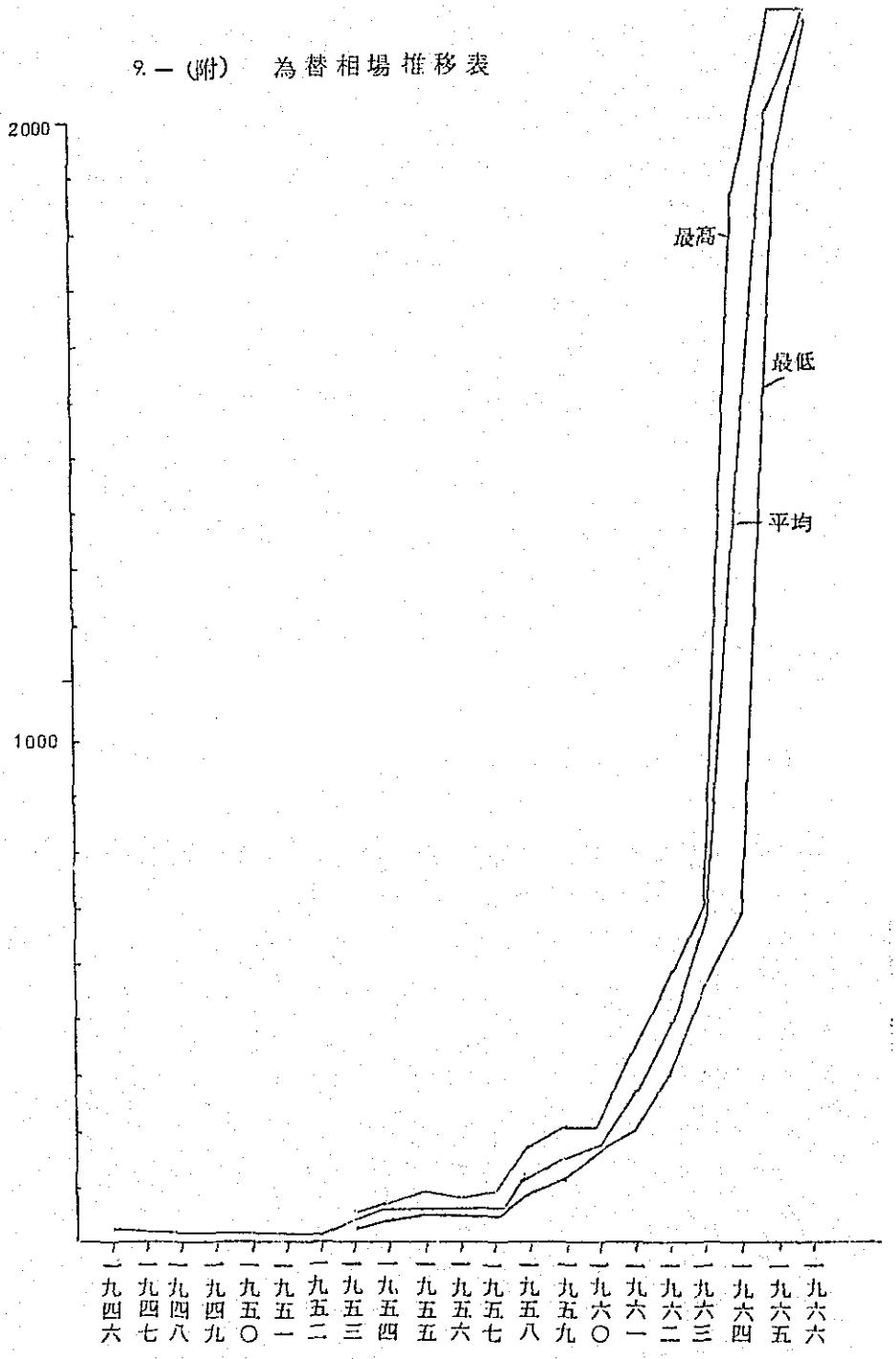
等になるが伯食と云ってもフェジョン及び脂肪分の摂取量が多くなるだけで完全な伯食生活でなく米食を主体とした食事である。

移住者の食生活を見る場合には雑作農及びそ菜農の2つに大別することが適切である。

雑作農の場合は主食類共自給自足を行い購入食品は調味料及び魚類（川魚）程度である。勿論そ菜類も栽培しており日系移住者のそ菜摂取量は非常に高い。

そ菜栽培者は主食及び調味料の購入を行い栽培作物の関係上野菜摂取量は高いが地域的にみて一方的にかたよっている地区もある。

9.－(附)　為替相場推移表


2000
1000
最高
最低
平均
一九四六
一九四七
一九四八
一九四九
一九五〇
一九五一
一九五二
一九五三
一九五四
一九五五
一九五六
一九五七
一九五八
一九五九
一九六〇
一九六一
一九六二
一九六三
一九六四
一九六五
一九六六

なお，魚類は河川地域及びその都市周辺は購入も出来，食卓を賑わしているが一部奥地農村地帯に於いては魚類は殆んどなく動物性蛋白は自家用に飼育している鶏，豚等により補っている実状である。

肉類としては動物性蛋白を摂取しているのは前述の通りであるが主に不足していると見られる栄養素は混布，ひじき，ほうれん草等に含まれているヨード分である。

その他，鶏卵，牛肉，魚貝類等に含まれているカルシュウム分は地域により異るが殆んど摂取されていない。

鶏肉，豚肉は自家用として飼っているもののみであり購入してまで鶏肉を食していない。

地域別に食生活を一見する場合例へばパルゼアアレグレ移住地は移住者が殆んど養鶏農のため鶏卵及び鶏肉の摂取量は多いが他の動物性蛋白質は僅少である。

なお，コーヒー栽培地帯に於いては緑茶，紅茶の飲料は殆んどなくコーヒーが愛飲されている等であり一般的に見て移住者は食生活に於いて栄養的に偏よる傾向にあるため充分な指導が必要である。リオフェーロ地区に於いては酸性土壌の地で瘠地ではあるが肥料を施しそ菜類を栽培し自給程度は補っている。

なお雑作栽培は地質地味で出来ずそれに伴って家畜飼育は不可能であるため必要な動物性蛋白質は周囲の密林に棲息している獣肉及びパラチナンガ川での魚肉で賄っている状態である。

以上のような食料事情のため後進地域援助方の「進歩のための同盟」より昨年小麦粉，パン粉，豆粕，食用油等.70トンの援助を受けたがサントス～クヤバ間は伯国政府の運賃負担であったがクヤバ～リオフェーロ間は入植者の負担になるため1k当り130クルゼイロスの運賃が捻出できず現在までに20トンを植民地内に運搬したのみで残りはクヤバの農務局倉庫に保存されている状態である。

11. “マット・グロッソ州の交通事情”

マットグロッソ州は未だ建設の途上にある未開発地帯が程んどであり一般的に見た道路事情は甚だ不備な状態にある。

特にクヤバ以北は幹線道路といえばロンドニア州のポルトベーリョ市に通ずるBR29のみと云う事情にある。又全州を通じて舗装道路は程んどなく現在BR16号線，BR34号線などで漸次ながら舗装工事が進行中である。

したがって現在の道路は乾燥期には埃りが舞い雨期には泥道となって車をスリップさせるため定期バスの延着を起こさせるなど著しく交通事情を悪化させている。唯大体が平坦な草原であるため，本道を避けてどこでも仮道路となり得るのは便利であるが全体として交通量はごく少なく軽四輪種でも前輪駆動の自動車がほとんどである。

クヤバ市にはEMPRÊSA BALEIA, EMPRÊSA COLETA, RAPIDO MATOGROSSO の交通社があり遠距離バスはカンポグランデ間は1日に4本（1本はサンパウロ直行）の往復があり EMPRÊSA BALEIA と RAPIDO MATOGROSSO の両社が隔日ごとに運行している。

EMPRÊSA COLETA は主としてカセレス ノーバオリンピアなどのクヤバ市の至近都市のバス線の権利をもっている。他ポルトベーリョ（ロンドニア州）及びブラジリア市へのバス便も隔日に出ている。

カンポグランデ市はマット・グロッソ州の経済の中心地だけあって遠距離，中距離，短距離のバス網も四方に走っており一応完備に近い状態にある。

交通社はEMPRÊSA ANDORINHA, RAPIDO MATO GROSSO, EMPRÊSA SIPROLÂNDIA, EXPRESSO QURO VERDE , EXPRESSO QUEIROZ, EMPRÊSA BALEIA VIACAO ATLAS VIACAO CRUZEIRO DO SUL の各社が営業しており，サンパウロ間はEMPRÊSA ANDORINHA と RAPIDO MATO GROSSO の2社が運行している。

EXPRESSO QUEIROZ はドラードス，ポンタポラン EMPRÊSA BALEIA はクヤバの各線が主なものである。なお，ドラードスからは，パラナバイ市（パラオ州）への毎日一往復の直行便もある。

各主要都市にはタクシーと馬車があるがタクシー料金を都市別にみると5 km の走行距離でクヤバ市では8コントス，ロンドノポリス市で10コントス，カンポグランデ市で5コントス，コルンバ市で6コントス，ポンタポラン市で6コントスとなっている。

馬車の利用者も多いがこれは普通市内のみであり1～2コント程度である。

植民地によってはバス便がなくその地方の有力者が1週に2～3度，定期的に代用バスを仕立てて入植者の便宜を計っている例も少なくなくそれに通行中のトラック，ジープ等に便乗を頼み料金を払うのも通例となっている。

なお1965年にサンパウロ州境のパラナ河にポルドエピタシオ橋（2,250m）が架橋されてからは所要時間も大巾に短縮されて非常に便利になった。それ以前はトラック，バスなどもすべて渡し舟で渡河していたため時間的にも大きな損失であった。

なおブエノスアイレスを起点としてブラジル，ペルーを抜け，北米まで伸びる国際道路の貫通計画もありカンポグランデ市，クヤバ市がその通路となるのもほぼ確実とみられている。

この計画が実現するとマット・グロッソ州が受ける恩恵は計り知れないものがあり期待されている。マット・グロッソ州の開発はまず河川を利用した水路から始まった。

コルンバ市やカセレス市，クヤバ市などが奥地である割に早く開けたのはパラグワイ河の探険の結果であり現在ではカセレス，コルンバ間には2週間に1度の割で定期船の便がある。

又，途中に滝がないためパラグワイ河を下ってブエノスアイレスまで渡れるが雨期には水量が増すのでかなりの大きさの船舶まで渡航可能である。

次に鉄道ではノロエステ鉄道のみでカンポグランデ駅からはポンタポラン線（パラグワイ国境）コルンバ線（ボリビア国境）の両線に分岐しているがブラジルを横断する鉄道とも言えるものでありマット・グロッソ州の経済的発展の上に果した役割は大きい。

ノロエステ線は1908年にはサンパウロ州のアラサツーバ駅までしか開通していなかったが，その後アラサツーバから西へと延長し又コルンバ側からも工事が開始されリガソン駅で全線開通となったのが1914年である。この鉄道は鉄道の長さを請負で英国人の技師に委せた結果，不必要なほどカーブの多いものとなり現在復修工事がなされている部分がある。

開発されていない地帯が大部分であるためかブラジルの交通事情の特徴は陸路が完全に発達しないうちに航空網の方が短時日に開けたためバス網の敷設に追いつきそれを凌駕したことである。

マット・グロッソ州もその例外ではなく航空会社もVARIG，VASPを始めPARAENSE，CROZEIROの各社が進出してきている。

その他富裕な牧場主には自家用機（テコテコ）を所有している者も多く，各自飛行場の設備を有している。

〔参　考〕　11 −(1)　マットグロッソ州交通料金表　（ 1966年 9月現在 ）

(1) 汽　車（ 1等 ）　　表　8

区　　間	距　離	所要時間	料　金
Campo Grande −− Ponta Porã	324	9.30	4,100
Campo Grande −− Sidrolândia	86	2.30	1,800
Campo Grande −− Corumba	452	12.00	6,000
Campo Grande −− Corumba (Diesel)		10.00	5,100
Campo Grande −− Aquidauana	144	3.30	2,650
Campo Grande −− Aquidauana(Diesel)		3.00	3,500
Campo Grande −− Pedro Celestino	46	1.30	1,250
Campo Grande −− Pedro Celestino(Diesel)		1.10	1,850
Campo Grande −− São Paulo	1,296	28.30	14,900
Campo Grande −− Bauru	894	20.30	7,500
Campo Grande −− Aracatuba	613	14.00	4,500

(2) 飛行機（航空便）　　表　9

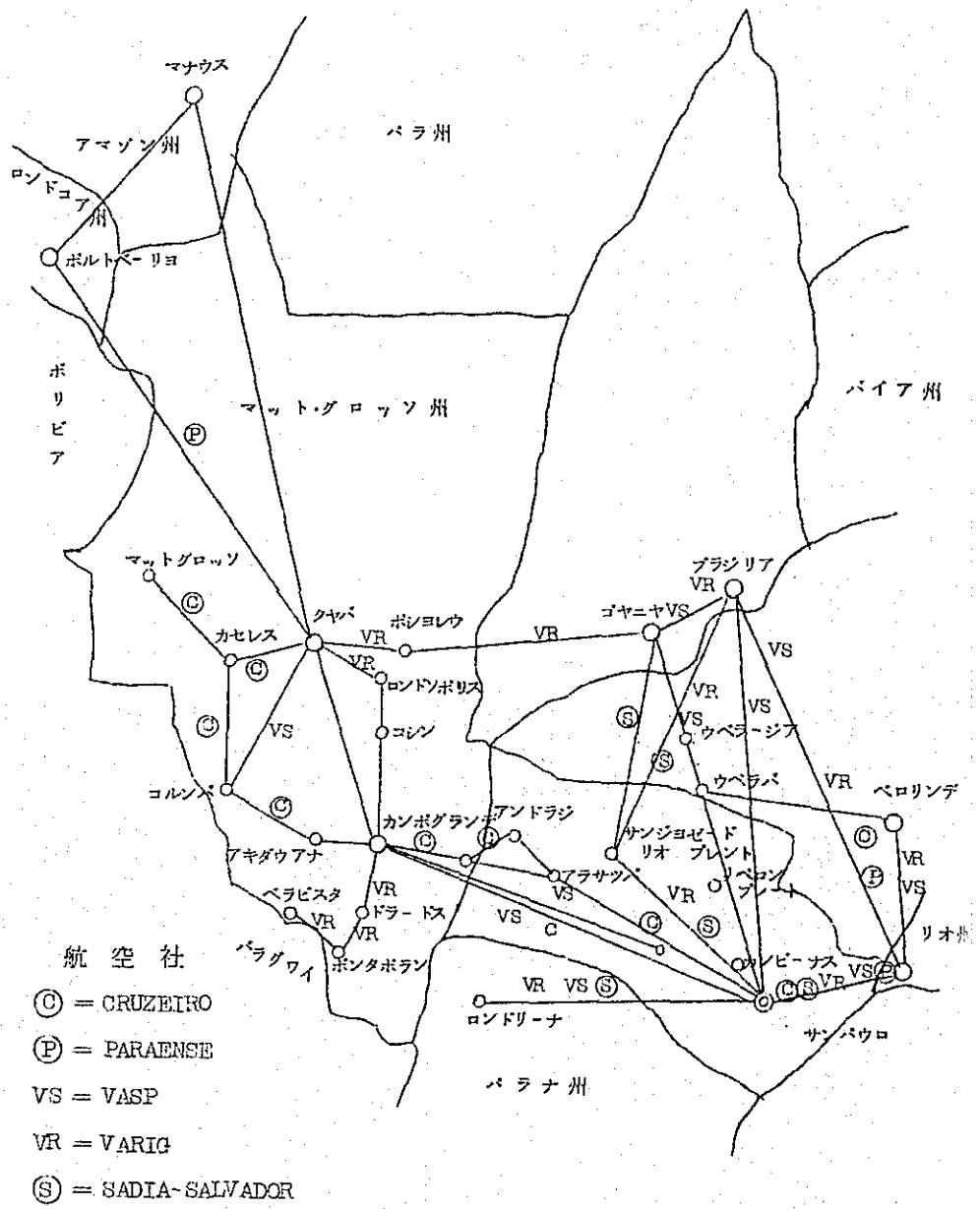
区　　間	航 空 社	所要時間	料　金
Cuiaba −− São Paulo	VASP	−	89,400
Cuiaba −− Manaus	PARAENSE	−	89,050
Cuiaba −− Porto Velho	PARAENSE	−	52,300
Cuiaba −− Campo Grande	VASP	−	61,400
Cuiaba −− Caceres	CRUZEIRO	−	8,300
Campo Grande −− São Paulo	VASP	−	89,400
Campo Grande −− Corumba	CRUZEIRO	−	34,300
Campo Grande −− Aquidauana	CRUZEIRO	−	10,450

(3) バス

表 10

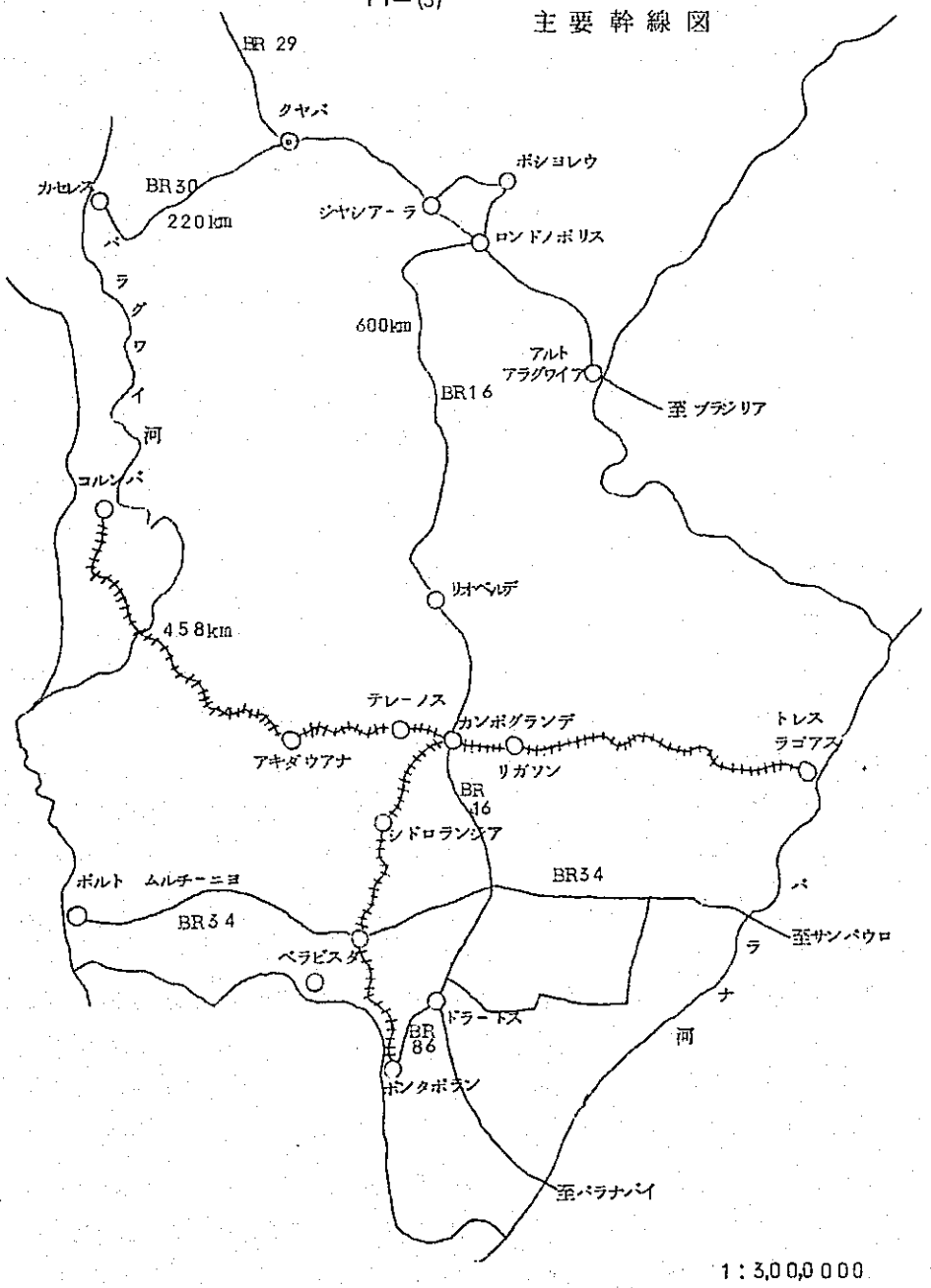
区	間	距離	所要時間	料金
Cuiaba	-- Campo Grande	900	19.00	17,000
Cuiaba	-- Rondonópolis	240	6.00	5,000
Cuiaba	-- Jaciara	160	4.00	3,000
Cuiaba	-- Cáceres	220	7.00	6,000
Cuiaba	-- Nova Olimpia	210	7.30	5,500
Campo Grande	-- São Paulo	1,300	23.00	14,600
Campo Grande	-- Rondonópolis	660	13.30	12,500
Campo Grande	-- Dourados	204	6.00	5,500
Campo Grande	-- Sidrolândia	65	1.30	2,000
Dourados	-- São Paulo	1,250	20.00	14,000
Dourados	-- Ponta Porã	120	3.00	3,000
Dourados	-- Paranavai	350	8.00	9,000
Dourados	-- Panambi	35	1.30	800
Dourados	-- Navirai	146	4.30	4,000
Dourados	-- Laranja Lima	32	1.30	800
Dourados	-- Barrerão	28	1.30	700
Dourados	-- Vila Brasil	40	2.00	1,500
Navirai	-- Nova America	106	3.00	3,000
Navirai	-- Fazenda Caiua	40	2.00	800

11—(2)　マット・グロッソ州航空図



11—(3)

マット・グロッソ州 主要幹線図



12. 独立時の“土地の選定方法”

本調査対象295 家族のうち自営農は183 家族62.0%の過半数を占めていた。

かかる自営農の土地の選定及びその方法についてみると土地の選定についてはまず移住形態として揚げられる2つの形態即ち計画移住と呼寄移住に分割して観察しなければならない。

前者の計画移住者の場合は公募によって指定移住地に入り，区画された分壌地に入植したのであるが連邦植民地（松原，共栄，リオ・フェーロ）の場合無償供与の土地であったため全てが抽撰により配分された。そのため同植民地内でも土地の良，不良に入植された事は免かれなかった。

(1) 低地に位置するため霜害（松原植民地）

(2) 高地のため飲料水欠乏（バルゼアアレグレ移住地）

(3) 土地の肥沃度（松原及びバルゼアアレグレ移住地）

などの諸条件が同植民地内に於いて差があったため一部入植者は退耕或いは同植民地内に於いて移転した移民者も現われている。

自営農183 家族のうち128 家族69.9% は日本より直接入植した移住者であるが残りの55 家族は計画移住地からの退耕者及び呼寄移住からの独立者である。

特に呼寄移住者の独立に至る時点の土地選定方法については種々のケースがあり一概に云えないがこれ等と総合してみると次のことが云えよう。

(1) 知人，友人の紹介

(2) 親戚の紹介

(3) 有力者の紹介

(4) 自身の視察

などが主である。

(1)の知人，友人の紹介は県人会同船者を通じて知り合い彼等の紹介にて土地を求め農業を営んでいる移住者で一般的な方法である。

(2)の親戚関係は呼寄移住として渡伯し耕主の子女と婚因しその耕主及び親戚の関係で土地を紹介して独立に至るケースである。

(3)はその地方の有力者主に日本人会，県人会関係に多く見られるケースだが有力者所有の土地を分譲或いは保証人となり（カンポブランデ市に見られる）同県人の土地購入に協力しているがこの事は同県人の集団移住地の親を定してくる。

即ちカンポグランデ市の沖縄県人共栄の北海道出身者松原及びクルバイの和歌山県人それにバルゼアアレグレ移住地の山口県人等各移住地が各県別に大別されてくる。

(4)の本人の視察については前記3項目の全てが終局的においては本人の決定によるのは論をまたないが誰の紹介もなく本人自ら探索し選定決定するケースである。

これは主に日系集団移住地から遠隔地にある現地伯人の土地購入の際に多く見られる。

13. マット・グロッソ 州地域概況 （序文）

マット・グロッソ州にはサンパウロ・パラナ州に比べ日系人は少なく，又伯国でも第3位の大きな州でもある事と移住者も広範囲に点在しているため本調査に当り種々の困難が生じた。

調査方法は5名の調査員が戸別訪問による聴き取り調査であり調査員を2班に分け第1班を南部ドラードス市を中心とする地域を調査し，第2班を北部の州都クヤバ市を中心とする地域を調査し中部カンポグランデ市を中心とする地域は両班を合流せしめ最後に調査した。

従って今回の調査ではマット・グロッソ州を次の如く3地域に大別しその地域別の概況は次の如くである。

1）北部　クヤバ市を中心とする地域

2）中部　カンポグランデ市を中心とする地域

3）南部　ドラードス市を中心とする地域

13 －(1) マット・グロッソ 地域概況（北部）

マット・グロッソ州北部は首都 Cuiabá 市を中心とした地域を総称し，Cáceres 地域 Cuiabá，Rio Ferro，Rondonopolis 地域の4地域に大別出来る。

(1) Cáceres 地域

Cáceres，Barra do Bugre，Alto Paraguai を一括することとする。

(A) Cáceres

マットグロッソ州の首都 Cuiabá 市より西へ275Km の地点で交通機関としてはバスが一日に1往復している。（二つの会社が隔日）所要時間は約7時間であるが雨期には2時間以上延着するものとみなければならない。ボリビアとの国境まで約100Km

であり，São Matias 市との往来もかなり盛んである。又 Cáceres 市のすぐ横を流れているパラグワイ川の水路の便があり Corumbá 市までの定期船が通っている。

Cáceres 市の人口は約12,000人（郡全体で40,000人）であるが年々増加の一途を辿っている。その原因としては，①比較的地価が安いこと ②土地が肥沃であること等が考えられるが州政府が力を入れているリオブランコ植民地の入植者3,000家族がその要因と云えよう。

日系人は 41 家族（159人），戦後12家族（41人）という割合であり，その職業は雑作農が大半であり，商業面での進出は未だ微々たる程度である。

戦後移民の農業従事者は4家族のみで，何れも Cáceres 市の人口に供給する程度の小規模な野菜栽培であり現状維持が精一ぱいで現時点より見ると今後大きく飛躍するようなことは望めない。

唯一の利点は農産物がサンパウロ州などに比して比較的高価にはけることで下級品に至るまで商品化が可能である。

同地の地価はアルケール当り200〜300 コントであり2〜3年前に比べて著しい高騰ぶりを見せている。

日系人の入植歴史はまだ新しく7〜8年に過ぎないが，米，フェイジョン，とうもろこし，棉，落花生などの雑作を作っており，牧畜に着手しているものは3家族に過ぎず130〜250 頭を所有しているがその所有土地面積（2,200〜12,000 アルケール）の割にしても牧畜の面では今後を期すより外ない。

なお，この地方の特産物にボワイヤ（薬草）があり現在では自然生えのものを採根しているが日系人が2〜3栽培に踏み切っており，成果が注目されている。

現在の1K当りの相場が現地で 20 コントであり栽培法の成否如何では将来有望な生産物になり得る。

栽培法は自然生えのものを採根した残りの茎部を挿木するもので河川の腐蝕土を利用した畑だと成育が良好であり，施肥，灌水も無論必要である。

植えてから2年後に収穫出来るが，少面積でこと足り，人手をとらないという利点がある。

この薬草は，出血止めの作用があり，アミーバー赤痢の特効薬として欠かせないものになっており，アメリカ，フランス，イギリス，ドイツ，日本などの諸外国に輸出されている。

ボワイヤ栽培は，ジャニオ大統領の時代にはマット・グロッソ州の天然資源保護増殖事業の一環として奨励され Cáceres の奥に研究所を開設するなど資金も潤滑に流用され研究が続けられていたのであるが，政府交代に伴い漸次予算縮少の憂目に会い最近では遂に閉鎖を余儀なくされた。

現在では，各栽培者が研究を続けて試作しているが有望視されているとはいうものの栽培薬草が野菜のものと同様に収穫出来るかどうか，結果は今のところ出ていない。

毛皮類では，ワニ皮は年間　　万を越える生産量を誇っており，ロントラ（カワウソ），アリランニヤ，ジャグワリチカ（共に山猫の一種）の毛皮は特に貴重で1枚 80 コント位で取り引きされている。

木材では，アラブタンガ樹があるが植林事業までには進んでおらず，現在では自然生えのものを需要に応じて伐採しているが柔らかくて強いのが特長で船の甲板，家具，ピアノの鍵板などと用途は多く，製材のメートル角で 400 コント（サンパウロ）という高価な木材であり，輸出も少なくない。

衛生面についていえば，風土病など奥地に入ると皆無といえないまでも漸次減少してきており，年に2回のロックフェラー財団によるマレッタ（悪性マラリヤ）の巡回診療が行なわれており，Cáceres 市には保健所の設備もある。

病院は州立1，私立病院も現在建設中である。

航空会社では，クルゼイロ旅行社のみが進出しており，

Cáceres – Cuiabá	週6本	CR$	8,300
Cáceres – Campo Grande	週5本	CR$	44,100
Cáceres – São Paulo	週3本	CR$	142,400

の各航空便がある。

教育機関は小学校8，中学校2，高等学校1が設立されているが，それ以上の上級学校は Cuiabá 市に行かないと受けられないので経済的にごく限られた者だけにしか大学への道は開らかれていない。

なお，日系人 41 家族（市内に約20家族）という集団地であり日本人会が結成されているにもかかわらず，日本語教育が組織的には全く行なわれていないが，これは教育に適任者を得ないためかと思われる。

(ヌ) Barra do Bugre

州都 Cuiabá 市より約170 Km の西方に位置し Cáceres 市にも近い。バスの便

は Cuiabá 市より Nova Olimpia 行き（Barra do Bugre より40Kmの町）が隔日に通っており，Barra do Bugre 市まで約6時間，終点の Nova Olimpia までだと7時間半を要する。

更に日系人の小集団地である Tangará 植民地だと Nova Olimpia の 50Km 奥でありその区間はバスの便もない僻地である。

したがって，Tangara 地方では運送機関なしの農業では制約を受けること大であり運送法の解決が当面の問題である。

これは又北マット・グロッソ全体についてもいえることである。

Barra do Bugre 郡は，Cáceres 郡に隣接しており，気候条件，作物などは似通っているが，地質は Cáceres に比して多少悪い。

この町はもともとポワイヤ薬草採取人夫達が集まって開けた町であり，Cáceres に次ぐポワイヤの産地である。

同市の人口は6.000人程度（市内は1,000人たらず）であり，この周辺に入植した日系人の歴史は新しく2家族が雑作農を行なっている。地価はアルケール 100 コントス前後であり，野生のポワイヤは採取しつくされ，枯渇した感のある現在では牧畜に適した新興地帯であるといえよう。

Tangara 植民地の入植者はパラナ州北部からの転耕者がほとんどで，当初の入植目的はコーヒー栽培であった。

その後，若木の成育状態がすばらしく良い反面，花が結実しないことが判り，入植者には打撃を与えた。気候条件が合わないのか雨量のせいか，その原因は未だに究明されていない。

現在，5家族が在住しているが，収量が極少であるという事実を知りつつも全家族共コーヒーへの夢を捨て切れずに管理に励んでいる。

Tangara 地方の地価は 50 コントス（アルケール）程度なので，今後は次第に牧畜に切りかえられるのは必至であるが，その場合にはやはりその設備資金が大きな問題となっている。

保健衛生面では，甚だ不便な地であり，Barra do Bugre 市内にしても医者はおろか満足な薬局すら皆無というのが現状であり，風土病の危険性も多分にある地帯でもあり，医療設備の完備は緊急に解決されるべき問題であろう。

学校は，小学校が1校あるのみで甚だ不備極まりない教育事情であり，上級学校は州

都クヤバ市に行く必要がある。

(C) Alto Paraguai

首都 Caiabá 市より150Kmの町で Barra do Bugre の隣接都であり，日系人は Cuiabá 市在住の上間氏の 1,200 アルケールの農場内を借地して雑作農兼野菜栽培を営んでいる家族のみである。

同市の人口は4,000人，全郡で12,000人で，気候条件は Barra do Bugre に大差なく，特産物もない。

日系人の場合農産物は Cuiabá 市の中央メルカードまで運んで来るが何んといっても入植家族が少なすぎるので万事につけて甚だ不便なことが多い。

(2) Cuiabá 地域

マット・グロッソ州の首都であり政治都市であるが，南部の経済都市 Campo Grande市のめざましい躍進ぶりに比してやや発展が遅滞しているのは距離的な（Campo Grande 市より約900Km）ハンデキャップが原因となっているものと考えられるが，不毛の草原が大部分で農作物に不適の地帯であることも勿論その発展を妨げている一因であろう。

人口は Campo Grande 市（100,000人）に次ぐマットグロッソ第二の都市で75,000人であり，日系人口は 60家族（294人）と少ない。

うち戦前戦後の割合は戦前44家族（229人）と，戦後16家族（65人）であり，農耕地が限られているので農業従事者は20家族いるもののそのほとんどは小規模な野菜栽培程度であり，その野菜作りにしても耕作可能な土地はわずかにクヤバ川の流域のみに過ぎず，その上雨期には川が氾濫するため2・3ケ月間というものは植え付け出来ないという不利な条件が重なっているため，クヤバ市民の供給をも満たしかねる状態である。

主な野菜類はトマト，チシャ，にんじん，さつまいも，キャベツ，ピーマンなどであるが，中央メルカードに卸すかたわらフェイラ（市場）にボックスを持って小売する者がほとんどで，サンパウロの相場よりも好条件で売捌かれているのは生産者が少ないだけに当然のことといえよう。

商業方面では圧倒的に多いのは中央メルカード内の農産物仲買業者であり，大半は日系人で占められており，その他食料品店，洗染業，小間物洋品店，写真店，バール，理髪業，時計店，美容院，測量士等々種々の職業に従事しており，日本人会も結成されている。

Cuiabá市唯一の工業は，食用油精製のMATO－VEG会社があげられるのみでその他産業と名づけられるほどのものは皆無といっていい。

Cuiabá 市を中心とした一帯は砂金，ダイヤモンド原石としても知られており市内には小規模ながら2～3のダイヤモンド研磨工場があり2～3名の職工が就労している。

ダイヤモンド発掘夫はガリンペイロと呼ばれているが非常に根気がいる割に報われない職業であり，セリンゲイロ（ゴム採液夫）と共に最下級の職業とされている。

同市には州政府が経営しているゴム工場もあるが資金難のため現在は操業が中止されている。政府が買い上げた天然ゴムはここで等級がつけられ一定の大きさに裁断されるが工場の設備は極めて貧弱であり，加工して製品化するまでには程遠く現在では天然ゴムを置く倉庫として使用されている。

Cuiabá 市から 90Km 北上した Chapada das Guimarães は避暑地として知られ 100Km 南に下るとサン・ビセンテ温泉が湧き出ているが遠隔地のため観光客はごく少数に過ぎない。

Cuiabá市を中心とした交通機関は，飛行機とバスであるが，航空会社はVASP，（Campo Grande, Corumbá, Goiânia, Brasilia, Porto Velho），VARIG（Compo Grande, Goiânia, Brasilia），PARAENSE（Campo Grande, Manaus, Porto Velho），Cruzeiro（Cáures, Rio Branco, Campo Grande）の4社が進出している。

バス網は，Cuiabá 市から Porto Velho, Cáceres, Barra do Bugre, Goiânia, Rondonópolis, Poxoreu, Mutum, Campo Grande, São Paulo, Rio de Janeiro など各地に伸びてるが現在RAPIDO MATO GROSSO と BALEIA のバス会社は権利を二半して各線とも日をかえて営業している。

Campo Grande からは約20時間のバスの旅だが，雨期には5・6時間の延着が常である。

なお，鉄道が敷設されていない点も Cuiabá 市には甚だ不利な交通事情であり，消費都市でありながら物資供給の面でサンパウロへの依存度の高い Cuiabá ではトラックの運賃が高むので消費物価もサンパウロ州に比べてかなり割高で，その上最低給料も66コント（マット・グロッソ州）と低い。

教育面では小学校80，中学校69，高等学校44（普通14，師範21，職業9），大学3という数字が出ており，一応満足すべき状態にあるといえよう。

日本語教育は，北麻州文化協会が主体となって日曜日に40名の生徒に教えている。

娯楽機関は，映画館が6館，ボーリング場が2，又他に娯楽施設もない地方なので日系

青年の野球熱も高いようである。

医療機関も市内は完備しているが，Cuiabá 周辺一帯の巡回診療は現在年に1回であり，今後更に積極化される必要が痛感される。

特記すべきことはアルゼンチン（ブエノスアイレス市）を起点としてブラジル，ペルーをぬけ，北米と結ぶいわば南米大陸を縦断する国際道路の貫通計画も明らかにされており，Cuiabá 市がその通路に当ることも確実とみられている。

この遠大な構想が実現すると現在進行中の Rio Casca の発電所（第一 4,640Kw，第二 12,500Kw）の完成による電力事情の強化と相俟って，同市の今後の躍進の原動力となり得るし，Cuiabá 市の将来には明るい希望があるといえよう。

(3) Rio Ferro 地域

(A) Rio Ferro 植民地

Rio Ferro 植民地は Cuiabá 市から陸路580Km北上した地点にあり，全ブラジルに点在する日系コロニアの中でも交通事情の不便な僻地だという点ではおそらく群を抜いた存在であろう。

サンパウロ支部管内でも最前線の移住地である。

バス線は無論開通しておらず定期的には松原氏のトラック便が1週間～10日に1往復しているのが唯一の交通機関であり，他2・3の入植者がトラック，カミニオネッテを所有しており平均して月に1度は Cuiabá 市と往復している。

なお，飛行機（テコテコ）の便もあり，Cuiabá 市から約1時間で行ける。

車の便だと Cuiabá 市から早くて18時間，満載したトラックだと2～3日の時間を要する。

道路も200Km より先は満足なものとはいえず，特に植民地内の道路は悪く，雨期には完全に孤立した地帯となり，陸の孤島と称される所以である。

Rio Ferro 植民地の総面積は8万4千アルケールであり，和歌山県出身の故松原安太郎氏が1951年に当時の Getulio 大統領の時代に日本人を入植させることを条件に政府から無料で払い下げられた土地である。

第1回の先発隊は1955年9月に入植したが土地は無料，移転費用も会社（代表松原氏）が負担するなど優遇された。

その後年々後続入植者もあったが，

① 生活環境の不便さ，② 風土病（特にマラリヤ）の蔓延，③ 酸性土壌で作物

が出来ない等々の悪条件が重なって退耕者も後を絶たず，現在では 41 家族が在住している。（不在地主を含めると 200 家族）。

Rio Ferro　当初の入植目的はゴムとコーヒー雑作の栽培にあり，永年作物であるゴム（約10年）を育てながら中期作物のコーヒー，それに雑作農で自給出来るという理想的な計画だったが，土地が強度の酸性土壌であるためコーヒーはおろか雑作物すら出来ないことが判り，最初の躓きとなった。

その後いろいろと土地に合う作物も研究されたが運転の点で採算がとれずに入植者の永年の懸案の課題となっていた。

トメアスーの例にならってピメンタドレーノ（洋胡椒）の栽培に踏みきったのは，1958年（800本）であり土地，気候にも適し，値段も安定していることから有望視されて年々造林され現在では全家族とも500本～20,000本を植えつけている（1965年総数12,565本）。

ピメンタの収穫が始まったのは1965年であり12,323Kgを生産したがRio Ferroのピメンタを見て痛感されたのは資金不足のためか2～3の家族を除いて明らかに管理の不足が見うけられ，施肥料も少なく灌水もほとんど行なわれていないので品質の点で決して楽観は許されない。

市場性にしても調味料なので需要が限られているためトメアスーを始め，新産地カラガタツーバ地方に対抗するには輸出用として競争に耐え得る品質向上を目指す以外に伸びる道はないだろう。

その意味で1966年に出された移住事業団からの営農融資はピメンタの管理費用として有効に用いられており，適切な措置であった。

Rio Ferro のもう一つの主産物は植林ゴムであるが植林してから日が浅いので正確な結果は出ていないが，種類は 25 号種，3810種，J・K種などであり，総本数は種子植で368,000本，茂接樹で318,000本が植っている。しかし本数が多い割には上質の樹は少なく植林ゴムの研究も不充分であるため採液量が多くて耐病性のある決定的に優秀な品種が未だに生み出されていないことは収入までに非常に長い年月のかかる特殊な性質の作物であることでもあり，一考の余地があるように思われる。

ゴムの方は加工品の用途も甚だ多くその将来性の点ではピメンタの比ではなく，順調に採液が始まり軌道にのると非常に有利な産業となり得る可能性を持っている。

又結果の出ていない植林ゴムの前途については，当然悲観的な見方も成り立つ訳であ

りゴムに見切りをつけて脱耕していった人達の意見を総括すると,

① 植林してから収入に至るまでの 10 年以上という期間は何んといっても永すぎる。

② 学問的に未知の分野が多く確信をもって推せんし得る優良品種が出来ていないこと（例えば 25 号種が大半を占めているが，この種類は樹液が少ないことが判り，5810号種は大量に採液出来るが病気に弱いといった状態であり，現在では台木にまず樹液の多い 5810号種を芽接し，更に耐病性に強い種類を接ぐという方法が取られている）。

③ Rio Ferroの場合は高地に植えたものが多いので地下水の有無が問題となる。天然ゴムの例を見ると密生しているのはほとんど河川の流域地帯に限られている。その樹齢も 20 年を越すような大木である。

④ シンガポールなどのスコールの多い南洋の気候に比べて乾燥期が長く 3 ケ月以上も雨の降らないことが多い。

⑤ 乾燥期に恐ろしいのは山火事であり特にマットグロッソ州では放牧用の草原に火を入れる野焼きの習慣があり，又自然発火の危険も充分にある。

3年前にカベン植民地内で日系人のゴム及びピメンタが全焼した実例がある。

⑥ すでに人造ゴムの試作に成功した現在ではこれからも技術が進んで天然ゴムにとってかわる新製品が生れることも充分予想され，ゴムに対する需要も多少なり減少してくるのではないかとの危惧もある。

⑦ アマゾン州にフォード会社が巨万の資金を投じて設立したゴム園の経営が思わしくないことから見て成功の確率は低いという見方

等があげられており，Rio Ferro の植林ゴムの今後の成行きは州政府の農務省側からも大いに注目されている。

Rio Ferro 植民地内には店はなく組合の売店を通じて入植者は日用品を購入し特別な買物は総て Cuiabá 市まで出かけなければならない。又品切れになることもしばしばあり値段も運搬費が嵩むので非常に高い。

因みにトラックの運賃は Cuiabá ～ Rio Ferro 間（580Km）が 1 Kg 当り120 クルゼイロであり（6 トン積載で 720 コントス）これは São Paulo ～ Cuiabá 間（2,000Km）の運賃 80 クルゼイロに比較しても如何に高くつくかが判ろう。

教育機関は小学校が 1 校あるのみで生徒は 25 人の混合クラスで授業は入植者の娘（有資格）が担当している。

日本語学校は各土曜日に開校されている。

日本人会，青年会も結成されており，青年会員には野球，バレーボール，ピンポンなどの娯楽施設があり，又，年に1度のマット・グロッソ州野球大会にも参加し会員相互の親睦を計っている。

結婚適令期の青年達にとって当面の深刻な悩みは配偶者の問題で若い女性が甚だ少ない上に他所からもらうにしても好んで僻地に嫁に来る例は少ないために結婚問題は愈々困難化するものと思われる。

植民地内のドイツ人の農場（Fazenda Nova Esperanca）には無線電話の設備があり入植者も緊急の用事の際は Cuiaba 市と連絡が出来るようになっている。

保健衛生面については全入植者の永年の要望に応じて1966年5月　日本移民援護協会の斡旋により奥原医師が派遣されたがそれまでは無医村であり，風土病の対策は野放しの状態にあった。

奥原医師が赴任した当時は悪性マラリヤの大量発生が見られ，床から起き上れないような重患者が9名いたが現在では完治とはいえないまでも就働には差支えない程度に回復してきている。

唯，マラリヤ菌は体内に潜伏するので気をつけて養生している間は安全だが身体が衰弱したときに再発するという性質を持っているので重労働は出来ない。

奥原医師の話によると全入植者のうち幼児を除いた全員が重軽の差こそあれマラリヤの罹病者という有様で未だに気のゆるせない事態が続いている他，アミーバー赤痢の保菌者も多く楽観出来ない。

これらの風土病の予防薬，治療薬は最少限度には揃えられているが，医療器具はほとんど具備されていないため，外科の患者の場合の応急処置すら危ぶまれているほどであり早急の対策が望まれている。

植民地内の家屋は屋根，壁板とも全てタビンニヤ樹製でその作りも単一化されている。周囲の森には獣（人間に危害を加えない）も多く鹿，野豚，タツーパッカ等の肉も豊富であり，パラナチンガ川にはマトリンシャン，ジャウ，ドラードなどの川の幸も豊かで入植者の貴重な副食物として欠かせないものになっている。

治安面では住人のほとんどが日系人のみという特殊な環境という事情もあって一応安全といえるが，植林ゴムが数年後採液の段階に入りセリンゲイロ（ゴム採取人夫）の出入りが頻繁になると飲酒の上での流血沙汰の絶えない彼等の性格から警官か軍人の駐在

の必要性も充分考えられる。

最後に Rio Ferro 植民地の歴史と概観を述べる際に忘れてはならないのは，松原家族（代表　松原義和氏）の経済的な援助であり，この植民地が集団脱耕者を出した Capem 植民地の衰退の例に反して未だに消滅を免がれているのは松原氏の存在に負う所が大である。

氏は私財一切を投入して個人的にはこれ以上継続することは無理だという限界まで植民地造成につくしたのち，現在ではトラックの運送賃，天然ゴム採取事業，不在地主の農場の管理請負，土地代の入金などで生計を立てながら Rio Ferro 組合結成後も理事長として活躍中である。

反面，松原氏のこれらの献身的な指導に応えるに植民者の協力ぶりは必ずしも満点なものとはいえず，その最も顕著な現象として自分の作物の管理の手を抜いてまでも組合或いは特定農家の賃仕事を引受ける風潮がある。

即ち，或る程度の経済力がついた今日でも永年の日雇い根性の惰性が抜け切れずに無気力で独立心に乏しい他力本願的なところも多分にみられる。

しかし，ピメンタ，ゴムの本格的な収穫が始まり，各自の経済的な基盤が確立されるにつれて漸次解決されていくものと思われる。

(B)　Capem 植民地

Capem は Cuiabá 市から北へ約500Kmの地点であり，Rio Ferro 植民地への通路に当り Capem 植民会社の経営により1953年に入植が開始された。

Capem は Companhia Agro Pecuaria Estrativa Mariopolis の略称であり（代表者　義武氏），1955年～1956年には，最盛期を迎え約 80 家族の入植者をみた。その後賃金難，マラリヤの蔓延，その他が原因して脱耕者が続出し，1958年の沖縄移民 50 家族の導入計画も中途でざ折，更に100 家族の導入も実現しないうちに，初期の入植移民は 2～3年の間に Cuiabá 近郊，Campo Grande 近郊，サンパウロ州等の各地に四散し現在残っているのは 5家族のみでピメンタ，ゴムを中心に営農を行なっている。

(4)　Rondonópolis 地域

(A)　Rondonópolis

Campo Grande 市（600Km）と Cuiabá 市（250Km）とを結ぶ850Km の幹線道路の中間に位置する唯一の大きな都市でブラジルのインジオ教化運動推進者として

有名なロンドン将軍の名に因んでこの名がつけられたものだが，附近一帯にダイヤモンドの原石が産出されることでも知られている。

人口は市内で6,200人，郡内で30,000人であり，バスの便は Campo Grande 市と Cuiabá 市の中継点でもあるため，毎日4～5本往復している。

市内にはタクシーの数も多いが道路事情が不備であるため，全部ジープであり，料金も法外に高い。タクシー以外でも一般乗用車はこの地方には不向きでジープか，カミニオネッテにしても前輪駆動式のものが大半である。

日系家族は55家族で，戦前45家族，戦後10家族の割合であり，職業別にみると農業が28家族と半数を占め（うち3家族は牧畜を兼ねる），商業16家族，工業7家族，その他4家族となっている。

主な農産物は米，フェジョン，棉などの雑作と都市周辺の野菜一般であり，Cáceres 地方のケースと類似した営農形態である。

地価は市内から4.5Km以内のシャーカラ（果樹園）用で1アルケール1,000コントス，又雑作に向いた土地で300～400コントスだが，この際気をつけるべきことは，よく調べてから買わないとこの一帯には不毛の草原で極端な痩地が多いことで事情を知らない新移民が安いと思って買ったが全然作物の出来ない土地だったという実例もある。なお，日系人で牧畜に主力を置いている者はなくせいぜい30頭程度である。

商業方面では食料品店，八百屋が主で，外ガソリンスタンド，ホテル，写真屋などである。米の産地だけに精米所を経営する日系人も多く，農家或いは商人から委託された1俵（60Kg）の籾米を精米所では普通38Kgの精米の率で交換し，Kg当りの手数料をとっている。精米は籾米の70％と見られているが一般農家は籾米のままで商人に売るのが普通である。

教育機関は小学校5（州立1，カトリック系4），中学校は夜間を含めて4校であり日本語学校は日曜毎に開校されており日本から派遣されている江上牧師夫人が教鞭をとっている。

電話は未だ敷設されておらず，映画館は1館だが，日本映画はほとんど上映されていない。

本地区には日伯文化体育協会も結成されており，会員同志の親睦も深い方で，ガリ版刷りながら月報も発行され特に将棋が盛んである。

医療機関は私立病院2，保健所1だが，設備は完全とはいえない。

又，Rondonópolis 地域の戦後移民にはパラグワイ移民（ジョンソン耕地からの脱耕者）が多いが，これは野村マリオ氏（サンパウロ州 Andradina 在，不在地主）が，雑作歩合農として呼び寄せ3年後に独立したもので全員が既に5～20 アルケールの地主となっており，自営農として順調な道を歩いている。

懸念されていたブラジル国の永住権の問題は日系弁護士などの手続きで各自が Cuiabá 市の州政庁より鑑識手帳を取得していて子女の結婚届け，土地購入，銀行融資などの面でも何ら支障は来ていない。

そして彼等の全員がパラグワイよりブラジルの方が暮しよいことを認めている。

(A) Pedra Preta

Pedra Preta は旧名ジュリギとも称され，Rondonópolis 市より30Kmの地点であり，この地帯はごく限られた雑作地帯であり植民地の中心に小さな町が出来上ったものである。

現在は Rondonópolis 郡であるが近く独立して Pedra Preta 郡として独立することになっている。

バスの便は Rondonópolis 市より一日1往復あり，途中坂は少なく平担な道路であるが粘土質であるため雨期には車輪が空転りするため運行中止となることも多い。

日系人の入植草分けは故農田源行氏で現在の日系コロニアも氏の土地を分譲して形成されたものである。

Rondonópolis と同様に雑作が主であり，米，フェジョン，棉，とうもろこし，胡麻，落花生などを栽培し，土地も肥沃であり，米は10年以上の連作が可能であり，収量も大して落ちない。（1アルケールから 80～100俵）

フェイジョンは米の裏作として植えつけるのが普通である。

現在の日系人の入植数は戦前12家族，戦後8家族，合計20家族であり，3家族が商業に従事，残りは皆雑作農を営んでいるが，自営農が大半で夫々地価も安価であった時期に購入しており作物も良く出来るため，日系人の信用度も高く地主には伯銀も大巾に融資しており営農状態も順調である。

牧畜では野村マリオ氏（サンパウロ州 Andradina 在）が7,000 アルケールの土地を所有し，3,000頭余りの牛を放牧管理させている。

なお，広面積の土地を持っている日系人には雑作歩合農としては現地人家族を農場内に住せ，収穫物の30％程度を小作料として受けとるシステムを取っているものが多い。

収穫までの生計費（営農費はほとんど不要）は雇主が貸与するものだが高い労賃を（日給2～3コント）を支払って彼らを雇うよりこの方が有利であり確実でもある。

小作料はパーセント制の他，収穫の多少にかかわらず，一定数を収める場合もあり，言葉の不自由な戦後移民でも結構現地人の労働力を利用して事業を伸ばしているものが多い。

しかし同じ立場にある日系人の中にも現地人の仕事ぶりが杜撰だという理由からカマラダ（日雇い）や，歩合農を雇うことなく自家労働だけで営農している者もある。
篤農家などにこの傾向が強く品質の良いものを生産し単位面積からの収量もあげているが事業としては当然小規模になり勝ちであり，営利的な農業とはなり得ない。

ブラジルは他の先進諸国に比べると人件費が安い上に雇用も容易なのであるから現地人の労働力を最大限に活用することは事業を伸ばす上には不可欠な必要条件であり日本の場合以上に農業従事者の経営者的な能力が要求されるものである。

(C) Irendpolis

Irendpolis 植民地は Cuiabá 市と Rondondpolis 市との中間に位置し，サンペドロ郡に属しており，別名バンツーラとも呼ばれている。

Cuiabá市から160Km南下すると Jaciara 市で，更に7Km離れて São Pedro の町があり，この町から約20Km東に入ると Irendpolis 植民地の中心地である。

バスの便は，São Pedro までしかないが Jaciara 市からは，乗合タクシーが出ている。Rondondpolis 市までは約80Km の道程である。

日系人は19家族が入植しており戦前11家族，戦後8族で全員が雑作農に従事しているがほとんどは地主であり，15～120アルケールの面積を所有している。土地も肥沃であり，米は80～100俵，フェイジョンは40～50俵が1アルケール当りの標準収量である。

この植民地から 20Km 奥に入ったコルキンニョ地区はおそらくマット・グロッソ州内でも有数のフェイジョンの適作地であり，米の裏作で1アルケールから 80俵まで収穫した実例がある。

同地区の地価は現在100コントス程度で他の地方に比しても格安であるが，唯一の難点は雨期には川が氾濫するため車の乗り入れが出来ず運送の方法が無いことで道路事情さえ解決すれば将来性のある雑作地帯となり得る。

牧畜では Irendpolis植民地は気候も適しており放牛への条件も揃っているが日系

人では西山氏の150頭を筆頭に多少なりと余裕の出来た2～3人が飼い始めているにすぎない状態である。牧草はコロニョン，ジャラグワ種が主で1アルケールに5頭以内を放しているのが普通である。

この地方の胡麻栽培は1965年に試験的に植えたのがその端緒となったものだが1アルケールより50俵（3,000Kg）を収穫し，米の間作として適産物であることが立証された。胡麻油の原料としての需要が大きいので値段も或る程度維持され（1966年は1俵20～25コントをマークした）栽培法も簡単で費用もかからないため，現地人でも容易に栽培可能な点は大きな利点である。日系入植者の間では胡麻の搾油機械一式を共同で購入して農産加工部門への道を切り拓きたいとの機運が盛り上っている。1俵（60Kg）の胡麻から約30ℓが採油可能であり充分採算はとれるものと考えられ販路も既に州政府と交渉している段階であるが問題は機械購入資金であり日本製で約4.000コント（税金などを含めて）かかるものと見られている。

又，Jaciara市より1Kmのところに最近USINA JACIARA（ジャシアーラ製糖工場）が建設され，さとうきび栽培も有力な農産物として注目されてきている。乾燥期が長期に亘るため，成長が遅く出来も貧弱であるが糖分は濃く製糖用に適している。

学校は小学校のみで日本語教育は日本人会館で日曜日に開かれ20名の生徒を前原稔氏（渡航前は小学校教師）が教えている。

日本人会も結成されており青年会の野球熱も盛んだがこの植民地も入植歴（10年）が浅いため若い女性が少なく青年の結婚難を招来している。

13－(2)　マット・グロッソ地域概況（中部）

ノロエステ鉄道沿線にあるコルンバ市バルゼアアングレ植民地，ドイスイルモンスそれに日系集団都市のカンポグランデ市及びその近郊の4地区を総括してマット・グロッソ州中部と称した。

(1)　Corumbá 地域

コルンバ市（推定人口45,000人）は，カンポグランデ市より西へ鉄道458Km，ボリビア国境に位置する。

日系移住者は12家族（戦前移住者7家族）である。

食料品店，雑貨店等を経営している。

戦後移住者５人は全て独身青年でコルンバ市より２５Km 離れた地に借地し協同してトマト栽培を始めている。

主要農産物はマンガン鉱，肉牛，セメント，魚類（川魚）であり，蔬菜類，穀類等の栽培は鉱地質のため適さず９５％はカンポグランデ市及び他の地域からの入荷で補っている。

土地及び自然条件については標高１４０mの低地にあるため夏期においては湿度高く鉱地質のため輻射熱強く夜間に入っても気温の下がる事なく気候は悪い。

パラグワイ河を越え１０Km まで伯国領土であるが実際はパラグワイ河が国境の役目を果たしているため，外国人に対する漁業は禁じられている。なお，コルンバ市より７Km 離れたラダリオ市に陸，海，空の軍事基地があり国境警備に当っている。

現地伯人についてはボリビア系及びトルコ系が多い。トルコ系は商工業の分野に活躍しており，ボリビア系は生活程度も低くトルコ系の各商工業の雇用者が多い。

教育機関については小学校１３，中学校２，高校１が存在する。それ以上の上級学校はカンポグランデ市を利用している。

日本語教育に関しては日系人も少数のため開校されておらず日本人会としての組織もない現状である。

交通機関についてはノロエステ鉄道がカンポグランデ及びボリビアのサンタクルスに行っているのみで他に陸路による各都市との交通はない。

従って普通は交通は汽車のみである。

コルンバ（７：００）～カンポグランデ（所要時間１２時間）

コルンバ（７：００）～サンタクルス

コルンバ（５：１９）～カンポグランデ（火曜・金曜日のみ）

その他パラグワイ河による船連絡が北部のカンセレス市及びパラグワイ方面に不定期に運航している。

航空便としてはコルンバ市を中継点としてボリビア　サンタクルス市，カセレス市，カンポグランデ市，クヤバ市及びサンパウロに航空網が敷かれている。

(2)　Varzea Alegre 地域

バルゼアアレグレ移住地はテレーノス郡にあり，カンポグランデ市より西方約５０Km の地点にある。総面積３６,３６３ha でその内の一部に１９５９年５月より入植が開始され当初５１家族の入植者を数えたが１８家族退耕し，現在３３家族入植し営農に従事している。

当初米作にて入植したが地質に適合せず現在は養鶏を主体とした営農をとっており，カンポグランデ市，コルンバ市などの市場を控え比較的安定性をもった営農へと変りつつある。

移住地においての調査対象者は29家族で養鶏営農者は24家族であり移住者の82.8％は養鶏を行なっている。その収入は374,979コントスで総収入の66.4％を占めているが営農支出も飼料が117,730コントスで営農総支出費（202,819コントス）の58.0％を占めている。

鶏も成鶏，中雛，幼雛を合せ42,540羽おる（1家族平均1,636羽）この数字はマットグロッソ州調査対象者の鶏82.4％がこの移住地で占めていることになる。

近年養鶏も順調であるため資産も蓄積され車輌数も移住地内にトラクター13台，ジープ1台，耕運機12台入っており生産に全力をあげている。なお1家族当りの平均資産は24,510コントスである。

その他の農産物として米，棉などが出来るが，米は13,085コントス（3.5％），棉17,400コントス（4.6％）で総収入から見ると極く僅かである。果樹類としてパイナップル，ポンカン等栽培されているが出荷は少ない。

事業団の直轄移住地であるため事業団の融資利用状況も活発であり1965年度の融資利用は26,550コントスであり，マットグロッソ州全体の事業団融資の89.4％は当移住地で利用している。

交通機関については，移住地前（ペドロセレスチーノ駅）をノロエステ鉄道が通っており，カンポグランデ，コルンバ間を結んでおり更にボリビアへと通じている。

ペドロセレスチーノ（14：06　土曜，日曜を除く毎日）～カンポグランデ
ペドロセレスチーノ（　7：40　日曜を除く毎日）　～カンポグランデ
ペドロセレスチーノ（17：42　毎　日　）　～カンポグランデ
ペドロセレスチーノ（　6：53　土曜，日曜を除く毎日）～コルンバ
ペドロセレスチーノ（　7：39　毎　日　）　～コルンバ
ペドロセレスチーノ（10：56　18：52　毎日）　～アキダウアナ

その他道路が鉄道に沿って走っており，18Km　手前のテレノース市まではカンポグランデ市より34Km間舗装されている。テレノース以後は赤土をもり上げた道路であるので降雨の場合は出荷を遅らせることもある。

テレノースまではカンポグランデよりバスの便があり交通の不便はない。

(3) Dois Irmões 地域

(A) Dois Irmões 植民地

Dois Irmões 植民地（旧名カスカベル）はカンポグランデ市よりノロエステ線（ポンタポラン行き）の鉄道に沿って65Kmを南下した Sidrolândia市から更に西に65Km入った日系集団地でありAquidauma郡に属している。

Sidrolândia市までは鉄道便もあるがその他植民地までの直通便としてカンポグランデ市からは佐久間氏（入植者）の大型ジープ（15人乗り）が週に2度往復して入植者の便宜を計っている。

利用者は多く荷物がある時はトラックが代用されている。

Sidrolândia 市までは州道なので比較的整備されているが，植民地内の道路は狭くて坂も多いためカンポグランデ市からは4時間以上かかる。

Dois Irmões から30Kmほど北上してノロエステ線（コルンバ行き）のジャンゴ駅へ抜ける間道もあり近距離でもあるが部分的にひどい悪路があるため大型の車は通行不可能である。

近くに州道が貫通することになっている。

この植民地はカンポグランデ市の不動産業者である竹井氏が伯人の牧場主より買い求めた森林部を日系人に切り売りした土地であり8年前に入植が開始された。現在27家族（不在地主を含めて約100家族）が入植しており，うち戦後移民は5家族のみであり全般的にみて北パラナからの転住者が多い。

全員が自作農であり平均して30 ～ 40 アルケールとかなり広い面積を所有しているが主要農産物はコーヒーであり雑作もよく出来る地帯である。

コーヒーの植付け本数は5,000本～35,000本であるが，成育状況も良好で特にこの地帯の恵まれている点は降霜の心配がないことで標準収量は1,000本から4年樹で70～90俵，6年樹で100俵～160俵（実粒）である。

米作はほとんどがコーヒーの間作なので収量は少ないが1アルケール当り40～ 60俵は期待出来る。

Dois Irmões は気候条件は Campo Grande 一帯と大差がなく蚊が少ない健康地といえるが最大の欠陥は地下水の不足であり井戸は25m以上堀り下げても水が出ないところも多く全入植者の半数はトラックで水を運び貯水タンクを備えている。将来は共同出資で堀り抜き井戸を敷設して各戸に配る方法が計画されている。

日本人会も結成されているが，日本語教育の方は組織的には教えられていない。

青年会では野球チームを持っていて Campo Grande, Varzea Alegre などの各チームと練習を行なう他，マット・グロッソ州野球大会にも毎年参加している。

金融機関の利用としては伯銀が大半であるが Aquidauma 管轄であるため Sidrolândia 市では用が足せず一応 Campo Grande 市まで出て Aquidauma 市まで足を伸ばすため遠距離になる点が不便である。

最後にこれは日系人の集団地帯では多かれ少なかれどこにでも見られる現象であるが入植家族の増加に伴う地価の急激な暴騰ぶりでそのため後期の入植者或いは更に土地を広げたいものは必要以上の高い地価（借地料も同様）を払わなければならないという事実である。

Dois Irmões植民地もその例に洩れず現在の地価は１アルケール400コント以上といわれており日系人が牧畜に着手しようにも既に手遅れというのが現状である。

従って周囲の伯人の地主にとっては日系人が住み着くということは即ち土地の値うちが出ることを意味しているわけで日系人にとっては，後年の事業の拡張に制約を受けること甚大である。

(B) Quebra Côco 植民地

Quebra Côco植民地は Dois Irmões の 30Km（Campo Grande より100Km）手前に開けた日系人の小さいコロニアであるが気候，土質などの条件は Dois Irmões と全く変らず主産物もコーヒーと雑作である。

現在11家族が在住しているが戦後移住者は１家族のみであり日本人会は結成されていない。

Dois Irmões も同様だが，薬を求めるにも Sidrolândia (35Km)まで行かねば薬店がないという不自由さがあり近所にも小さな薬店の設備が急務と考えられる。

(4) Campo Grande地域

(A) Campo Grande市内

Campo Grande 市はサンパウロ市から陸路約1,300Km，マット・グロッソ州の玄関口ともいえる雄都であり，同州の経済文化の中心地である。

首都 Cuiabá 市までは約900Km の距離にあるが Campo Grande 市の近年の大躍進ぶりは Cuiabá 市をはるかに凌いでおり市内人口でも10万を越し郡内を含めると11万２千人を数える大都会となっている。

サンパウロ市からはバスで約一昼夜（24時間）であるが，州境の橋を越えると平坦な草原が500Km余り延々と続きその間は町の姿一つ見えない荒涼とした風景が続いている。

Campo Grande 市及びその周辺は日系人の一大集団地でもあり現在市内に約600家族，近郊を合わせると800家族に及ぶ家族が在住しており，その80％が沖縄出身者である。従って日系人の動きも沖縄出身者が主流を成しており市内ではバール，食料品商，雑貨商，八百屋，写真店，美容院，薬局，建築材料店，時計店などの各分野の職業に従事しており，中でもフェイラ（露天市場）の蔬菜商人の数は圧倒的に多く90％以上のバンカを日系人が所有している。

又1958年に新設された中央市場も長さ100m，巾30mの広大な建物であり，ここでも蔬菜商人の大半は日系人で市場内の勢力を握っている。

又奥に Rondonópolis, Coxim, Rio Negro などの米作地を控えている関係で管内には精米工場が多く24工場のうち半数以上が日系人の経営になるものである。

日系人の Campo Grande 入植は古く1966年日本政府から勲5等に叙せられた中尾権四郎氏（ペルー移民）がセグレード植民地を選んで土地を求めたのが最初の地主であり1917年のことであった。

1914年にノロエステ鉄道が，パウルーカンポグランデーコルンバを貫通してからは Campo Grande 市の進展もめざましく，第二次世界大戦中の第九軍団の設置に伴う軍事景気の到来，ブラジル一の発電量を誇るウルブブンガ発電所（サンパウロ州境）の建設による都市の近代化で現在の Campo Grande 市に成長したものである。

日系人団体組織も結成され，歴史も古いが代表的なものは沖縄協会カンポグランデ支部とカンポグランデ連合日本人会でありいずれも立派な新会館の設備を持っているが特に前者の沖縄協会支部会館（1966年9月落成）は総工費7万コントスが投入されたもので完成までに4ケ年の年月が費いやされ，日本人会館ではおそらく全伯一の規模を持つものといわれている。

日系移住者の子弟教育に対する関心の深さはどこでも見られる現象だが Campo Grandeの日系人もその例に洩れず二世の進学率は高く同地出身の学士だけでも60名を越しており医師，弁護士，薬学士，工学士，中学教師などの各部門で活躍している。

同市の保健衛生事情は完備しており，病院も HOSPITAL DA SOCIEDADE BENEFICENTE, SANTA CASA STA MARIA HOSPITAL FILADELFO

GARCIA の三大病院の設備がある。

学校では COLEGIO DOM BOSCO が有名だが小学校から大学までのクラスがあり，食堂，寄宿舎の設備も整った大規模なもので日系人生徒の数もかなり多い。

なお，この学校に附属したインジオ博物館にも貴重な学術資料が多数陳列されている。

(B) Campo Grande 周辺 日系植民地

Campo Grande 市周辺には多数の日系植民地があり，主に蔬菜，養鶏を中心にした農業を営んでいるが入植者は大半が蔬菜のフェイランテ（露天商人）を兼業しているなど堅実な歩みを見せている。

なお，戦後のカベン移民の転住者が多数固まっているのも目立った現象である。

地形が平坦であり，気候にも恵まれている地方なので牧畜にも適しているが日系人ではまだ着手しているものは少なく1,000 頭を放牧している。

大成辰雄氏（リンコルン区）が抜き出た存在である。

銀行融資利用度は他の州に比して特に低いようであるが，植民者同志の頼母子講（もやい）は非常に盛んであり，ほとんど全家族が種々の頼母子講に加入している。金額は月掛け 20コントスから 80コントスが普通だが多いものは3～4口に加入して総額2,000コント程の積立金に達しているものも見られる。

一方新興めざましい Campo Grande 市の余波を受けて，その周辺の地価の暴騰ぶりもすさまじく現在市内から10Km 内外の土地だと1アルケール当り8,000～10,000コントである。

この傾向は移住事業団からの土地購入資金の貸付けが発表されて以来一層拍車をかけられたのは皮肉な現象である。

次に主な植民地をあげてみる。

㋑ マット・セグレード

日系人最古の植民地で入植 50 周年を迎えた。

市内から7キロで 20 家族（うち15家族は地主）が在住し，蔬菜類の他コーヒーさとうきび，養鶏などが主作物である。

㋺ マット・ド・セローラ

市内から10 キロの地点で第1，第2の植民地に分かれている。入植家族は 83 家族を数え戦後移民は 13 家族である。

㋩ カスタード

市内から約5キロ，チシャ，ニンジン，玉ねぎ，トマトなどの蔬菜栽培が主で全員がフェイランテを兼ねている。戦後移民は11家族で，全体で約30家族の日系人が住んでいる。

㊀ バンティラ

Campo Grande 市内に属しているが軍隊の敷地内で5家族が野菜を植え軍隊に納める他残りをフェイラで捌いている。

㊁ ジャラクワ

市内から約25キロで戦後移民の9家族（戦前は3家族）は全員がカペン退耕者である。この地方は伯人の大農場の一部であり，入植者の大半は1年間野菜を作った土地に牧草を植えて返還する無料借地の条件という方法をとっている。同じコースを辿ってきた同胞だけに団結心は強いようである。

㊂ 日の出植民地

市内から5キロで戦前2家族戦後14家族が在住し，ほとんどが野菜栽培者である。この植民地は石川盛徳氏が自分の土地にカペン退耕者を集団的に入植させたもので借地農家がほとんどである。

㊃ ラジャード

市内から17キロ，トマトを始め野菜栽培者が主で戦前1家族を含む5家族全員が借地農であり，1アルケールにつき年間200～300コントスの借地料が相場である。

㊄ リオ・ネグロ

Campo Grande 市を100Km北上した植民地でバス便もある。

入植者は戦前移民のみで90家族を数え米，フェイジョン，とうもろこしなどの雑作地帯である。

13－(3) マット・グロッソ地域概況（南部）

マット・グロッソ州南部はドラードス市を中心とした地域を総称し，即ち 3ª linha, Barrerão, Dourados, Curpai, Navirai の5地域に大別することが出来る。

(1) 3ª linha（松原植民地）地域

和歌山県出身の松原安太郎氏が伯国政府より供与を受け，氏の郷里である和歌山県より1953年集団移住者を受け入れ，現在の植民地を築きあげると共に戦後移住者のマット・グ

ロッソ州への移住の足がかりとした。

現在44家族（戦前移住者5家族）入植し，コーヒー栽培及び雑作，養豚に従事し一般に安定した生計を営んでいる。コーヒーの場合地域により霜害を受けるため（低地の斜面に被害多い）その地域の移住者は雑作及び養豚に切り替えて将来の見透しをたてようとしているが，コーヒーがすでに成木のため営農形態変更に躊躇している傾向が一部見られる。特にコーヒーは本年8月5～6日の霜害がひどく現在299,200本（調査対象者32戸）のコーヒーは調査対象者全体の33.6%の所有者であるがそのコーヒーが霜害のため，枯死寸前にあり今後の営農に大きな打撃を与えた。

土地は緩い起伏で土地は肥沃であり雑作類はほとんど無肥料で栽培している。その雑作を利用し養豚へと一歩前進する事が望まれる。

コーヒーは霜害のため減収しているとはいえ，146,230コントス（27戸）で昨年の農産物の全収入の75.2%で1位を占め，次いで落花生の18,660コントス（19戸）9.6%，肉豚の12,375コントス（14戸）6.3%等が主な収入源となっている。

教育関係については，植民地内に小学校1校あるのみでそれ以上の上級教育はドラードス市に於て下宿生活を行ない教育を受けている。ドラードス市（市内推定人口15,000人）に於ては中学，高校までの教育機関は一応完備きれているので経済的余裕のある農家は子弟をドラードス市において教育させている。

なお，植民地内の小学校には教師1人で1学年から4学年まで担当しているので十分な教育が出来ないのが実情である。

日語教育は日本人会の協力により毎日曜日に日本人会館において行なわれている程度である。

交通機関については，ドラードス市より東北東60Kmの地点に位置し，ピラピヤンチーナ（午後2時発）よりバスが1日1本（所要時間2時間半）植民地内の一部を通る（Culturama行き）。ドラードスより植民地まで交通機関を示すと下記の様になる。

ドラードス　（1時間毎バス）　～ピラブラジル

ピラブラジル　（常時乗合タクシー）　～ピラピセンチーナ

ピラピセンチーナ（1日1本午後2時発バス）～松原植民地

ピラピセンチーナより松原植民地一部まで15K間は交通量1日1本のため交通の便は悪い。

医療機関については，植民地内には医療設備はなくピラブラジルに於て数人の医者（伯

人）が開業しているが，松原植民地の人々はそのほとんどがドラードス市内の医療衛生機関を利用している。風土病の一つであるマラリヤの集団発生はここ数年みられていない。

現地伯人については，当植民地に於いて数家族土地を所有し雑作を耕作しているが一見して管理が悪く最低の生活をささえる程度であり，経済的基盤は確立していない。その他の現地伯人は農夫として日系人農家にて日雇いで就労しているが教育程度は低く労働意欲もうすく生活内容も日系人とは比較にならぬほど低い。伯人農夫を使用することを好んでいない日系農夫もあるが農繁期などは人手不足のためにこれらの現地人を利用している。

いずれの地域においてもいえることであって，現地人は移動性が激しく邦人に比べ定着性は極めて低い。

(2) Barrerão 地域

ドラードス市より東北東 30Km に位置し，ビラブラジル，ファチマドスールを含んだ地域を総括してバレロン地域とした。地質は豊かなテーラロシャであり，緩やかな波状をなしている。

調査対象者は35家族であり，その34家族は自営農であり，主な作物はコーヒーであるが霜による被害も少なく，その上土地も肥沃であるため比較的経済的には恵まれた生活を営んでいる。ほとんどの農家がコーヒーを主体とした営農で自家用程度の雑作を若干取り入れている。

調査対象者35家族の内28家族のコーヒーの全本数は309,450本，1家族平均11,000本，マット・グロッソ州調査対象者全体の34.7%の所有であり，前記の3ª linha（松原植民地）と合わせて過半数がこの両地域に栽培している。

バレロンに於いてのコーヒーの収入は146,250コント（23家族）であり総収入の80%はコーヒーに依存している。土地も肥沃で霜害も少ないことから地価も相当高く1alq 1,500コントはしている。

コーヒーによる収入もよいため車輌所有数も多く21台（耕運機も含む）を数え，1家族平均1.5台の所有である。そのため資産も多く1家族当り30,000コント弱をみている。

交通機関についてはドラードス～ビラブラジル～グロリアデドラードス～ノーバアンドラディナを結ぶ主要幹線上にあるためバスの運行も頻繁であり交通の便は非常に良い。

教育機関については小学校のみでそれ以上の上級学校は松原植民地と同様にドラードス市まで出なければならないが，交通の便はよいのでドラードス市内に下宿する必要なく通学（約1時間半）も可能である。

医療機関については，ビラブラジルにも医者はあるがほとんどの人達はドラードス市の医療機関を利用している。別に風土病の発生もなくいたって健康地である。

(3) Dourados 地域

マット・グロッソ州に於いてカンポグランデに次ぐ日系人の集団都市である。ドラードス市（調査対象者 21家族）より東へ35Km のバナンビー（調査対象者5家族）及び 25 Km 地点のラランジャリマ（調査対象者6家族），北北東17Km のイタポラン（調査対象者6家族）ラランジャリマ手前のビラバルガス（調査対象者1家族）等は本調査まとめにつき便宜上のためドラードス地域に一括した。

従ってこの地域の調査対象者は 39家族である。

ドラードス市は南マット・グロッソ州に於ける教育，医療，文化，交通機関の中心であり，農産物の集散都市である。

市周辺の戦後移住者は多くの都市地域にいえることであるが野菜栽培を行なっている。野菜の収入は全農産物の収入の33.5%を占めている。作物の性質上短期栽培で，資金の回転が早く小面積にて栽培出来稼働力も雑作栽培より必要とせず少額でありながら現金収入が何時もあり（水曜，日曜日の市（フェイラ）にて販売）その子弟の教育にも便利なところから市内周辺に集中して来ている。しかしながら市周辺の土地は悪いため雑作を除いた営農支出の 25 %は肥料購入にあてがわれている。

ドラードス地域に於いての農産物の売上総収入をみると米10,512 コント（9.3 %），コーヒー16,740コント（14.8 %），落花生 18,610コント（16.5 %），棉14,150コント（12.5 %），野菜類37,930 コント（33.5 %），その他15,675コント（13.4 %）となる。これを見てわかるように市内に於いての野菜収入が上位を占め，市周辺及び近郊に於いては雑作を主体としたコーヒー栽培をしていることが判明する。

市郊外に於いての地質はテーラーロシヤの肥沃地帯（市周辺とは対象的）であり，一般に緩やかな波状が続いている。

交通機関については主要幹線が

ドラードス～カンポグランデ　1日3本

（6：00　10：00　14：30）

ドラードス～パラナ州へぬけるバスはパラナバイまで2本

（8：00　14：00）

ドラードス～ポンタポラン　2本　（7：30　13：00）

市近郊はイタポラン８本，ピラブラジル９本，ポルトビルマ１本，ピラウニオン１本，市内の交通機関はタクシー２～３台しかなく主に馬車が利用されている。近郊周辺までの便は発達しているが道路は悪くドラードス市内をはじめドラードス地域には舗装されている区域は（ドラードス市の舗装工事を９月より開始している）ないので乾燥期には埃が舞いたち，一旦雨が降ると泥道と化し農産物の出荷なども遅滞せざるを得なくなる。しかしサンパウロ州とマット・グロッソ州を結ぶＢＲ－１６，ＢＲ－３４　各線では舗装工事も開始されており，交通事情は徐々に整備完成されつつある。

医療機関については，ドラードス近郊の地域にも開業医はいるが設備不充分のため多くの人達はドラードス市の医療機関を利用している。市内に於いての医療機関は公官立４院（１３８床），私立院でもってほとんどの南マット・グロッソ州の住民の医療衛生を賄っている。しかし重病者あるいは大手術の場合は設備及び技術に安心出来ずカンポグランデ市，サンパウロ市を利用することがある。

教育機関については郡内に於いて次の様な学校数を見る。

小学校　９３，　中学校　３，　高校　１，商業学校　１，師範学校　１，

農業学校　１

等となり，小学校の数校を除いたその他の学校は全べて市内にある。従って中学以上に進学する場合はドラードス市まで行く必要がある。ドラードス市は南マット・グロッソ州の教育地となり一応高等学校まで完備されているため，南マット・グロッソ州の日系農家の子弟はほとんどこの市に於いて教育を受けている。大学はカンポグランデ市，クヤバ市（州首）にある。

娯楽機関については，市内日系人家族は１５１家族あり，片山利宣氏を会長にして日本人会を組織している。年間行事として運動会，演芸会，野球大会等を行ない，全員相互の親睦を計っている。

なお，市内唯一の映画館に於いて日本人会とは別であるが週２回日本映画も上映されており，ドラードス市及び近郊の日系移住者の郷愁を満喫させている。

その他市内在住日系人の進出は雑多ではあるがコーヒー精選工場及び精米所主３人を筆頭に，旅館業１，牧場主（５００　alqs以上）２，雑貨商数軒（戦後移住者１軒），レストラン兼バール数軒（戦後移住者２軒），写真店２軒，八百屋，大工等が主な職業分野である。

その他市の主な施設を参考までに記すとペンソン１６，水道施設４７３軒，電気施設

1,160軒，電話施設221軒，新聞社3，放送局1となっている。

(4) Curpai（和歌山植民地）地域

ドラードスより南へ150Kmの地点に和歌山不動産が開発した植民地で1958年24家族，1959年17家族，計41家族の入植者があったが，立地条件が悪いため（A.ドラードスから遠距離に存在，B.道路の不完備　C.瘠地であるため）脱耕者が多く現在12家族が留っているに過ぎない。

主作物はコーヒー及び落花生で前者が総収入の60.1％　26,000コント（9家族），後者の落花生が39.8％で17,210コント（9家族）を占めている。これでもわかるように，コーヒーと落花生の単作営農であることがうかがわれる。

コーヒーは全本数101,120本（10家族）平均1家族10,000本の所有となる。コーヒー10,000本の所有は順調の場合一応経済的に生計は成り立つが，霜害のため減収しており，コーヒーの1家族平均収入は3,800コントである。

交通機関については，ドラードスよりのバス便はなく植民地内のトラックが週1度位ドラードスに出て全ての用事を済す。しかし，その間の道路は悪く降雨の際は運行は出来ぬ状態である。

教育機関については小学校1校あるのみでそれ以上の上級学校は150Km離れたドラードスで下宿しての勉学である。

現地伯人については農夫は外部から伯人を連れて来るが多くは独身者の流れ者であり僻地植民地で娯楽設備も皆無のためピンガをのみ，伯人同志の流血沙汰が時々ある。日系人はそのようなことにまき込まれることはないが駐在所もないため決して治安は安定しているとはいえない。

現地伯人（農夫）は独身者が多いためほとんど定着性はない。

(5) Navirai 地域

ドラードス市南々西の45Km　カフェボラン（調査対象者5家族），同じく南へ146Kmのナビライ（調査対象者4家族），170Kmのファゼンダカイウア（調査対象者7家族），ナビライ沿道の以上の3植民地（調査対象者計16家族）を総合し，ナビライ地域に一括した。

主要農産物は棉，ハッカ，コーヒー等でありその中でも棉とハッカの生産の収入の多くを占め，棉は99,000コントスで総収入の（66.5％），ハッカは35,700コント（24.0％）で棉とハッカで90.5％を占めている。

コーヒーの本数は66,000本（調査所有対象者5家族）1家族平均15,200本であるが，霜害のため生産は上らず僅か8,500コントス（5,7％）1家族平均1,700コントスである。しかし支出の方は，棉とハッカのための営農支出が大であり，収穫期及び管理に費す人件費は77,470コントスで総支出の72.6％を占め，次いで消毒のための農薬消毒額は27,650コントスで25.9％を占めている。

カフェボラン及びナビライはコーヒーを主体とした雑作栽培を行なっているが，棉，ハッカの生産の多い地区はファゼンダカイウアで，この地区は会社組織として2会社が入植営農を行っており両会社合わせ318alqs借地している。伯人も100家族は入植しており農夫として棉，ハッカ栽培に従事している。

営農規模も大きいため，銀行関係の利用額も大きく44,300コントスを伯銀（Banco do Brasil）より借り入れている。この額はマットグロッソ州12地域，全体借入額の22.3％に当る。

医療関係についてはカフェボランには医療機関は皆無である。カフェボラン入口にあるノーバアメリカ（人口600～700人）に薬局が一つだけ存在しているだけであるのでドラードス市の医療機関を利用している。

ナビライ（人口3,000人）においては開業医1，歯科医2があるが，これも施設不完備であるので多くの住民はドラードス市の医療機関を利用している。

ファゼンダカイウアに於いては医療機関もなくドラードス市とも遠距離にあり，会社がパラナバイにあるため，パラナ州のパラナバイまで出かけるが現地伯人はナビライ，ドラードスの出身者が多いため両方の機関を利用している。

教育機関についてはカフェボラン小学校1，ナビライ小学校2，ファゼンダカイウア小学校1でそれ以上の上級学校はないが，カフェボラン及びナビライ両地区の移住者は子弟の教育をドラードス市において受けさせている。

ファゼンダカイウアに於いては未だ移住者は若く（子弟の全ては未就学児童）借地農のため，現地において定着は考えておらず教育のことは憂慮していない。

治安問題については，カフェボラン及びナビライに於いては平穏で心配ないが，ファゼンダカイウアに於いては伯人農夫も多いため時々伯人同志の喧嘩沙汰があるが，さして問題にするほどではなく現地人の植民地内では一応ビンガの飲酒を禁じている。

(6) Ponta Porã 地域

ドラードス市より西南120 Km パラグワイ国境ペドロファンカパリエロ市に隣接して

いる。

国境の町として開けた地域で日系人移住者は19家族（戦前移住者1家族）その内農業従事者は1家族でその他は全て八百屋，雑貨店，食料品店等を経営している。又その内6家族はパラグワイ国側において営農しており商業及び農業を両立させて安定して経営をしている。

即ち商業はポンタポラン市郊外で行ない，農業はパラグワイ側で行なっている。

ポンタポラン市日系居住者はパラグワイ国ジョンソン耕地及びフラム植民地からの入植者であり，深谷林作氏を会長にして19家族でポンタポラン同志会を組織している。

パラグワイ国側ペドロファンカバリエロ市に於いては，湯浅正木氏を会長にして40家族（185人）で日本人会が組織されている。

地質は粘土質のテーラロシャであり地形は平坦である。

現在市内の宅地価格は30m×40mで1,000～1,500コントス位の価格であり，毎年昂騰気味である。

ポンタポラン市側に於いては主として牧畜でサンパウロ方面に供給している。

パラグワイ側に於いてはコーヒーを主体とした営農を取っているが，今年8月の降霜により被害を大きく受けコーヒーのみの単作栽培を変更する過渡期にあるものと思われる。

教育機関についてはポンタポラン市に於いては小学校6，中学校1ありそれ以上の高等教育はドラードス市及びカンポグランデ市の教育機関を利用している。

日語学校はポンタポラン市にあり隣接のペドロファンカバリエロ市の日系人子弟もポンタポラン市に於いて合同し勉学しており教師1人に生徒数は50人位である。

医療機関については，公官立2，私立院4あり，パラグワイ側には完備した医療機関がないのでペドロファンカバリエロ市の住民はポンタポラン市の機関を利用している。

なお，両市の住民は20Km以内ではどちらの土地に居住してもよいことに両国の国交により承認されている。但し土地の所有は認められない。

交通機関については，

ポンタポラン～ドラドース　1日2本　（バス　3時間）

ポンタポラン～コンセクシオン　1日2本　（バス）

ポンタポラン～カンポグランデ　1日1本　（6：15発で汽車10時間）

等が主要幹線であり交通の便は比較的良い。

現地伯人についてはパラグワイ国境にあるためパラグワイ系住民が多く言葉も伯西両語

通用する。

伯国の方が経済状態が豊かなためパラグワイからの多くの流入労働者を見る。

ペドロフアンカバリエロ市に於いては伯国紙幣も流通し経済的にポンタポラン市に従属している傾向がある。

なお，国境には騎兵連隊が両国とも駐屯し国境警備に当っている。

14. 戦後移住者県別農業形態及び家族数

形態	人数＼県	北海道	青森	岩手	秋田	宮城	福島	山形	茨城	埼玉	群馬	東京	千葉	神奈川	静岡	栃木	山梨	長野	新潟	富山	福井	愛知	岐阜	石川	滋賀	京都	兵庫	大阪	和歌山	奈良	三重	岡山	島根	鳥取	山口	広島	愛媛	香川	徳島	高知	福岡	佐賀	大分	長崎	熊本	宮崎	鹿児島	沖縄	合計	%
自営	単身数																	1																																1	63
	家族数	36			1		7		1		2	2		2				3			1			5				2	56		4	2	2		22	6	1	1	1	1	4			2	1		2	16	183	620
	人員数	274			4		43		3		9	9		6				10			3			29				9	332		20	10	15		123	34	10	6	3	6	17			8	8		14	122	1,127	670
借地	単身数	1																																		2			1			1							3	8	500
	家族数	3		1	1		1	1				1							1					1				1	4							2			1	1	3	3			1		1	50	77	261
	人員数	11		3	5		7	4				6							4					6				6	25							2			1	2	16	16			2		3	287	406	241
分益	単身数																																								1								1	63
	家族数	1							1					1															5						3							4			1	1		3	20	68
	人員数	9							2					9															27						15						21				4	3		19	109	65
雇用	単身数					1			1																			1								1					1				1				6	375
	家族数		1		1	1			1		1																	1	2		1				1	1					1				1	1		1	15	51
	人員数		2		3	1			1		7																	1	7		4				4	1					1				1			5	41	24
合計	単身数	1				1			1									1										1								3			1		2	1			1			3	16	100
	家族数	40	1	1	3	1	8	1	3		3	3		3				3	1		1			6				1	3	67		5	2	2		26	9	1	1	2	2	12	3		2	4	2	3	70	295	100
	人員数	294	2	3	12	1	50	4	6		16	15		15				10	4		3			35				1	15	391		24	10	15		142	37	10	6	4	8	55	16		8	15	6	17	433	1,683	100
総人数に対する県別の%		17.47	0.12	0.18	0.72	0.05	2.99	0.25	0.36		0.96	0.87		0.87				0.59	0.25		0.18			2.08				0.05	0.87	23.25		1.43	0.59	0.87		8.44	2.20	0.59	0.36	0.25	0.49	3.27	0.96		0.49	0.87	0.36	1.01	25.73	100	100

15. 渡航前の職業別表

自営					雇用							
農業	漁業	工業	商業	計	農業	漁業	事務	技術	販売	その他	計	
192	1	9	19	221	3	2	13	24	1	31	74	295
86.8	0.5	4.1	8.6	100%	4.0	2.7	17.6	32.4	1.4	41.9	100%	
65.0	0.4	3.1	6.4		1.0	0.7	4.4	8.1	0.4	10.5		100%

15 −(1) 渡航前の職業別

（表説明）

渡航前の職業別を見ると自営農業が大きな地位を占め295 家族のうち192家族 65.0 %次いで雇用のその他の項目になるがこれは調査票に学生の欄が設けられなかった関係上学生は雇用のその他の項目に一括したため 31 家族 10.5 %の数字を示している。

雇用の技術系統に於いては大工が首位を占め旋盤工，運転手などがこの項目に包括されている。

雇用の事務に於いては農協及び小企業などの事務系が主である。

なお，自営商業があるが，これは雑多であり，特別な商業は見当らなかった。

16. 家族移住者の学歴別農家形態表

営農形態	旧小学校		旧高小学校		旧中学校		旧大・旧専		その他		新中学校		新高校		新大		計
	中退	卒業	中退	卒業	中退	卒業	中退	卒業	中退	卒業	中退	卒業	中退	卒業	中退	卒業	
独立	2	28	1	84		21	1	6			1	15	2	17	1	4	183
借地		7		21		7		2				15	1	23		1	77
分益		1		7		4						4	1	3			20
雇用		2		1		1		2				2		7			15
計	2	38	1	113	0	33	1	10	0	0	1	36	4	50	1	5	295
%	13.6		38.6		11.2		3.7		0		12.6		18.3		2.0		100

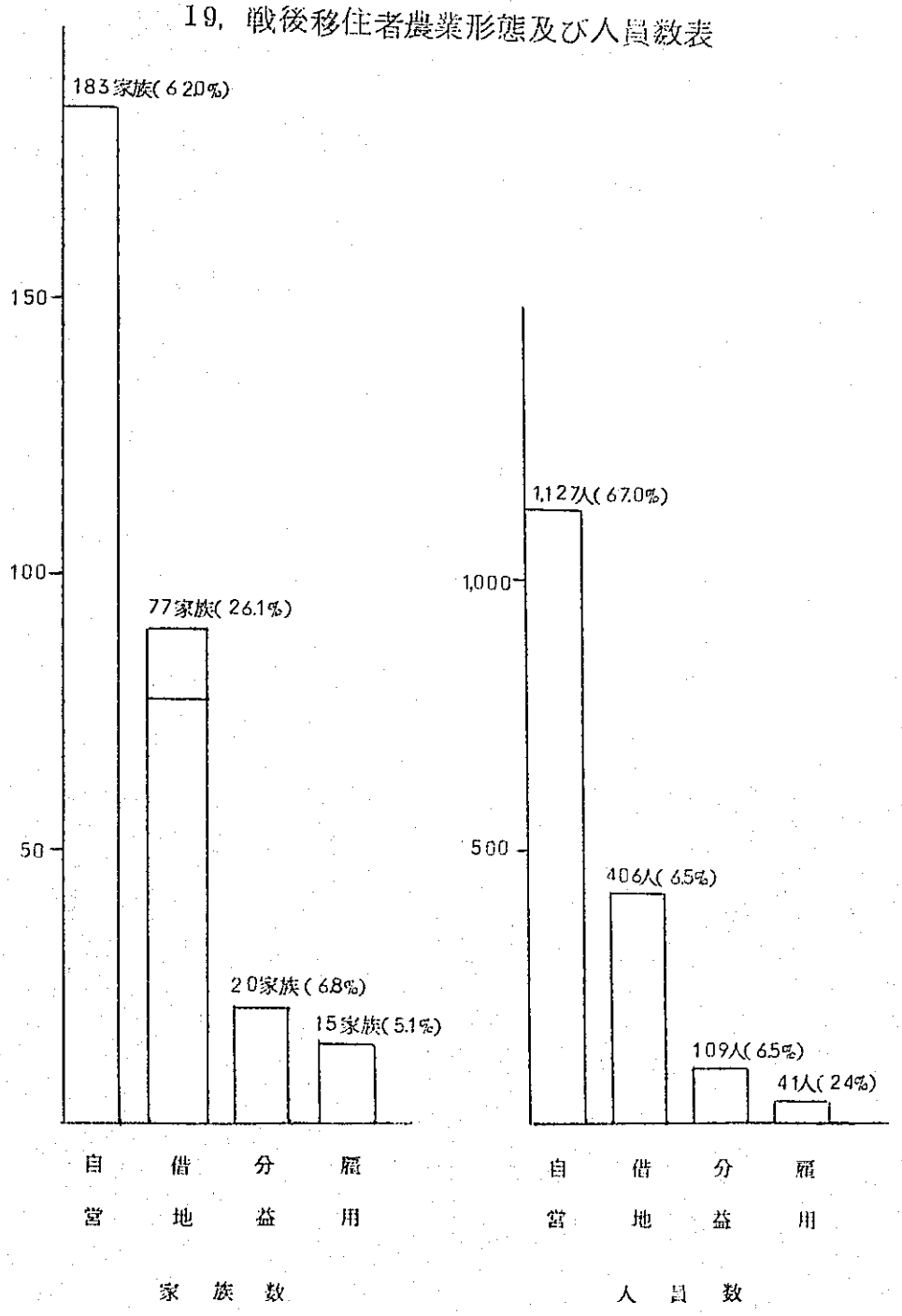
17. 在伯年数別表

営農形態＼年数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	計
自　営	0	1	1	4	8	26	17	14	10	30	11	21	39	0	1	183
借　地	0	0	0	1	0	24	10	12	5	11	8	4	2	0	0	77
分　益	0	0	0	3	3	2	2	3	2	2	0	2	1	0	0	20
雇　用	0	1	0	1	1	2	4	0	0	1	1	3	1	0	0	15
計	0	2	1	9	12	54	33	29	17	44	20	30	43	0	1	295
%	0	0.8	0.3	3.0	4.1	183	11.2	9.8	5.7	14.9	6.8	10.2	146	0	0.3	100

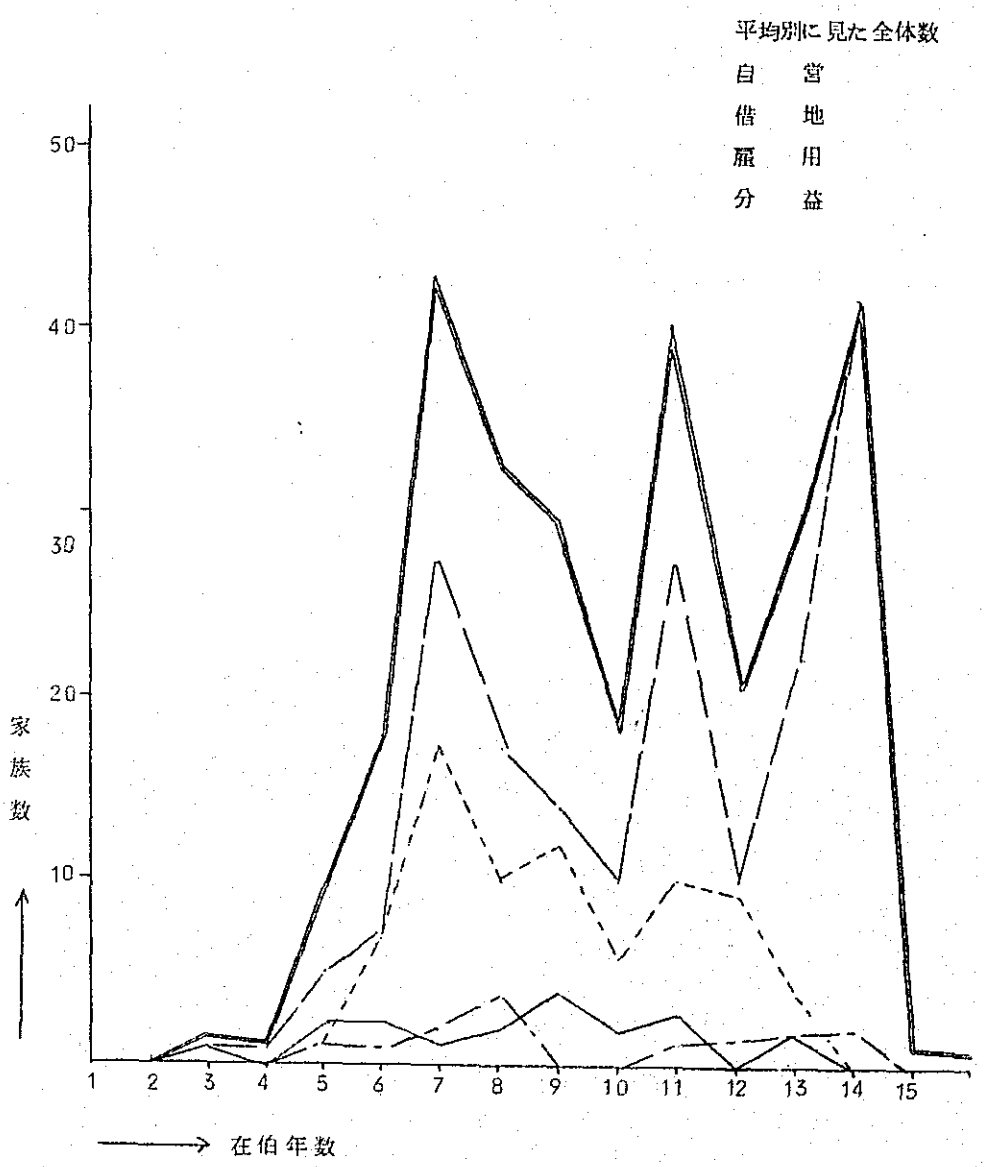
18. 営農形態別に見た家族構成

性別	営農形態＼年令	～5	6～14	15～19	20～29	30～59	60～	計
男	自　営	102	109	80	102	163	31	587
	借　地	52	45	28	45	58	4	232
	分　益	12	15	6	14	16	3	66
	雇　用	5	2	0	11	5	0	23
	計	171	171	114	172	242	38	908
女	自　営	94	133	65	76	144	23	535
	借　地	38	38	17	27	47	7	174
	分　益	8	10	7	9	14	0	48
	雇　用	7	2	1	6	2	0	18
	計	147	183	90	118	207	30	775
	合　計	318	354	204	290	449	68	1,683
	%	18.9	21.0	12.1	17.2	26.7	4.1	100

19. 戦後移住者農業形態及び人員数表



20. 営農形態別に見た滞伯年数とその家族数



21. 営農形態別労働換算率表

営農形態＼労働換算率	1以内	1.1～2.0	2.1～3.0	3.1～4.0	4.1～5.0
自　　営	4	26	45	50	30
借　　地	8	20	16	12	15
分　　益	1	4	5	4	6
雇　　用	6	4	4	1	0
計	19戸	54戸	70戸	67戸	51戸
%	6.4	18.3	23.7	22.7	17.3

営農形態＼労働換算率	5.1～6.0	6.1～7.0	7.1～8.0	8.1以上	計
自　　営	16	8	4	0	183
借　　地	4	2	0	0	77
分　　益	0	0	0	0	20
雇　　用	0	0	0	0	15
計	20戸	10戸	4戸	0	295戸
%	6.8	3.4	1.4	0	100

標準労働換算率表

性＼年令	～5	6～14	15～19	20～29	30～59	60～
男	0	0.3	0.8	1.0	1.0	0.6
女	0	0.3	0.8	0.8	0.8	0.4

22. マットグロッソ州の地域別年次別入植状況

年＼地域	日本	サンパウロ州	パラナ州	ボリビア国	パラグワイ国	その他	計	%
1951年						1	1	0.3
1952年							0	0
1953年	45						45	15.3
1954年	18	2					20	6.8
1955年	8	1	1				10	3.4
1956年	18	1	2				21	7.1
1957年	12	2	3		2		19	6.4
1958年	29	6	1		2	2	40	13.6
1959年	21	7	2		7		37	12.5
1960年	44	1	3		1		49	16.6
1961年	7	4	2				13	4.4
1962年	7	4	4	1			16	5.4
1963年	2	3		1		1	7	2.4
1964年	1	1	1	1			4	1.4
1965年	2	2	5	1			10	3.4
1966年	1	1	1				3	1.0
計	215	35	25	4	12	4	295	100
%	72.5	11.9	8.6	1.4	4.2	1.4	100	

22－(1) マット・グロッソ州の地域別年次別入植状況

（表説明）

地域別，年次別入植状況を見ると日本から直接マットグロッソ州に入植した移住者は 215 家族で 72.5 %を占め，次いでサンパウロ州よりの入植 35 家族 11.9 %及びパラナ州よりの

25家族 8.6%である。ボリビア国からの転住者4家族は第一サンファン移住地からの入植であり，パラグワイ国からの転住者 12家族はジョンソン耕地からの入植者である。

1960年以降のパラグワイ国からの転住者は調査対象者に於いて見受けられなかったが，非調査対象者としてポンタポラン市に18家族が商業を営んでいたのを始めとして，パラナ州，サンパウロ州の両州に推定 34～5家族 パラグワイ国からの転住者が居住しているものと思われる。

パラグワイ国及びボリビア国からの転住の主な理由を要約すると次の3項目である。

(1) 市場性がない。

(2) 子弟の教育が充分出来ない。

(3) 文化の浸透が遅いため戦後移住者には耐えられない。

その他の転住者はアルゼンチン国，ロンドニア州，アマゾナス州の夫々1家族である。

年次別に入植状況を見ると，1953年及び1960年が最も多く1953年は松原植民地に和歌山県より入植してきており，1959年から1960年にかけては山口県人のバルセアアレグレ移住地及び沖縄県人のカッペンへの入植，1954～5年にかけてはバンロン（共栄植民地）へ北海道からの入植があった。

なお，1952年より第1回戦後移住が開催されたが，1951 年の入植者の1家族はアルゼンチン国よりの転住者である。

職種 / 形態 / 地域	養鶏					雑作					野菜				
	自	借	分	雇	計	自	借	分	雇	計	自	借	分	雇	計
Cáceres 周辺							4			4	2	2			4
Cuiabá 周辺											1	4	1		6
Rio Ferro															
Rondonópolis						8	3	1	1	13	4	1			5
Dois irmões						5				5					
3ª linha						8				8					
Barrerão						5				5	1				1
Dourados						6	2	1		9	6	5		2	13
Carpai						3				3					
Navirai						2		1	1	4	1				1
Varzea Alegre	26				26	2				2		1			1
Campo Grande	1				1		2		1	3	11	45	6	1	63
計	27				27	39	11	3	3	56	26	58	7	3	94
%	9.25%					18.98%					31.90%				

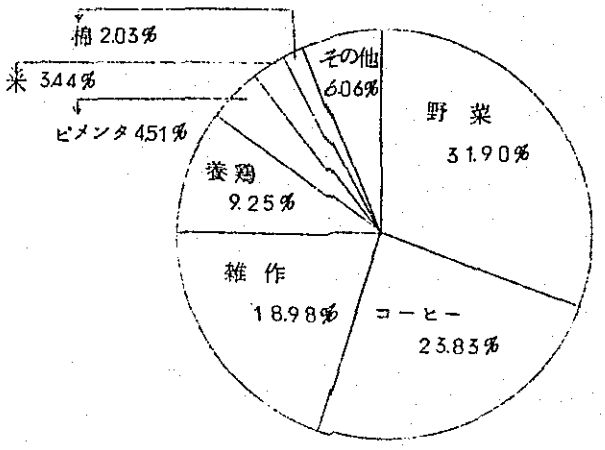
職種 / 形態 / 地域	胡椒					マテ茶					果樹				
	自	借	分	雇	計	自	借	分	雇	計	自	借	分	雇	計
Cáceres 周辺															
Cuiabá 周辺															
Rio Ferro	8		2	3	13										
Rondonópolis															
Dois irmões															
3ª linha															
Barrerão						1				1					
Dourados											1				1
Carpai															
Navirai															
Varzea Alegre															
Campo Grande															
計	8		2	3	13	1				1	1				1
%	4.51%					0.03%					0.03%				

地域別農産物及び営農形態

バナナ					米					コーヒー					養豚				
自	借	分	雇	計	自	借	分	雇	計	自	借	分	雇	計	自	借	分	雇	計
					2		1		3										
										1				1					
					2				2	23		1		24	2				2
										22		1		23	1				1
1				1				3	3	6		4		10	2				2
										7				7					
										3			1	4					
2	1			3		2			2			1		1					
3	1			4	4	2	1	3	10	62		7	1	70	5				5
1.40%					3.44%					23.83%					1.79%				

棉					その他					計					%				
自	借	分	雇	計	自	借	分	雇	計	自	借	分	雇	計	自	借	分	雇	計
										2	6			8	1.1	7.8			2.7
					2				2	3	4	1		8	1.6	5.2	5		2.7
										8		2	3	13	4.4		10	20	4.4
										14	4	2	1	21	7.7	5.2	10	6.7	7.1
										6				6	3.3				2.0
										35		1		36	19.1		5		12.3
					3				3	33		1		34	18.0		5		11.5
					2				2	24	7	5	5	41	13.1	9.1	25	33.3	13.9
										10				10	5.5				3.4
	5		1	6				1	1	6	5	1	4	16	3.3	6.5	5	26.7	5.4
										28	1			29	15.2	1.3			9.8
										14	50	7	2	73	7.7	64.9	35	13.3	24.8
	5		1	6	7			1	8	183	77	20	15	295	100	100	100	100	100
2.03%					2.81%					100%									

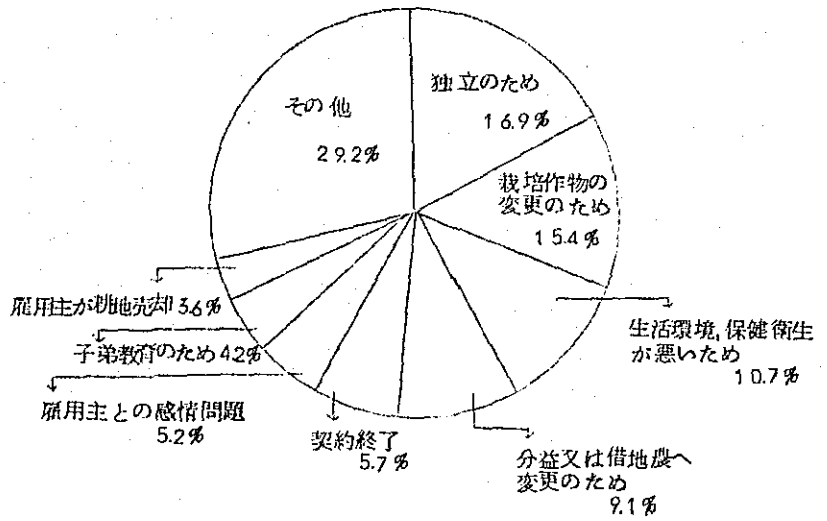
23－(附)　主　要　農　産　物



24. 移動の主なる理由

	理　　由	件　数	%
1	雇用主とともに移動	3	0.8
2	雇用主が土地を売却	14	3.6
3	雇用主との感情問題	20	5.2
4	賃金支払いが悪いため	6	1.6
5	生活環境，保健衛生が悪いため	41	10.7
6	子弟の教育のため	16	4.2
7	独立のため	65	16.9
8	契約終了のため	22	5.7
9	分益又は借地農へ変更のため	35	9.1
10	雇用主の契約不履行のため	5	1.3
11	栽培作物の変更のため	59	15.4
12	その他（立地条件が悪いため等）	98	25.5

24－(1)　移動の主なる理由



24－(2)　"移動の主なる理由"
（表説明）

一般的にいって移動の理由としては，一つの理由で移動することなくいくつかの理由が伴って移動するものが多く，そのため件数としては滞伯年数と移動回数の第25表により多くなっている。

移動の主なる理由を見るにその他の項目に於いて98件 25.5%で一番多くを占めているが，その内容としては立地条件が悪いのを理由として移動している。

具体的に説明すれば，和歌山 リオ・フェーロ及びカッペン植民地等に於いては地質が悪いためと主要都市から遠隔の地点とそれに伴い道路の不備などが重なり立地条件の悪さとなってくる。カッペン及びリオ・フェーロ植民地の場合はマラリア発生のため退耕があり両植民地には生活環境，保健衛生が悪いため41件がその他の項目の上に附加されてくる。

なお，独立のための移動65件 16.9%，栽培作物の変更のため59件 15.4%，それに分益又は借地農へ変更のため35件 9.1%，契約終了のため22件 5.7%があるが，この4項目

は全て関連性をもっている。

分益又は借地農への変更のための移動は雇用農から順調に営農形態を歩み，そして独立のための移動 65件を見たと考えられる。

営農形態が変更されると同時に栽培作物の変更も行ない分益農及び借地農では栽培不可能であった永年作物への切り変えが独立農において行なわれたと思われる。

契約終了については雇用農，分益農，借地農を契約終了して他の耕地に移動した場合も契約者は一応新たに他の栽培作物を試みる意志をもって移動することもあり，契約終了のための移動は栽培作物の変更の項目で関連性をもってくる。

雇用主との感情問題 20 件 5.2% は多くの耕主は戦前移住者であり，雇用者は戦後移住者であるところから意見の相違による移動である。

子弟の教育のため 16 件は奥地教育の不便から都市周辺に転任して来て子弟の教育を行ないながら蔬菜栽培者である。

25. 家族移住者の営農形態別に見た滞伯年数と移動回数

滞伯年数 / 形態 / 移動回数	0				1				2				3			
	自	借	分	雇	自	借	分	雇	自	借	分	雇	自	借	分	雇
0													1			
1									1			1				
2																
3																
4																
5																
6以上																
計									1			1	1			
合　計									2				1			

滞伯年数 / 形態 / 移動回数	4				5				6				7			
	自	借	分	雇	自	借	分	雇	自	借	分	雇	自	借	分	雇
0	2			1	3		1		19		1		7	1		
1	3		3		2		2		7	3		1	7	1		2
2					1	4			1	8		1	1	3	1	1
3						2				4			1	4	1	
4		1			1	1				2				1		
5								1					1			
6以上																1
計	5	1	3	1	7	7	3	1	27	17	1	2	17	10	2	4
合　計	10				18				47				33			

滞伯年数 / 形態 / 移動回数	8				9				10				11			
	自	借	分	雇	自	借	分	雇	自	借	分	雇	自	借	分	雇
0					1				9				2	1		
1	7	4	2		4		1		7	2	1		2	1		1
2	3	6	1		1	3	1		8	7	2		5	5		
3	3	2			2	1			3			1	1			
4	1		1		2	1								2		
5																
6以上						1				1						
計	14	12	4	0	10	6	2		27	10	3	1	10	9	0	1
合　計	30				18				41				20			

滞伯年数 / 形態 / 移動回数	12				13				14				15			
	自	借	分	雇	自	借	分	雇	自	借	分	雇	自	借	分	雇
0	7	1			31											
1	11	1		1	8			2					1			
2	3	2	1	1	2					1						
3			1													
4																
5																
6以上	1															
計	22	4	2	2	41			2		1			1			
合　計	30				43				1				1			

滞伯年数 / 形態 / 移動回数	計				合　計
	自	借	分	雇	
0	82	3	2	1	88
1	59	12	9	8	87
2	26	39	6	3	74
3	10	13	2	1	26
4	4	8	1		13
5	1			1	2
6以上	1	2		1	4
計	183	77	20	15	295
合　計	295				

26. 資 産 状 況

26-(1) 地 域 別

※単位 コント＝1,000クルゼイロス

		Cáceres (8戸)		Cuiabá (8戸)		Rio Ferro (13戸)		Rondonopolis (21戸)		Dois Irmões (6戸)	
		金額	%	金額	%	金額	%	金額	%	金額	%
資産内訳	土地	30,500	29.5	34,000	30.3	41,250	27.2	143,800	45.1	78,950	56.1
	建物	5,850	5.7	1,400	1.2	6,680	4.4	19,680	6.2	7,080	5.0
	設備	2,350	2.3	33,700	30.0	700	0.5	3,600	1.1	450	0.3
	機械器具	11,350	11.1	5,000	4.5	13,500	8.9	23,080	7.2	3,110	2.2
	車輛	12,300	11.9	21,850	19.5	25,350	16.7	52,050	16.3	750	0.5
	永年作物	13,500	13.2	—	—	35,450	23.4	7,400	2.3	27,000	19.2
	家畜	11,670	11.3	1,820	1.6	1,430	0.9	27,990	8.8	9,230	6.6
	その他の資産	650	0.1	1,580	1.4	950	0.6	2,500	0.8	1,000	0.7
	組合出資 現預金	2,770	2.8	3,750	3.3	12,351	8.7	16,800	5.3	5,900	4.2
	在庫品	1,100	1.2	770	0.8	2,025	1.3	10,785	3.4	5,565	4.0
	植付中の作物評価額	11,240	10.9	8,360	7.4	12,000	7.9	11,160	3.5	1,700	1.2
資産合計		103,280	100	112,230	100	151,686	100	318,845	100	140,735	100
負債	未払金	500		100		650		16,405		70	
	借入金 その他	2,000		400		7,500		14,550		500	
負債合計		2,500		500		8,150		31,155		570	
差引合計		100,780		111,730		143,536		287,690		140,165	
地域別パーセント		1.89		2.09		2.69		5.39		2.62	
一戸当り平均		12.598		13.966		11.041		13.700		23.360	

※単位 コント= 1,000クルゼイロス

		3ª Linha (36戸)		Barreirão (34戸)		Dourados (41戸)		Curpai (10戸)	
		金額	%	金額	%	金額	%	金額	%
資産内訳	土地	611,100	51.3	541,150	51.2	239,100	41.5	180000	50.5
	建物	54,860	4.6	90,600	8.6	31,325	5.4	18,050	5.1
	設備	18,430	1.5	14,200	1.3	8,800	1.5	500	0.1
	機械器具	38,910	3.3	35,460	3.4	29,765	5.2	13,565	3.8
	車輌	46,420	3.9	52,600	5.0	21,344	3.7	7,850	2.2
	永年作物	208,500	17.5	214,900	20.4	58,500	10.2	83,710	23.5
	家畜	87,700	7.4	39,365	3.7	58,000	10.1	14,540	4.1
	その他の資産	48,350	4.0	1,820	0.2	10,365	1.8	—	—
	組合出資 現預金	43,520	3.7	42,220	4.0	61,825	10.7	12,980	3.6
	在庫品	32,455	2.7	18,340	1.7	11,795	2.1	22,782	6.4
	植付中の作物評価額	1,400	0.1	5,250	0.5	44,690	7.8	2,600	0.7
資産合計		1,191,645	100	1,055,905	100	575,509	100	356,577	100
負債	未払金	34,770		8,000		5,000		6,280	
	借入金 その他	12,150		29,130		12,270		16,030	
負債合計		46,920		37,130		17,270		22,310	
差引合計		1,144,725		1,018,775		558,239		334,267	
地域別パーセント		21.43		19.07		10.45		6.26	
一戸当り平均		31.789		29.964		13.616		33.427	

※単位 コント＝1,000クルゼイロス

		Navirai (16戸)		Varzea Alegre (29戸)		Campo Grande (73戸)		合計 (295戸)		
		金額	%	金額	%	金額	%	金額	%	平均
資産内訳	土地	106,700	34.0	122,000	17.2	176,440	26.40	2,304,990	40.44	7,814
	建物	16,850	5.4	35,850	5.0	40,720	6.10	328,945	5.77	1,120
	設備	4,620	1.5	152,930	21.5	21,050	3.15	261,330	4.58	886
	機械器具	11,250	3.6	73,000	10.3	62,450	9.34	320,440	5.63	1,086
	車輛	27,160	8.6	65,735	9.2	141,200	21.13	474,609	8.33	1,609
	永年作物	28,600	9.1	14,390	2.0	24,300	3.64	716,250	12.57	2,427
	家畜	30,665	9.8	123,750	17.4	35,815	5.35	441,975	7.75	1,498
	その他の資産	11,500	3.6	15,550	2.2	12,655	1.89	106,920	1.87	362
	組合出資 現金預金	18,430	5.8	54,500	7.7	56,468	8.45	331,514	5.82	1,124
	在庫品	58,295	18.6	18,546	2.6	17,636	2.64	200,094	3.51	678
	植付中の作物評価額	—	—	34,550	4.9	79,650	11.91	212,600	3.73	721
資産合計		314,070	100	710,801	100	668,384	100	5,699,667	100	19,321
負債	未払金	200		14,300		35,115		121,590		412
	借入金 その他	44,600		74,350		23,100		236,580		802
負債合計		44,800		88,650		58,215		358,170		1,214
差引合計		269,270		622,151		610,169		5,341,497		18,107
地域別パーセント		5.04		11.65		11.42		100		
一戸当り平均		16.830		21.453		8.358		18.107		

26-(2) 地域別資産所有状況

区分	項目＼地域	Cáceres	家族数	Cuiabá	家族数	Rio Ferro	家族数	Rondonópolis	家族数	Dois Irmões	家族数
土地	面積	1,200 alq	4	144.5 alq	4	520 alq	9	664. alq	17	165 alq	6
車輌類	耕運機							1台	1	1台	1
	小型トラック	1台	1	2台	2	1台	1	1台	1		
	トラック			1台	1						
	ジープ	1台	1								
	トラクター					2台	2	3台	3		
永年作物	バナナ	4,500本	2								
	ミカン	3,000本	1			150本	3	2,000本	7		
	胡しょう					14,450本	8				
	ゴム					37,700本	8	3,800本	1		
	コーヒー	10,000本	1							35,500本	6
	マテ茶										
	ポンカン							800本	1		
	柿										
	ペカン										
	パインナップル										
家畜	牛	18頭	2					10頭	2		
	馬	4頭	3	2頭	1			9頭	7	2頭	2
	ろば	3頭	1	2頭	2			5頭	5	1頭	1
	豚	158匹	7	9匹	3	17匹	4	360匹	17	213匹	6
	鶏	495羽	6	110羽	3	290羽	7	1,300羽	15	280羽	6
	山羊	2匹	1							2匹	1

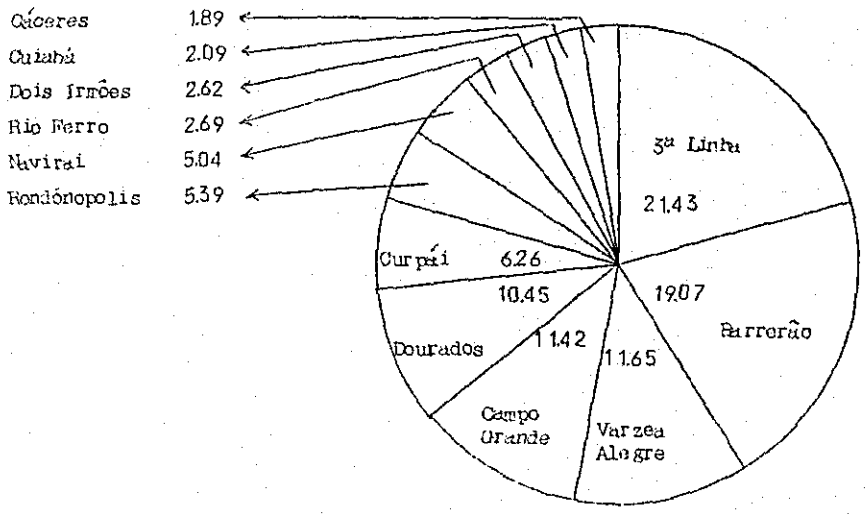
区分	項目＼地域	3ª Linha	家族数	Barrerão	家族数	Dourados	家族数	Curpai	家族数	Navirai	家族数
土地	面積	592.5 alq	35	619.4 alq	33	2648 alq	24	189.5 alq	10	192.5 alq	7
車輛類	耕運機	8 台	8	7 台	7	3 台	3	1 台	1	2 台	2
	小型トラック					3 台	2			2 台	2
	トラック	6 台	6	8 台	8	1 台	1				
	ジープ	1 台	1	3 台	3			1 台	1	1 台	1
	トラクター	6 台	6	3 台	3					3 台	3
永年作物	バナナ					500 本	1				
	ミカン	800 本	2	750 本	2	560 本	3	15 本	1	100 本	1
	胡しょう										
	ゴム										
	コーヒー	299,200 本	32	309,450 本	28	70,000 本	7	101,120 本	10	66,000 本	5
	マテ茶			18,000 本	2	3,300 本	3			13,000 本	2
	ポンカン	800 本	1								
	柿	100 本	1			40 本	1				
	ペカン										
	パインナップル										
家畜	牛	168 頭	11	24 頭	4	215 頭	4			85 頭	3
	馬	20 頭	16	10 頭	8	22 頭	15	18 頭	9	8 頭	5
	ろ馬	12 頭	10	1 頭	1						
	豚	978 匹	28	807 頭	28	784 匹	30	367 匹	10	309 匹	9
	鶏	572 羽	28	366 羽	10	885 羽	9	615 羽	10	30 羽	1
	山羊			1 匹	1						

区分	項目＼地域	Varzea Alegre	家族数	Campo Grande	家族数	合計	家族数	平均
土地	面積	264.1 alq	26	83.9 alq	15	4,9002 alq	190	25.8 alq
車輛類	耕運機	12 台	12	4 台	4	39 台	39	1 台
	小型トラック			5 台	5	15 台	14	1 台
	トラック			16 台	16	32 台	32	1 台
	ジープ	1 台	1	1 台	1	9 台	9	1 台
	トラクター	13 台	13	15 台	15	45 台	45	1 台
永年作物	バナナ	1,600 本	3	14,500 本	7	21,450 本	16	1,340 本
	ミカン	2,010 本	13	358 本	3	9,743 本	36	271 本
	胡しょう					14,450 本	8	1,806 本
	ゴム					41,500 本	9	4,611 本
	コーヒー					891,270 本	89	10,014 本
	マテ茶					34,300 本	7	4,900 本
	ポンカン	1,500 本	3			3,100 本	5	620 本
	柿					140 本	2	70 本
	ペカン	760 本	7			760 本	1	760 本
	パインナップル	2,700 本	6			2,700 本	6	450 本
家畜	牛	67 頭	5			587 頭	31	18.9 頭
	馬	27 頭	18	33 頭	25	155 頭	109	1.4 頭
	ろ馬			8 頭	7	32 頭	27	1.1 頭
	豚	296 匹	14	336 頭	34	4,634 匹	190	24.3 匹
	鶏	42,540 羽	26	4,118 羽	34	51,601 羽	155	332.9 羽
	山羊	8 頭	2			13 匹	5	2.6 匹

26-(3) 資 産 額 別

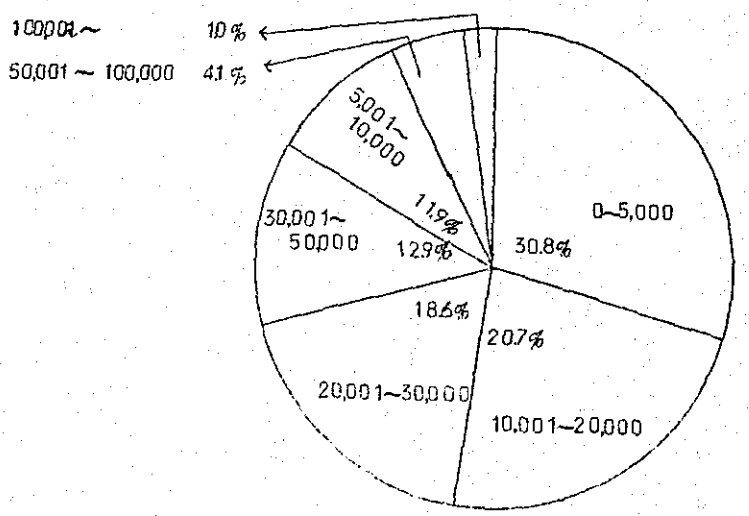
資産額（コント）	自営		借地		分益（戸）	雇用（戸）	合計（戸）	百分率
	戸数	パーセント	戸数	パーセント				
0～ 5,000	14	7.7	47	61.0	18	12	91	30.8
5,001～ 10,000	16	8.7	16	20.8	1	2	35	11.9
10,001～ 20,000	48	26.2	11	14.3	1	1	61	20.7
20,001～ 30,000	54	29.5	1	1.3	0	0	55	18.6
30,001～ 50,000	37	20.2	1	1.3	0	0	38	12.9
50,001～100,000	11	6.1	1	1.3	0	0	12	4.1
100,001～	3	1.6	0	0	0	0	3	1.0
合計	183	100	77	100	20	15	295	100

26－(4) 地 域 別

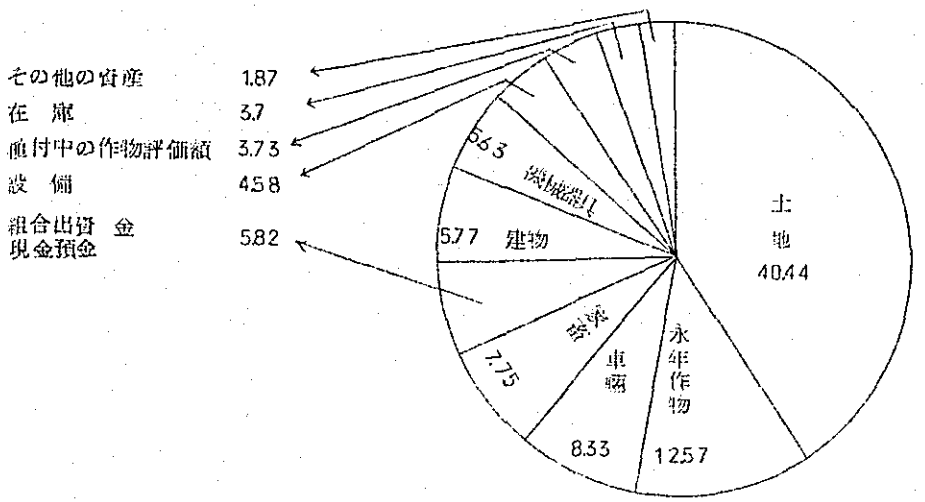


23－(5) 資産額別

単位 1,000クルゼイロス(コント)



26—(6) 項 目 別



26—(7) 'マット・グロッソ州に於ける
地域別資産状況,
(表説明)

マット・グロッソ州移住者の資産状況を見てみるに松原及びパレロン両植民地を他の植民地と比較した場合大きな相違がありこの両植民地に於いてマット・グロッソ州全植民地の約半数近い40.5%の資産が集中している。

両植民地に於いては移住者数も多いがその殆んどが自営農で最近の地価の暴騰により不動産としての資本増大が見られそのうち50%以上の資産が土地である。

なおコーヒー地帯の松原植民地をはじめとしてパレロンドイスイルモンスなどは,流動資産としての永年作物のコーヒー木が$\frac{1}{5}$の資産を占めている。

一家族当り平均の資産高を見てもクルバイの33.427コントスを筆頭に前記の3植民地松原,パレロンドイスイルモンスそれにバルゼアアレグレ移住地などが平均を上まわった資産状況である。

ドラードス カセレス クヤバ リオ・フエロの各地域はマット・グロッソ州の一家族平均

18,107コントスを下まわっているがリオ・フエーロを除いた他の地域に於いての理由として借地農が多くマット・グロッソ州の85.0%がこの3地域に集中しており資産の多くを占めている土地所有者が少ない事それに蔬菜類の現金収入高が低いためと思われる。

リオ・フエーロについては主要作物であるピメンタ・ゴムの収穫が本格的に開始されず労賃によって生活を計っているためと土地所有面積は多いが比較的安価のため資産高が低いものとなっている。

負債の方に於いてはクルバイ　ナビライ　バルゼアアレグレなどが一戸当り平均の1,214コントスを上まわり2,000コントスを越しているがクルバイは戦後の移住地であり立地条件も悪いことから営農としての借入金でありナビライ地域に於いては大規模な棉栽培を行っていることから営農費としての借入金も多額に昇っている。

バルゼアアレグレ移住地に於いては88,650コントス一戸当り平均3,057コントスで最高でありこれは雑作から養鶏への転換時期にあるため鶏舎の増築を行っており設備投資としての借入金である。

27. 年 収 状 況

※年度 1965/66

27-(1) 地域別の年収状況 (1) 農産物

※単位 コント=1,000クルゼイロス

項目＼地域	Cáceres	戸数	Cuiaba	戸数	Rio Ferro	戸数	Rondonópolis	戸数	Dois Irmões	戸数
米	9,360	5	1,800	1			49,024	16	11,690	7
コーヒー									2,210	1
落花生							90	1	30	2
棉							5,010	5		
果樹										
野菜	8,500	5	10,030	6			20,350	8		
トマト	9,700	4	13,800	5			12,200	6		
スイカ										
ハッカ										
ピメンタ					2,615	2	900	1		
フエイジョン	3,000	4	800	1			13,820	14	330	4
とうもろこし	500	1	650	1			1,300	2		
豆類										
バナナ	200	1								
その他	500	1					880	3		
合計	31,760	21	27,080	14	2,615	2	103,574	56	14,260	

※年度　1965/66
※単位　コント＝1,000クルゼイロス

項目＼地域	3ª Linha	戸数	Barrerão	戸数	Dourados	戸数	Curpaí	戸数
米	6,760	3	2,400	4	10,512	8		
コーヒー	156,230	27	146,250	23	16,740	10	26,000	9
落花生	18,660	19	6,165	7	18,610	13	17,210	9
棉	6,850	6			14,150	4		
果樹	450	5	100	1	4,360	3		
野菜			2,050	2	26,630	11		
トマト			800	1	6,700	6		
スイカ			1,000	1	4,600	5		
ハッカ								
ピメンタ								
フェイジョン	1,090	4	16,538	13	7,647	11		
とうもろこし	2,070	3	2,255	5	2,155	5		
豆類	1,110	4						
バナナ					560	2		
その他	1,150	5	4,290		400	2		
合計	194,370	74	181,848	58	113,064	80	43,210	18

※年度 1965/66
※単位 コント=1,000クルゼイロス

項目＼地域	Navirai	戸数	Varzea Alegre	戸数	Campo Grande	戸数	合計	戸数	平均
米	1,400	2	13,085	15	26,600	10	132,631	71	1,867
コーヒー	8,500	3			1,080	1	357,010	74	4,824
落花生	350	1	400	1			61,515	53	116
棉	99,000	3	17,400	2	2,000	1	144,410	21	6,877
果樹			700	2	1,000	3	6,610	14	472
野菜	600	1	12,350	14	138,486	64	218,996	111	1,973
トマト					123,940	39	167,140	61	274
スイカ			8,500	8	600	1	14,700	15	980
ハッカ	35,700	3					35,700	3	117
ピメンタ							3,515	3	1,172
フエイジョン	1,370	3	500	1	680	1	45,775	56	817
とうもろこし	30	1	27,647	14	4,000	2	40,607	34	1,194
豆類			2,285	5	300	1	3,695	10	369
バナナ					17,300	5	18,060	8	2,258
その他	2,000	1					9,220	13	709
合計	148,950	18	82,867	62	315,986	128	1,259,584	547	2,302

27-(2) 地域別の年収状況 (2) 家畜

※年度 1965/66
※単位 コント=1,000クルゼイロス

項目＼地域	Cáceres	戸数	Cuiabá	戸数	Rio Ferro	戸数	Pondono-polis	戸数	Dois Irmoes	戸数	3ª Linha	戸数	Barrerão	戸数
豚	2,000	2					200	1			12,375	14	9,390	14
豚脂									1,600	1				
牛											4,770	5	300	1
肉鶏														
馬														
鶏卵														
合計	2,000	2					200	1	1,600	1	17,145	19	9,690	15

項目＼地域	Dourados	戸数	Curpaí	戸数	Navirai	戸数	Varzea Alegre	戸数	Campo Grarde	戸数	合計	戸数	平均
豚	9,150	11	750	2	3,000	2	300	1	5,910	14	43,075	61	706
豚脂	400	1			605	3			400	1	3,005	6	501
牛	6,000	1			480	1					11,550	8	1,444
肉鶏							2,000	2	250	1	2,250	3	750
馬					50	1					50	1	50
鶏卵							249,132	24	15,200	2	264,332	26	10,167
合計	15,550	14	750	2	4,135	7	251,432	27	21,760	18	324,262	105	2,136

27－(2) 地域別の年収状況 (3) 労賃

調査年度 1965／66
調査単位 コント＝1,000クルゼイロス

項目＼地域	Cáceres	戸数	Cuiabá	戸数	Rio Ferro	戸数	Rondono-polis	戸数	Dois Irmoes	戸数	3ª Linha	戸数	Barrerão	戸数
人夫賃	750	4			11,620	12	6,240	5					1,400	1
大工													1,800	2
整地料							1,500	1						
出産手伝											400	1		
組合勤務					100	1					900	2		
合計	750	4			11,720	13	7,740	6			1,300	3	3,200	3

項目＼地域	Dourados	戸数	Curpai	戸数	Navirai	戸数	Varzea Alegre	戸数	Campo Grarde	戸数	合計	戸数	平均
人夫賃	2,720	4			16,580	1	500	1			39,810	28	1,422
大工	1,700	1					400	1	480	2	4,380	6	730
整地料							1,300	4	850	3	3,650	8	456
出産手伝											400	1	400
組合勤務							6,180	6			7,180	9	799
合計	4,420	5			16,580	1	8,380	12	1,330	5	55,420	52	1,065

27－(3) 地域別の年収状況　(4) その他の収入

※年度　1965/66
※単位　コント＝1,000クルゼイロス

項目＼地域	Cáceres	戸数	Cuiabá	戸数	Rio Perro	戸数	Rondono-polis	戸数	Dois Irmoes	戸数	3ª Linha	戸数	Barrerão	戸数
機械類売却														
不動産売却			1,300	1										
商業売上金			21,600	3			100	1						
その他					2,000	3					3,050	2	3,000	1
合計			22,900	4	2,000	3	100	1			3,050	2	3,000	1

項目＼地域	Dourados	戸数	Curpai	戸数	Navirai	戸数	Varzea Alegre	戸数	Campo Grarde	戸数	合計	戸数	平均
機械類売却	3,600	1					400	2	3,940	5	7,940	8	993
不動産売却									43,200	1	44,500	2	22,250
商業売上金	27,800	3							12,210	4	61,710	11	5,610
その他	2,000	1							3,120	2	13,170	9	1,463
合計	33,400	5					400	2	62,470	12	127,320	30	4,244

27－(3) 地域別の年収状況 (5)借入金

※年度 1965／66
※単位 コント＝1,000クルゼイロス

項目＼地域	Cáceres	戸数	Cuiabá	戸数	Rio Ferro	戸数	Rondonopolis	戸数	Dois Irmoes	戸数	3ª Linha	戸数	Barreirão	戸数
Bancodo Brasil	2,000	1					15,550	8	500	1	16,910	14	21,790	12
移住事業団					7,500	5								
親戚・友人					300	1					5,000	1		
市中銀行			1,200	1							1,750	2	3,000	2
その他											350	1	3,000	2
合計	2,000	1	1,200	1	7,800	6	15,550	8	500	1	24,010	18	28,290	16

項目＼地域	Dourados	戸数	Curpai	戸数	Navirai	戸数	Varzea Alegre	戸数	Campo Grarde	戸数	合計	戸数	平均
Bancodo Brasil	4,500	2	13,830	7	44,300	4	7,800	3	16,800	8	143,980	60	1,872
移住事業団			1,900	2			15,300	8	3,000	1	27,700	16	1,731
親戚・友人	1,200	2						3	4,500	6	11,000	10	1,100
市中銀行	1,500	2					4,300	3	10,000	4	22,250	14	1,589
その他	2,850	3			300	1	4,500	5	3,094	5	14,094	17	829
合計	10,050	9	15,730	9	44,600	5	31,900	19	37,394	24	219,024	117	1,872

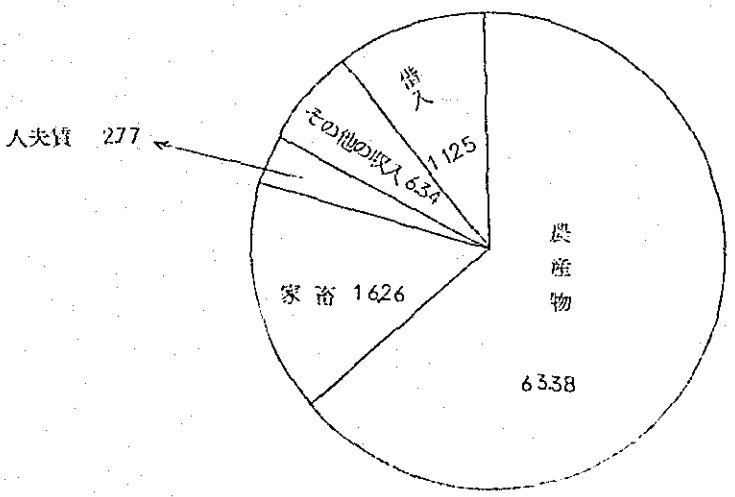
27-(4) 地域別の年収状況 （合計）

※年度 1965／66
※単位 コント＝1,000クルゼイロス

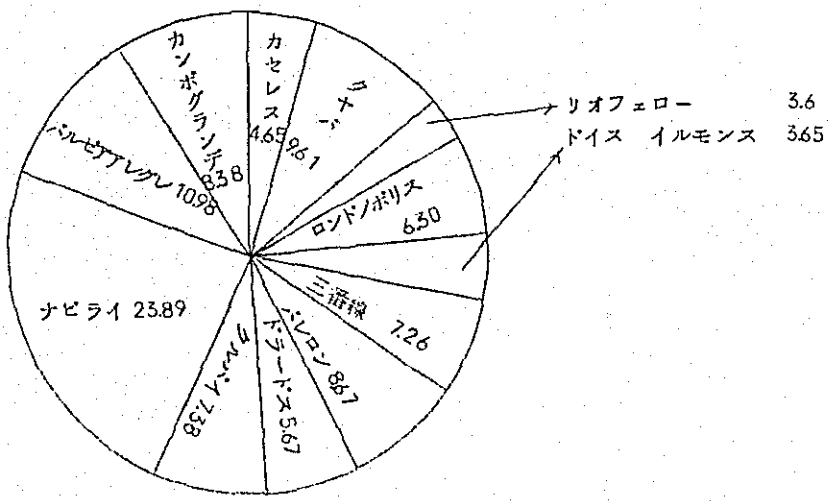
項目＼地域	Cáceres	戸数	Cuiabá	戸数	Rio Ferro	戸数	Pondonopolis	戸数	Dois Irmoes	戸数	3ª Linha	戸数	Barrerão	戸数
(1) 農産物	31,760	21	27,080	14	2,615	2	103,574	56	14,260	14	194,370	76	181,848	58
(2) 家畜	2,000	2					200	1	1,600	1	17,145	19	9,690	15
(3) 労賃	750	4			11,720	13	7,740	6			1,300	3	3,200	3
(4) その他の収入			22,900	4	2,000	3	100	1			3,050	2	3,000	1
(5) 借入金	2,000	1	1,200	1	7,800	6	15,550	8	500	1	24,010	18	28,290	16
合計	36,510	28	51,180	19	24,135	24	127,164	72	16,360	16	239,875	118	226,028	93
地域各戸平均	1,304		2,694		1,006		1,766		1,023		2,033		2,430	
百分比 %	4.65		9.61		3.60		6.30		3.65		7.26		8.67	

項目＼地域	Dourados	戸数	Curpai	戸数	Navirai	戸数	Varzea Alegra	戸数	Campo Grarde	戸数	合計	戸数	平均	合計%
(1) 農産物	113,064	80	43,210	18	148,950	18	82,867	62	315,986	128	1,259,584	547	2,309	63.38
(2) 家畜	15,550	12	750	2	4,135	8	251,432	27	21,760	18	324,262	105	2,136	16.26
(3) 労賃	4,420	5			16,580	1	8,380	12	1,330	5	55,420	52	1,065	2.77
(4) その他の収入	33,400	5					400	2	62,470	12	127,320	30	4,244	6.34
(5) 借入金	10,050	9	15,730	9	44,600	5	31,900	19	37,394	24	219,024	117	1,872	11.25
合計	176,484	111	59,690	29	214,265	32	374,979	122	438,940	187	1,985,610	851	2,333	100
地域各戸平均	1,590		2,058		6,696		3,074		2,347		28,021			
百分比 %	5.67		7.34		23.89		10.98		8.38		100			

27－(5)　年収状況　(A) 項目別



27－(6)　年収状況　(B) 地域別



27-(7) 〝地域別の年収状況〟
（表説明）

最も収入の多い農産物について見ると各地域別の主要農産物も歴然としてくる。
マット・グロッソ州北部に於いては米を主体とした雑作地帯であり農産物収入の５１.７％は雑作の収入である。例外としてリオ・フエーロとロンドノポリスのピメンタがあるが収入面としては僅少である。
中部に於いてはカンポグランデ市を中心にして蔬菜栽培者が集中しているがこの傾向は各都市周辺において見られることである。
例へばカセレス５７.３％，クヤバ８８.０％，ロンドノポリス３１.４％，カンポグランデ８３.２％ドラードス３３.５％等が夫々蔬菜収入が主体をなしている。
南部に於いてはドラードスを中心にしてのコーヒー地帯であり，その収入は総農産物収入の５１.９％を占め南部地方の経済基盤をなしている。
第２項目の家畜の項を見ると戦後移住者は資金の調達が困難のため未だ牧畜業に於いては進出していない。
家畜の売買に於いて件数としては豚が多くを占めているが年間総収入から見ると家畜の収入は僅か１６.３％で牧畜のみで経済生活を営んでいる移住者はない。
但し，バルゼアアレグレの場合，鶏肉，鶏卵があたったため家畜の項に抱括した。それ故家畜の収入に当っての鶏肉，鶏卵の収入は（主にバルゼアアレグレ移住地）家畜収入の９３.７％である。
年収状況の第３項目の労賃について観察して見るとナビライ地域及びリオ・フエーロ地域に於いての人夫賃としての収入が目につくがリオ・フエーロ地域の場合はゴム，ピメンタの永年作物栽培のため未だ収穫には至っておらずその間の生活費として組合の耕地の手入れを行い収穫までの生活費を補っている。
ナビライ地域に於いては会社組織として２つの会社が入植し借地農及び雇用農として就労しておりボーナスもあることから表　　の様な数字が表われてくる。
なお日本に於いて大工技術をもった移住者は移住地内に於いて住宅及び納屋の建築に従事し技術を生かしている。このことは件数は少ないが生産の場合の産業にも同様なことが云える。
整地料としてはトラクター所有者がトラクター非所有者の要求に応じて整地を行いその労賃

（ガソリン代含む）を取得することを示している。
その他組合勤務の項は農業に従事しているかたわら組合に勤務し現金収入を得ている移住者である。第４項目のその他の収入は固定資産と流動資産の売却収入がこの項目に入っているがこの項目の収入は少く全収入の6.3％しか占めていない。
この項目で商業売上金が１１件で４８.５％を占めているがこの事は農業を行いながら市内に於いて小さな店を経営し農業と商業を両立させている。
第５の借入金の項目についてはBanco do Brasilの利用が金額及び件数とも最も活発で６５.７％を占め次いで移住事業団の１２.６％である。
Banco do Brasilの利用が最も大きい地域はナビライ地域であるが会社として借入れているため直接個人的には借入れはない。
一般的にBanco do Brasilの利用は各都市に存在するため利用するがそれでも全体として見た場合には少く移住事業団の大市な貸付けを望んでいる。バルゼアアレグレ移住地に於いては移住事業団の直轄移住地のため事業団融資利用は活発で当移住地のみで５５.２％の利用を行っている。
なおその他の借入れ先としてはドラードス市周辺及びカンポグランデ市周辺に頼母子講がありこれの利用も金額は少ないが相互の親睦を計ることを併せて資金繰りを行っている。

28. 年間支出状況

28-(1) 地域別の年間支出状況 (1) 営農費

※年度 1965/66
※単位 コント= 1,000クルゼイロス

項目＼地域	Cáceres	戸数	Cuiabá	戸数	Rio Ferro	戸数	Rondonopolis	戸数	Dois Irmoes	戸数	3ª Linha	戸数	Barrerao	戸数
肥料	1,270	5	2,880	5	1,360	4	2,700	8			6,690	7	4,415	10
農薬	860	5	1,570	6	280	3	4,690	14	630	3	1,320	9	2,010	10
借地料	960	2	1,750	4			1,450	2						
人夫賃	2,450	3	3,020	3	3,690	3	10,760	13	910	4	61,225	34	25,820	30
整地料	80	1			150	1	2,170	5			300	1		
家畜	200	1					150	1	175	1	1,710	7		
飼料	120	2									1,430	2		
運賃	1,120	2	1,150	3	1,380	3	200	1	845	4	3,382	4	600	3
その他の雑費	1,300	3	400	3	60	2	1,720	13	75	2	4,450	21	5,345	17
合計	8,360	24	10,770	24	6,920	16	23,840	57	2,635	14	80,507	85	38,190	70

項目＼地域	Dourados	戸数	Curpai	戸数	Navirai	戸数	Varzea Alegre	戸数	Campo Grande	戸数	合計	戸数	平均
肥料	13,625	18			130	1	7,625	17	57,401	64	98,096	139	706
農薬	11,160	24	1,850	9	27,650	4	7,710	18	23,775	62	83,505	167	500
借地料	730	5					2,050	5	4,678	34	11,618	52	223
人夫賃	23,595	32	9,000	8	77,470	8	12,090	15	23,195	31	253,225	184	1,376
整地料	1,780	4	600	1			1,870	4	400	2	7,350	19	387
家畜	270	2			120	1	19,690	26	440	4	22,755	45	529
飼料	500	1	720	3			117,730	25	9,218	12	129,718	45	2,882
運賃	920	5	4,550	9	770	2	32,324	29	9,300	14	56,541	79	716
その他の雑費	30,772	21	1,518	13	505	5	1,730	12	19,875	81	67,750	193	351
合計	83,352	112	18,238	43	106,645	21	202,819	151	148,282	304	730,558	921	793

28－(2) 地域別の年間支出状況 (2) 不動産設備費

決年度 1965／66
決単位 コント＝1,000クルゼイロス

項目＼地域	Cáceres	戸数	Cuiabá	戸数	Rio Perro	戸数	Pardinopolis	戸数	Dois Irmoes	戸数	3ª Linha	戸数	Barrerao	戸数
住居			400	1	4,500	1			2,530	2	2,400	2	1,700	2
倉庫車庫小屋			700	1			1,800	5	2,100	1	700	2	3,060	8
建物修理	600	2	400	1			900	2			700	2		
畜産設備	500	1							300	1	4,220	7	200	1
土地購入	300	2			700	2	1,030	4	250	1	17,070	6	550	1
商業設備							1,100	2						
その他			4,200	4			150	1					350	1
合計	1,400	5	5,700	7	5,200	3	4,980	14	5,180	5	25,090	19	5,860	13

項目＼地域	Dourados	戸数	Curpai	戸数	Naviraí	戸数	Varzea Alegre	戸数	Campo Grande	戸数	合計	戸数	平均
住居	3,450	5	230	1	350	1	3,000	2	2,020	6	20580	23	895
倉庫車庫小屋	400	1			1,500	2	200	1	800	2	11,260	23	490
建物修理			200	1			1,950	5	3,350	5	8,100	18	450
畜産設備	925	4	2,000	1			38,100	19			46,245	34	1,361
土地購入	9,600	9	2,210	3	800	1	1,800	2	22,300	5	56610	36	1,573
商業設備	14,400	2							4,220	3	23,920	11	2,175
その他	1,450	2			1,500	1					450	5	690
合計	30,225	23	4,640	6	4,150	5	45,050	29	32,690	21	170,165	150	1,134

※年度　1965/66
※単位　コント＝1,000クルゼイロス

28-(2)　地域別の年間支出状況　(3) 機械器具費

項目＼地域	Cáceres	戸数	Cuiabá	戸数	Rio Verde	戸数	Andrópolis	戸数	Dois Irmoes	戸数	3ª Linha	戸数	Barreirão	戸数
機械購入	1,000	1					2,000	1	40	1	7,250	6	9,940	4
自動耕運機購入											3,000	1		
車輛購入	8,500	2	4,000	1			14,500	3			13,250	5	9,000	3
機械燃料	810	5	1,180	4	4,500	1	4,250	15			8,860	20	6,960	16
修理	250	2	810	3	1,000	1	1,950	6	150	1	2,050	6	2,800	7
その他	200	1	620	2							1,280	3	420	2
合計	10,760	11	6,610	10	5,500	2	22,700	25	190	2	35,690	41	29,120	32

項目＼地域	Dourados	戸数	Curpai	戸数	Naviraí	戸数	Varzea Alegre	戸数	Campo Grarde	戸数	合計	戸数	平均
機械購入	1,400	1	4,150	4	3,600	2	9,520	7	10,220	15	49,120	42	1,169
自動耕運機購入	4,200	1									7,200	2	3,600
車輛購入	6,560	3			12,600	2	2,700	1	18,180	10	89,290	30	2,976
機械燃料	2,866	7	30	1	400	2	8,440	18	23,935	32	62,231	121	514
修理	500	1	350	3	510	2	8,570	12	10,236	21	29,176	65	449
その他	720	4					1,522	3	850	3	5,612	18	312
合計	16,246	17	4,530	8	17,110	8	30,752	41	63,421	81	242,629	278	873

28-(3) 地域別の年間の支出状況 (4) 生計費

※年度 1965/66
※単位 コント＝1,000クルゼイロス

項目＼地域	Cáceres	戸数	Cuiabá	戸数	Rio Preto	戸数	Pendropolis	戸数	Dois Irmoes	戸数	3ª Linha	戸数	Barrerão	戸数
生計費	7,470	8	14,460	8	13,330	10	25,800	21	5,440	6	53,250	36	52,270	31
一戸当り平均	934		1,808		1,333		1,229		907		1,479		1,686	

項目＼地域	Dourados	戸数	Curpai	戸数	Navirai	戸数	Varzea Alegre	戸数	Campo Grande	戸数	合計	戸数	平均
生計費	43,460	39	18,000	10	13,590	15	40,470	28	98,130	70	385,670	282	1,367
一戸当り平均	1,114		1,800		906		1,445		1,402		1,368		

28-(3) 地域別の年間支出状況 (5) 借入金返済 (6) その他の支出

項目＼地域	Cáceres	戸数	Cuiabá	戸数	Rio Preto	戸数	Pendropolis	戸数	Dois Irmoes	戸数	3ª Linha	戸数	Barrerao	戸数
借入金返済	3,150	3	3,750	4	1,300	2	12,530	16	2,300	4	17,010	12	25,420	14
その他の支出	2,800	6	7,690	8	3,080	12	13,644	20	4,000	5	18,780	23	22,850	23
合計	5,950	9	11,440	12	4,380	14	26,174	36	6,300	9	35,790	35	48,270	37

項目＼地域	Dourados	戸数	Curpai	戸数	Navirai	戸数	Vargea Alegre	戸数	Campo Grande	戸数	合計	戸数	平均
借入金返済	3,130	7	12,060	8	21,000	2	36,450	18	4,000	25	142,100	115	1,236
その他の支出	16,488	30	6,300	4	6,740	11	17,065	25	75,894	62	195,331	229	849
合計	19,618	37	18,360	12	27,740	13	53,515	43	79,894	87	337,431	344	981

28－(4) 地域別の年間支出状況　合計

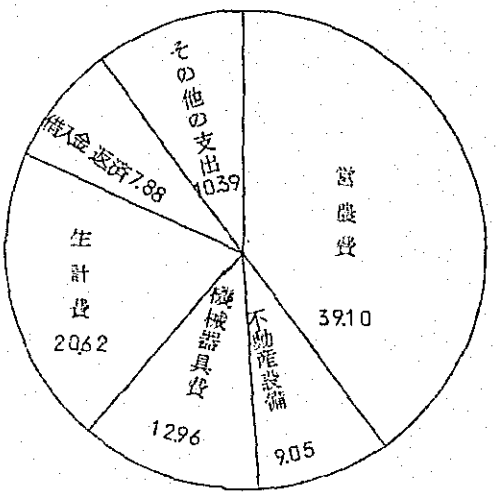
※年度　1965／66
※単位　コント＝1,000クルゼイロス

項目＼地域	Cáceres	戸数	Cuiabá	戸数	Rio Ferro	戸数	Rondonopolis	戸数	Dois Irmoes	戸数	3a Linha	戸数	Barrerao	戸数
営農費	8,360	24	10,770	24	6,920	16	23,840	57	2,635	14	80,507	85	38,190	70
不動産設備費	1,400	5	5,700	7	5,200	3	4,980	14	5,180	5	25,090	19	5,860	13
機械器具費	10,760	11	6,610	10	5,500	2	22,700	25	190	2	35,190	41	29,120	32
生計費	7,470	8	14,460	8	13,330	10	25,800	21	5,440	6	53,250	36	52,270	31
借入金返済	3,150	3	3,750	4	1,300	2	12,530	16	2,300	4	17,010	12	25,420	14
その他の支出	2,800	6	7,690	8	3,080	12	13,644	20	4,000	5	18,780	23	22,850	23
合計	33,940	57	48,980	61	35,330	45	103,494	153	19,745	36	230,327	216	173,710	183
各戸平均	595		803		785		676		548		1,066		949	
地域別百分率	5.03		6.79		6.64		5.72		4.63		9.01		8.02	

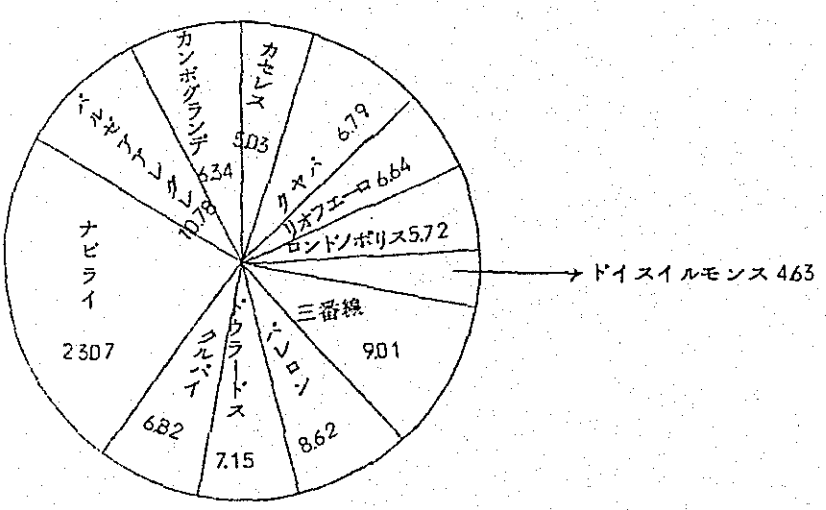
※年度　1965／66
※単位　コント＝1,000クルゼイロス

項目＼地域	Dourados	戸数	Curpai	戸数	Novirai	戸数	Vargea Alegre	戸数	Campo Grande	戸数	合計	戸数	平均	項目別百分率
営農費	83,352	112	18,238	43	106,645	21	202,819	151	148,282	304	730,558	921	793	39.10
不動産設備費	30,225	23	4,640	6	4,150	5	45,050	29	32,690	21	170,165	150	1,134	9.05
機械器具費	16,246	17	4,530	8	17,110	8	30,752	41	63,421	81	242,629	278	873	12.96
生計費	43,460	39	18000	10	13,590	15	40,470	28	98,130	70	385,670	282	1,367	20.62
借入金返済	5,130	7	12,060	8	21,000	2	36,450	18	4,000	25	142,100	115	1,236	7.88
その他の支出	16,488	30	6,300	4	6,740	11	17,065	25	75,894	62	195,331	229	849	10.39
合計	192,901	228	63768	79	169,235	62	372,606	292	422,417	563	1,866,453	1,975	945	100
各戸平均	846		807		2,730		1,276		750		11,831			
地域別百分率	7.15		6.82		23.07		10.78		6.34		100			

28−(5) 年間支出 (A) 項目別



28−(6) 年間支出 (B) 地域別



28－(7)　『地域別の年間支出状況』
（表説明）

農業を行うのに営農管理費は最も大きな支出となるが耕作物により若干差異はあるがとりわけ肥料・農薬費の支出は大きく営農費の２３.５％を占めている。

例へば都市近郊における蔬菜栽培においては肥料の使用なくしては作物の収穫は不可能とまで云われておりその上蔬菜類は病虫の発生も多く都市周辺（ドラードス市，カンポグランデ市）の蔬菜栽培者は肥料及び農薬の支出が甚しく多いことがわかる。

雑作栽培の場合には無肥料栽培の地区が多いが棉栽培には相当数多くの消毒を必要とすることから棉を植付けているナビライ地域ロンドノポリス地域においては農薬の支出が著しく大きくなっている。なお人夫賃も営農費としての支出の割合が高く見逃せない項目であり営農費の3.4.7％を占めている。

南部コーヒー地帯に於いて人夫の使用は集中しており又ナビライの棉栽培地域は金額も大きくこの地域のみで３０.６％である。

その他雑作栽培に於いては人夫の常時使用は至って少なく収穫時のみ伯人人夫を使用するにすぎない。

運賃の項目ではコーヒー及び雑作栽培の場合殆んど庭先渡しで買手に売渡すため運賃の支出は少ない。

バルゼアアレグレ移住地は組合の車輛でカンポグランデ市まで搬出するため表３０のような運賃支出を見るがこれには組合の手数料（約１５％）も含まれている。

その他の営農雑費の項目についてはトマト栽培及びコーヒー雑作等の場合の箱代，支柱代，袋代等材料費が総括されている。

年間支出の不動産設備費の表を見るに土地購入費に３３.３％当てがわれている。しかし農地購入は５件前後で多くがカンポグランデ市，ロンドノポリス市，ドラードス市内に於いての宅地購入である。

次いで畜産設備であるが南部に於いては養豚導入の希望者が多く南部に於いての畜産設備は豚舎であり中部時にバルゼアアレグレ移住地の場合は豚舎であることは勿論である。

商業設備の項目に於いてはロンドノポリス市，ドラードス市，カンポグランデ市と都市のみに集中しており農商業を両立させ商業の売上げ利益を営農費に転換利用している点，注目すべきであ

る。

年間支出の機械器具費の項目は至って少なく年間総支出の１３.０％である。

機械器具購入は生産向上のため全ての移住者が必要としていることであるがコーヒー価格の暴落と霜害のための減収及びインフレのための物価騰貴などが災して購入が減少しているものと思われる。それでも霜の害を受けない一部地区に於いては車輌などの購入が見受けられる。

生計費としては一般に大差は見受けられないが雑作栽培者，蔬菜栽培者及び単作栽培者（主にコーヒー，ゴム等）更には都市近郊と奥地は内容的には相違がある。

雑作栽培者は主食類は自給を行い購入を必要としないが単作栽培者及び蔬菜栽培者の主食類は殆んど購入であるが実質的支出としては表に見られるように地域的に均等している感がある。

借入金返済及びその他の支出の項目に於いてまず借入金返済は主に１９６４年に借入れ１９６５年～６年にかけて返済されているものであるが表３４を見るにバルゼアアレグレ移住地とパレロンが多くの返済を行っている事から１９６４年に於いては両地域で銀行及び移住事業団を多く利用したことが伺われる。

その他の支出については病気のための医療費，各親睦会の会費，冠婚葬祭等の費用が含まれている。

29. 独立時の資金調達状況

年度	自己資金	件数	事業団	件数	Banco do Brasil	件数	親戚・友人	件数	合計	件数
1951年	100	1							100	1
1952年										
1953年	1,263	39					20	1	1,283	40
1954年	576	8					95	2	671	10
1955年	800	3					20	1	820	4
1956年	1,415	10			80	1	40	1	1,535	12
1957年	970	7	150	1					1,120	8
1958年	6,330	8							6,330	8
1959年	5,856	14					60	1	5,916	15
1960年	29,169	38	150	1					29,319	39
1961年	12,370	15							12,370	15
1962年	22,140	17			700	1			22,840	18
1963年	17,730	10	1,200	1					18,930	11
1964年	22,325	14			75	1			22,400	15
1965年	27,430	7			450	1	100	1	27,980	9
1966年	9,100	6					5,400	2	14,500	8

29—(1)　独立時の資金調達状況

（表説明）

独立時の資金調達を見る場合まず伯国のインフレに留意しなければならない。（ドル相場表参照）

例えば１９５１年に独立資金１００コンストにて独立しているが，１５年後の１９６６年は1家族当り平均1,５００コントスの独立資金が必要であり，これは1５年前の１５倍であり，注目すべき数字である。

資金調達状況を見るに自己資金にて独立した件数が最も多く１９７件で全体の９２５％を占めている。１９５３年に３９件の（主に松原植民地）の独立移住者を数えているが，これは連邦植民地の無償供与の土地であるため，独立時（入植時）に要した資金は営農費と設備費のため僅少の資金であった。この事は，松原植民地だけでなく全ての連邦植民地に云える。

１９５８年までは，連邦植民地への入植が続いたが１９５９年，１９６０年にはバルゼアアレググレ移住地への入植が開始された。

この移住地の入植者は日本出発時に土地代一部支払い済みで，この移住者に於ても営農費及び設備費のみが独立時の資金使途である。

１９６０年までは独立農として入植した移住者がほとんどのため，日本に於いて調達した自己資金である。

１９６１年以降の独立は他州からの転住して来た移住者の分益農，借地農を経過しての独立であり，又一方，松原，共栄両植民地からの分家による独立である。

資金調達先に於いて事業団は３件の中で利用度は低いが，これは遠隔地に存するため時間のロス及び旅費の捻出の困難が原因と思う。しかし営農資金としては，バルゼアアレグレ移住地を始め数多くの利用者がある。

なお，伯国銀行の利用度も少ないがこれは担保として土地を必要とする関係と契約上の言葉の不自由によるものと思われる。

親戚・友人関係は婚姻を行った先の両親及び従兄及び友人からの借入れであるが主に営農費としての借入が主である。

30. 独立時の資金使途状況

年度	土地購入	%	設備費 機械購入	%	営農費	%	その他	%	合計
1951年			20	20	70	70	10	10	100
1952年									
1953年	30	23	256	20.0	681	53.1	316	24.6	1,283
1954年	399	59.4	40	6.0	214	31.9	18	2.7	671
1955年	455	55.5	150	18.3	150	18.3	65	7.9	820
1956年	1,085	70.7	120	7.8	275	17.9	55	3.6	1,535
1957年	558	49.8	142	12.7	360	32.1	60	5.4	1,120
1958年	1,060	16.7	1,875	29.7	2,135	33.7	1,260	19.9	6,330
1959年	2,490	42.1	1,415	23.9	1,470	24.9	541	9.1	5,916
1960年	4,780	16.3	10,537	35.9	9,675	33.0	4,327	14.8	29,319
1961年	3,805	30.7	3,730	30.2	3,355	27.1	1,480	12.0	12,370
1962年	11,490	50.3	2,080	9.1	7,790	34.1	1,480	6.5	22,840
1963年	13,510	71.3	1,300	6.9	3,200	16.9	920	4.9	18,930
1964年	11,235	50.2	6,475	28.9	3,370	15.0	1,320	5.9	22,400
1965年	16,500	59.0	6,630	23.7	3,550	12.7	1,300	4.6	27,980
1966年	6,700	46.2	3,000	20.7	2,750	19.0	2,050	14.1	14,500

（注） 年度別によりドル換算率に変動あるため合計の%は算出せず

31. マットグロッソ州在住者の事業団融資利用現況表

（現在貸付中の者のみ）

氏名	戦前戦後	地域	貸付年月	貸付金額	残額
バルゼアアレグレ産組		Varzea Alegre	1961−3	1,400	64
〃		〃	〃 −9	3,500	406
宮下兼弥	戦後	Terenos	〃 −8	150	75
			計	5,050	545
バルゼアアレグレ産組		Varzea Alegre	1962−7	8,037	438
			計	8,037	438
バルゼアアレグレ産組		Varzea Alegre	1963−4	6,000	1,834
			計	6,000	1,834
石井光	戦後	Varzea Alegre	1964−9	800	800
〃	〃	〃	〃 −9	400	400
小池改一	〃	〃	〃 −9	450	450
〃	〃	〃	〃 −9	750	750
宍戸順雄	〃	〃	〃 −9	700	700
〃	〃	〃	〃 −9	500	500
田曾泰三	〃	〃	〃 −9	500	500
〃	〃	〃	〃 −9	700	700
田中南	〃	〃	〃 −9	400	400
〃	〃	〃	〃 −9	600	600
沖島義智	〃	〃	〃 −9	1,250	1,250
〃	〃	〃	〃 −9	750	750
南谷満穂	〃	〃	〃 −9	1,250	1,000
池田節	〃	〃	〃 −9	1,250	1,000

氏　　名	戦前戦後	地　　域	貸付年月	貸付金額	残　　額
高木平一	戦後	Varzea Alegre	1964-9	750	350
〃	〃	〃	〃 -9	1,250	1,250
井上房二	〃	〃	〃 -9	1,050	1,050
〃	〃	〃	〃 -9	750	750
三宅義男	〃	〃	〃 -9	1,250	1,250
〃	〃	〃	〃 -9	750	550
十倉多賀男	〃	〃	〃 -9	750	750
〃	〃	〃	〃 -9	1,250	1,250
〃	〃	〃	〃 -12	100	100
〃	〃	〃	〃 -12	400	400
橋本政男	〃	〃	〃 -9	1,250	1,250
〃	〃	〃	〃 -9	750	750
田曽耕司	〃	〃	〃 -9	750	750
〃	〃	〃	〃 -9	1,250	1,250
小倉勇一	〃	〃	〃 -9	750	750
〃	〃	〃	〃 -9	1,250	1,250
沖島茂雄	〃	〃	〃 -9	1,250	1,250
蔵重昌造	〃	〃	〃 -9	750	750
黒川要	〃	〃	〃 -9	1,250	1,250
小池満	〃	〃	〃 -9	1,250	1,250
〃	〃	〃	〃 -9	750	450
田中正雄	〃	〃	〃 -9	1,250	1,250
〃	〃	〃	〃 -9	750	650
山崎嘉信	〃	〃	〃 -9	1,250	1,250
鈴木伊助	〃	〃	〃 -9	1,250	1,000
小川栄	〃	〃	〃 -9	1,250	1,250
〃	〃	〃	〃 -9	750	750
宍戸裕雄	〃	〃	〃 -9	1,250	1,250

氏　　名	戦前戦後	地　　域	貸付年月	貸付金額	残　　額
宍戸裕雄	戦後	Varzea Alegre	1964−9	750	750
秋枝朝視	〃	〃	〃 −9	700	700
〃	〃	〃	〃 −9	500	500
相沢忠貫	〃	〃	〃 −9	1,250	1,250
〃	〃	〃	〃 −9	750	750
西山照夫	〃	〃	〃 −9	750	650
〃	〃	〃	〃 −9	1,250	1,250
金崎九郎	〃	〃	〃 −9	1,250	1,250
〃	〃	〃	〃 −9	750	650
津田和三郎	〃	〃	〃 −9	800	800
〃	〃	〃	〃 −12	700	200
小野隆	〃	〃	〃 −9	1,250	1,250
〃	〃	〃	〃 −9	750	650
中村喬二	〃	〃	〃 −9	1,250	1,250
〃	〃	〃	〃 −9	750	650
橋本勝吉	〃	〃	〃 −9	700	700
〃	〃	〃	〃 −9	500	300
小野凱幸	〃	〃	〃 −9	500	500
			計	52,750	49,600
山下三郎	戦後	Campo Grande	1965−12	1,650	1,650
日向野富雄	〃	Terenos	〃 −12	1,500	1,500
小松政夫	〃	Varzea Alegre	〃 −12	1,650	1,650
宮原正治	〃	〃	〃 −6	1,250	1,250
〃	〃	〃	〃 −6	750	750
金崎九郎	〃	〃	〃 −10	8,000	8,000
小倉清美	〃	〃	〃 −10	1,000	1,000
〃	〃	〃	〃 −10	200	200

氏　　名	戦前 戦後	地　　域	貸付年月	貸付金額	残　　額
長田　　治	戦後	Varzea Alegre	1965−1	1,200	900
石井　　光	〃	〃	〃　−12	500	500
パルゼアアレグレ産組	〃	〃	〃　−9	12,000	10,000
			計	29,700	27,400
阿部三九郎	戦前	Rio Ferro	1966−8	39,900	39,900
松田昌太郎	戦後	Campo Drande	〃　−9	3,000	3,000
山内昌文	〃	〃	〃　−9	4,000	4,000
知花東平	〃	〃	〃　−9	4,000	4,000
山内信徳	〃	〃	〃　−9	5,000	5,000
新垣正春	〃	〃	〃　−9	2,800	2,800
義武息良	戦前	Caiabá	〃　−9	3,000	3,000
首藤　　真	〃	Terenos	〃　−8	3,000	3,000
酒本正男	戦後	Campo Drande	〃　−8	1,500	1,500
池田　　節	〃	Varzea Alegre	〃　−3	500	500
パルゼアアレグレ産組	〃	〃	〃　−8	20,000	20,000
			計	86,700	86,700

（注）同一人が月２回の貸付を受けているのは長期と短期である。

年度別融資利用合計表

貸付年月	件数		貸付金額	残　　額
	戦前	戦後		
1961年		3人	5,050	545
1962年		1人	8,037	438
1963年		1人	6,000	1,834
1964年		60人	52,750	49,600
1965年		11人	29,700	27,400
1966年	3人	8人	86,700	86,700
合　　計	3人	84人	188,237	166,517

32. 地域別借入金表

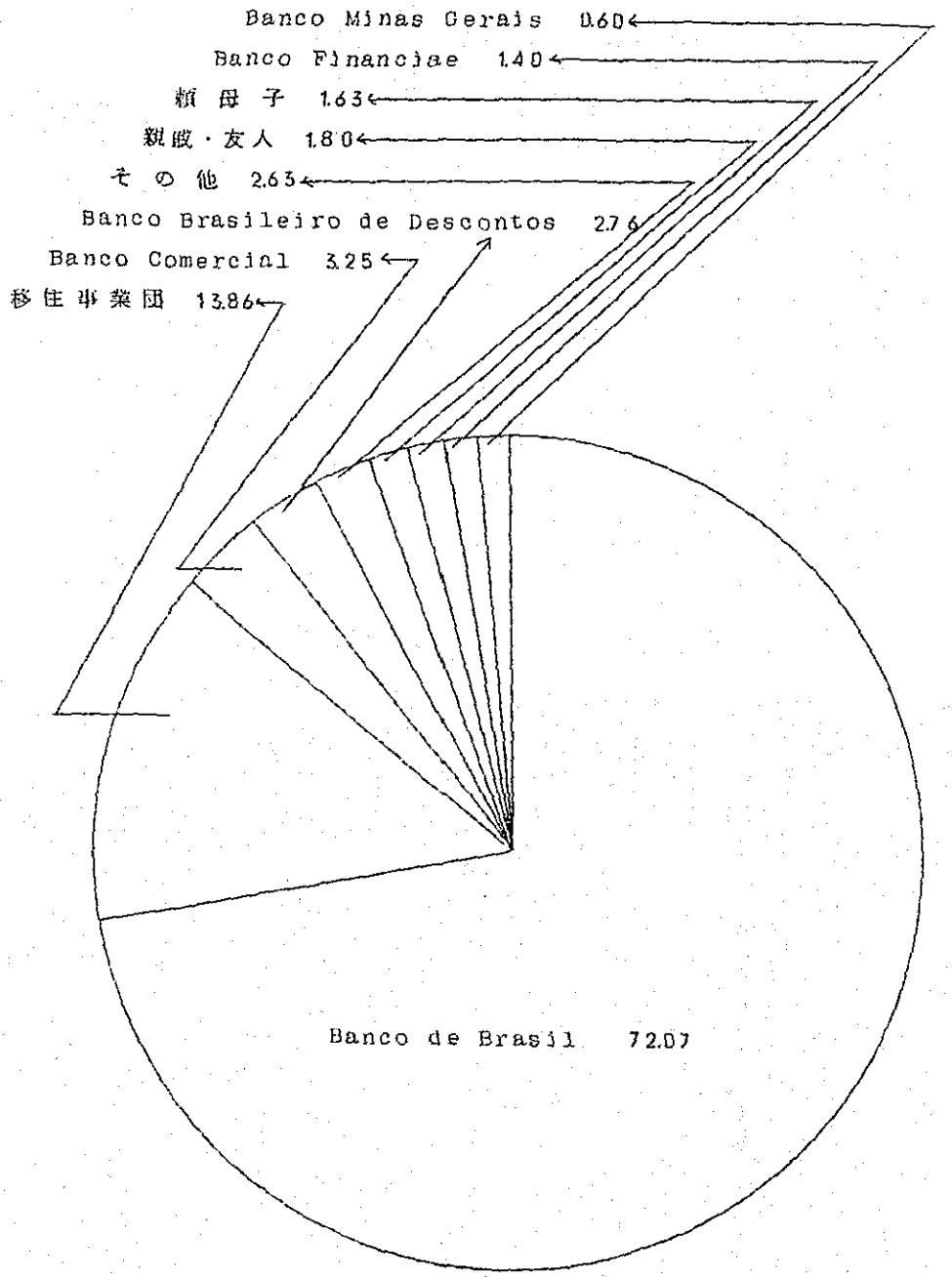
※年度 1965/66
※単位 コント＝1,000クルゼイロス

借入先 / 地域	Banco do Brasil	件数	Banco Brasileiro de Descontos	件数	Banco Financial	件数
Cáceres	2,000	1				
Cuiaba						
Rio Ferro						
Rondonópolis	15,550	8				
Dois Irmões	500	1				
3ª Linha	16,910	14				
Barrerão	21,790	12				
Dourados	4,500	2				
Curpai	13,830	7				
Navirai	44,300	4				
Varzea Alegre	7,800	3	1,500	2		
Campo Grande	16,800	8	4,000	2	2,800	1
合計	143,980	60	5,500	4	2,800	1
パーセント	72.07%		2.76%		1.40%	

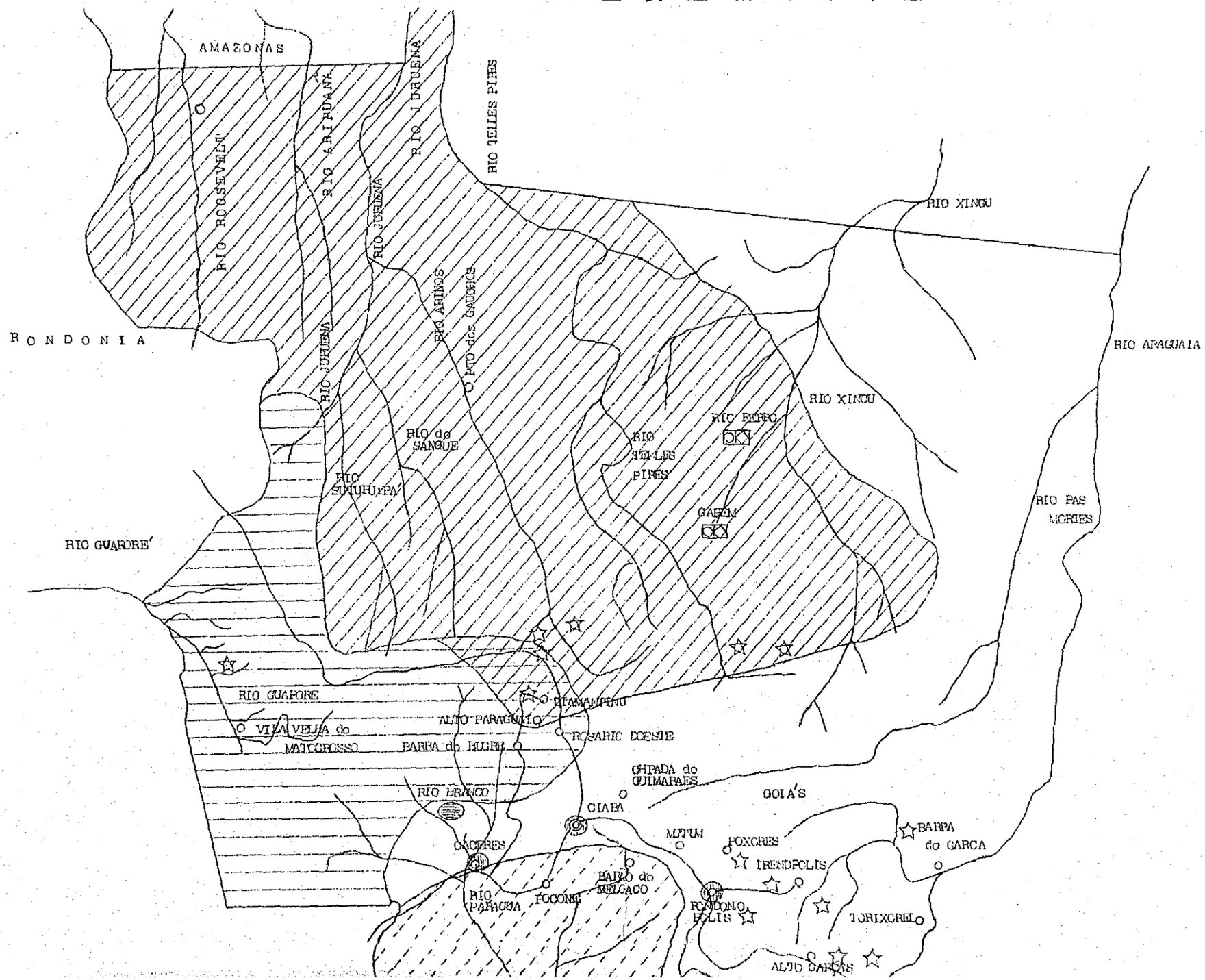
※ 年度 1965／66
※ 単位 コント＝1,000クルゼイロス

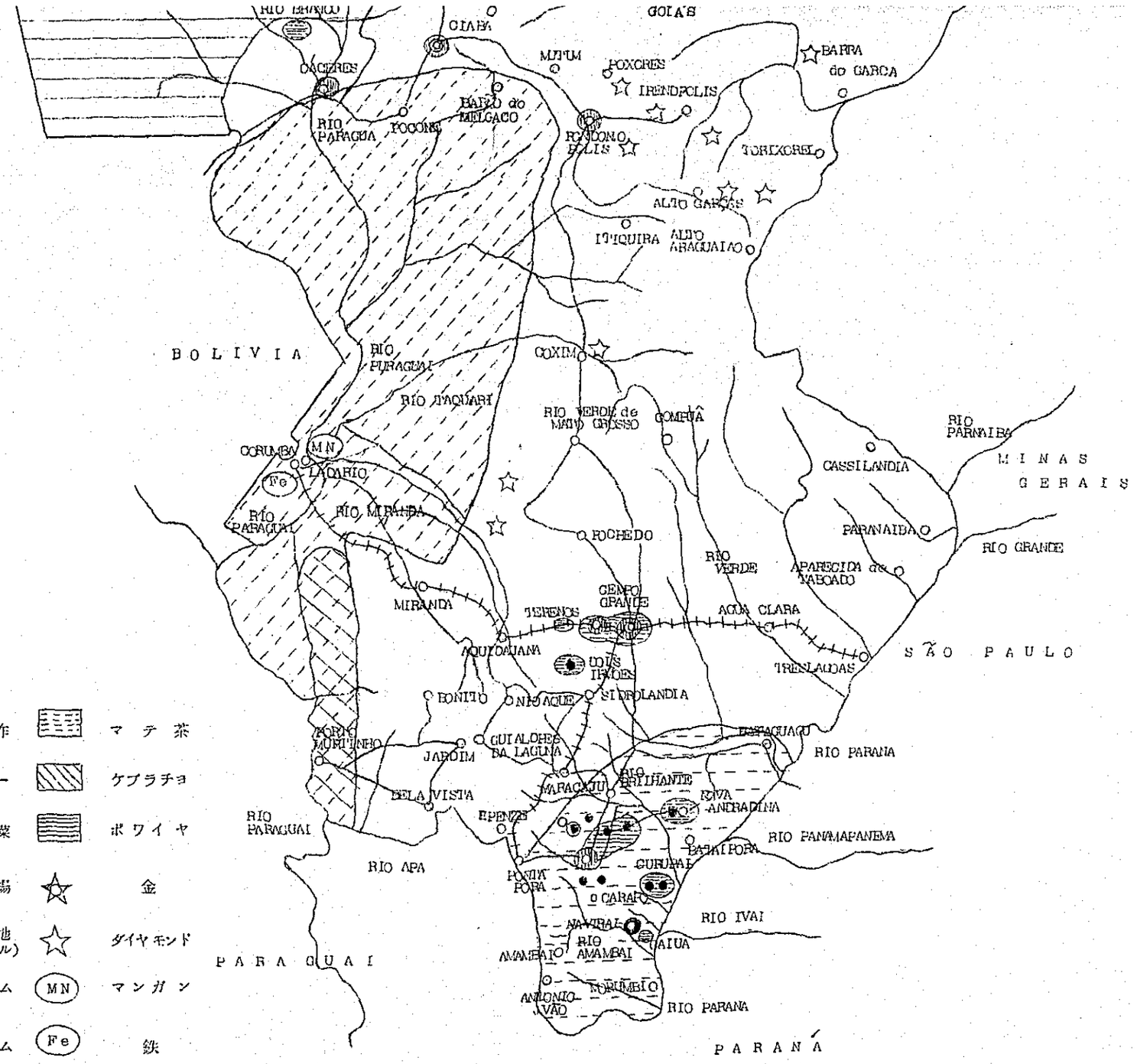
Banco do Minas gerais	件数	Banco Comercial	件数	事業団	件数	親母子	件数	親戚友人	件数	その他	件数	合計	件数
												2,000	1
1,200	1											1,200	1
				7,500	5			300	1			7,800	6
												15,550	8
												500	1
										1,750	2	18,660	16
		3,500	2									25,290	14
						1,000	1	1,000	1	500	1	7,000	5
				1,900	2							15,730	9
												44,300	4
				15,300	8							24,600	13
		3,000	1	3,000	1	2,254	3	2,300	2	3,000	1	37,154	19
1,200	1	6,500	3	27,700	16	3,254	4	3,600	4	5,250	4	199,784	97
0.60%		3.25%		13.86%		1.63%		1.80%		2.63%		100%	

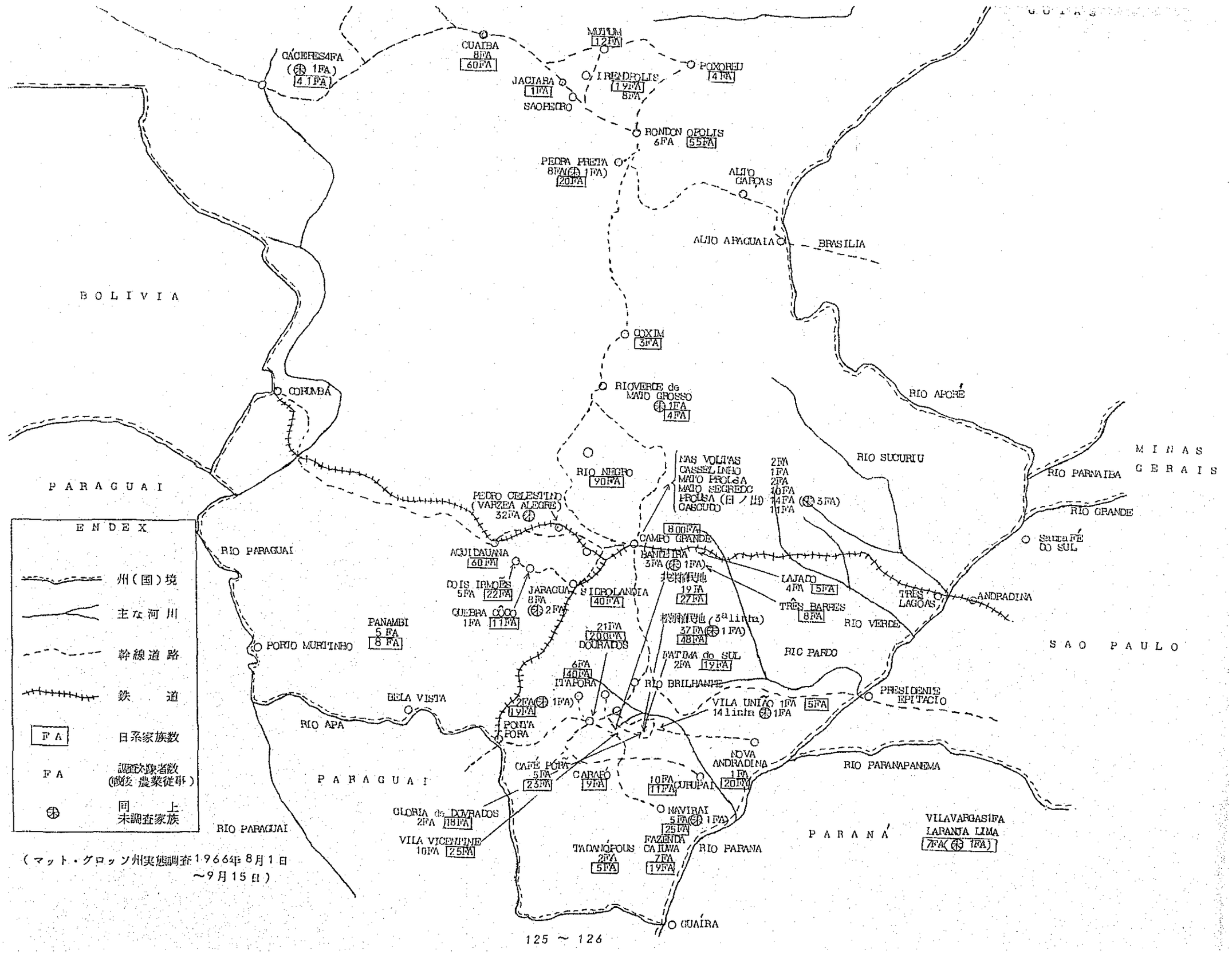
33. 借 入 金 （借入先別）


Banco Minas Gerais 0.60
Banco Financiae 1.40
頼 母 子 1.63
親戚・友人 1.80
そ の 他 2.63
Banco Brasileiro de Descontos 2.76
Banco Comercial 3.25
移住事業団 13.86
Banco de Brasil 72.07

34. マット・グロッソ州主要生産物分布図

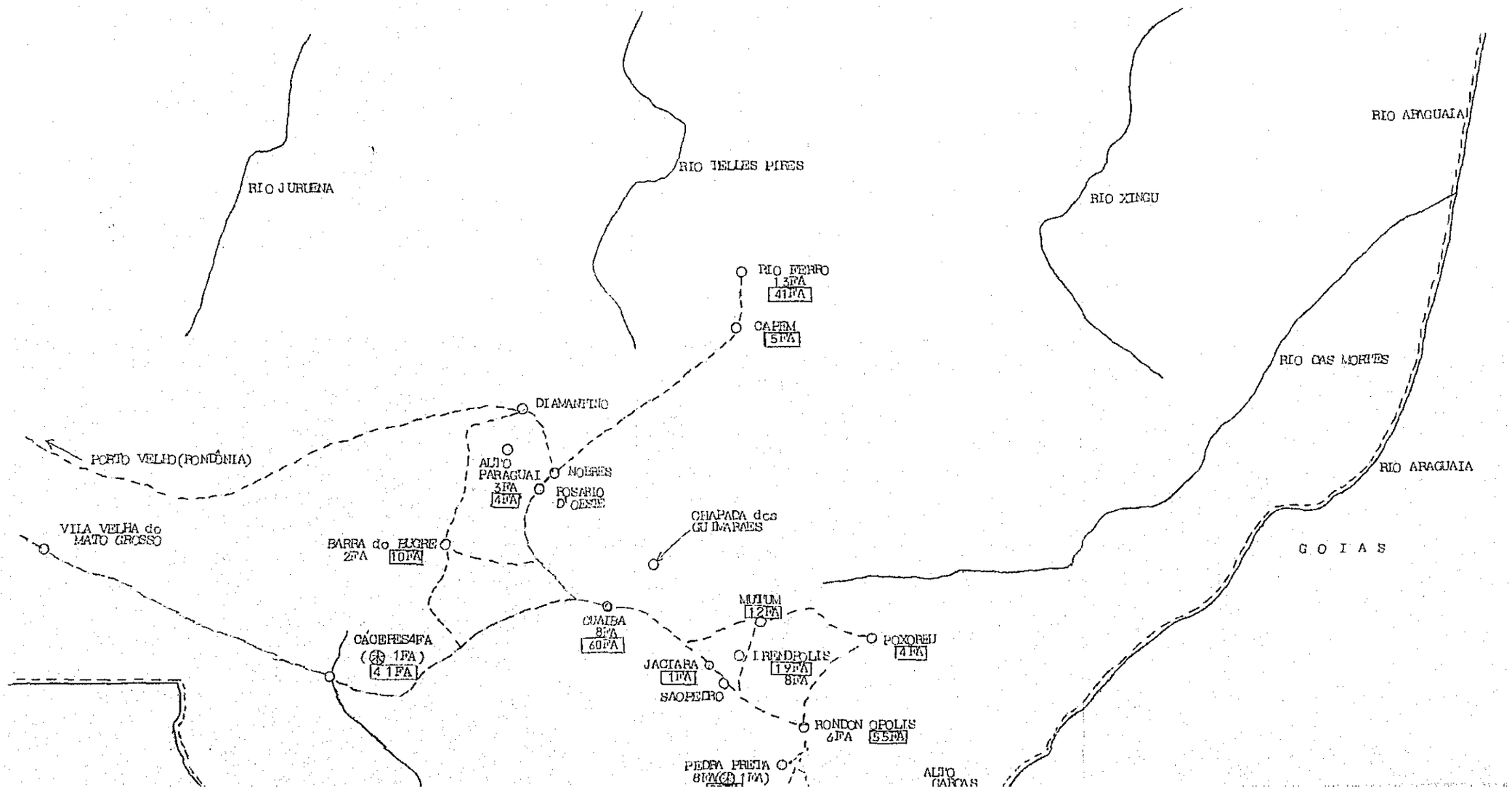



GOIÁS
CUIABÁ
MUTUM
POXORÉO
BARRA do GARÇA
IRENDÓPOLIS
CÁCERES
RIO PARAGUA
POCONÉ
BARRO do MELGAÇO
RONDONÓPOLIS
TORIXORÉU
ALTO GARÇAS
ITIQUIRA
ALTO ARAGUAIAO
BOLIVIA
RIO PARAGUAI
COXIM
RIO TAQUARI
RIO VERDE de MATO GROSSO
GOIPÊA
RIO PARNAIBA
CORUMBA
MN
LADARIO
Fe
CASSILANDIA
MINAS GERAIS
RIO PARAGUAI
RIO MIRANDA
ROCHEDO
PARANAIBA
RIO GRANDE
RIO VERDE
APARECIDA do TABOADO
MIRANDA
CAMPO GRANDE
TERENOS
ÁGUA CLARA
AQUIDAUANA
DOURADOS
TRES LAGOAS
SÃO PAULO
BONITO
NIOAQUE
SIDROLANDIA
PORTO MURTINHO
JARDIM
GUIALHERE DA LAGUNA
BATAGUAÇU
RIO PARANA
MARACAJU
RIO BRILHANTE
BELA VISTA
IVINHEMA
ANDRADINA
RIO PARAGUAI
EPENZE
RIO PANAMAPANEMA
BATAIPORA
RIO APA
PONTA PORA
CURUPAI
O CARAPÃ
NAVIRAI
RIO IVAI
AMAMBAIO
RIO AMAMBAI
AIUA
PARAGUAI
CORUMBIO
ANTONIO JOÃO
RIO PARANA
PARANÁ
雑　作
マテ茶
コーヒー
ケブラチョ
野　菜
ポワイヤ
牧　場
金
低湿地 (パンタナール)
ダイヤモンド
植林ゴム
MN
マンガン
天然ゴム
Fe
鉄
胡　椒 (ピメンタドレーノ)



(マット・グロッソ州実態調査 1966年8月1日 ～9月15日)

35. マット・グロッソ州日系人分布図



36. マットグロッソ州戦後移住者農業従事者

地域別名簿（北部）

地域名	氏名	家族数	出身県	着伯年月	営農形態	通信先
Cáceres	遠藤春見	7	福島	1959－7	借地	Rua Reachuelo 79 Cáceres
	金野尾武	7	佐賀	1956－1	借地	〃
	坂下栄徳	1	佐賀	1958－2	借地	% Correio Cáceres M. T
	平島誠也	1	熊本		雇用	未調査（遠距離のため）
計	4家族	16人				
Cuiabá	伊沢清二郎	9	神奈川	1956－8	分益	% Seminario Cristo Rei Cuiabá M T
	今野昭八	4	山形	1959－8	借地	% Shinohara Rua Joaquim Martinho 323
	尾崎堯	5	秋田	1954－12	借地	% Caixa Postal 270 Cuiabá
	堀本吉雄	7	和歌山	1953－8	借地	% Caixa Postal 57 Cuiabá
	湧柏国朝信	9	沖縄	1958－7	自営	% Caixa Postal 201 Cuiabá
	比嘉正次	3	沖縄	1959－11	借地	% Bar Oriental Avenida Ponce M T
	大道寿	2	長崎	1959－8	商業	Rua Fdc setembro 80 Cuiabá
	山内義寿	6	沖縄	1960－10	商業	Rua Coxinho 175 Cuiabá
計	8家族	45人				

地域名	氏名	家族数	出身県	着伯年月	営農形態	通信先
Alto Paraguai	金城盛信	5	沖縄	1958－7	借地	c/o Real modas Travessa João dias 47 Cuiabá
	比嘉徳行	6	沖縄	1958－7	借地	〃
	平良睿吉	1	沖縄	1960－2	借地	〃
計	3家族	12人				
Barra do Bugre	笹川喜七	2	福岡	1956－7	自営	Barra do Bugre Fazenda Maravilha
	田中康春	8	沖縄	1959－8	自営	Companha Cita Tangerá da Serra Burra do Bugre
計	2家族	10人				
Rio Ferro	田中勝好	4	福岡	1958－1	自営	Rio Ferro Caixa Postal 150 Cuiabá
	片桐悌悦	4	神奈川	1960－3	自営	〃
	山崎薫	2	茨城	1961－5	自営	〃
	加藤木哲夫	1	茨城	1959－8	雇用	〃
	葛山正信	4	熊本	1961－5	分益	〃
	尾崎士郎	4	秋田	1954－12	自営	〃
	播磨敬治郎	10	北海道	1953－9	自営	〃
	小川正勝	1	兵庫	1964－5	雇用	〃
	宮西憲司	1	熊本	1960－5	雇用	〃
	梶原一信	5	和歌山	1953－7	自営	〃
	吉原敏介	1	福岡	1962－5	分益	〃
	下川かずえ	5	福岡	1957－10	自営	〃

	細尻常男	5	和歌山	1953－8	自営	〃
計	13家族	47人				
Rondonópolis	米本宇一郎	3	徳島	1957－5	自営	%Caixa Postal 40 Rondonópolis
	山口徳清	4	石川	1960－5	自営	Caixa Postal 32 〃
	堤芳美	2	高知	1957－12	借地	〃 〃
	衣料栄	6	長崎	1957－3	自営	〃 〃
	風間清徳	11	北海道	1956－7	自営	Caixa Postal 19 〃
	溝部富雄	3	山口	1955－4	自営	Caixa Postal 32 〃
計	6家族	29人				
Pedra Preta	内山三千之助	6	北海道	1956－8	自営	Caixa Postal 32 Rondonópolis
	吉田重美	2	福島	1957－4	自営	〃 〃
	山口篤造	5	石川	1951－3	自営	%Caixa Postal 32, Pedra Preta Rondonópolis
	嶋三郎	8	北海道	1956－7	自営	〃 〃
	千川実	3	群馬	1955－11	自営	Caixa Postal 35, 〃
	島谷猛	1	広島	1960－12	借地	〃 〃
	笹井良一	6	長野	1955－1	自営	Caixa Postal 32, 〃
計	7家族	31人				
Irenópolis (Pantura)	前原稔	3	広島	1957－8	自営	São Pedro Cipó Jaciara Irenópolis
	宮本信幸	4	和歌山	1956－2	分益	〃
	谷本春雄	4	北海道	1956－3	自営	〃

地域名	氏名	家族数	出身県	着伯年月	営農形態	通信先
	佐藤政美	3	秋田	1955－2	雇用	São Pedro Cipá Jaciara Irendópolis
	井手秀夫	9	福岡	1957－9	分益	〃
	中野喜八	6	北海道	1956－6	自営	〃
	家久正人	1	徳島	1956－6	借地	〃
	髙村忠義	1	北海道	1961－5	借地	〃
計	8家族	31人				
Rio Verde de Mato grosso	小川佐兵次					未調査
計	1家族					

地域別名簿（中部）

地域名	氏名	家族数	出身県	着伯年月	営農形態	通信先
Dois Irmões	菅野一馬	12	北海道	1959－2	自営	Pensão Avenida, Sidro lândia M. T
	吉本喜太郎	8	熊本	1959－4	〃	〃
	由井勝義	6	福島	1956－12	〃	〃
	仁瓶亀松	6	〃	1959－12	〃	〃
	小原功	1	長野	1964－2	〃	Campo Grande Caixo Postal 350
計	5家族	33人				

Quebra Côco	大泉三男	13	福島	1954－6	自営	Pensão Avenida Sidro landia
計	1家族	13人				
Corumbá	桑田義彦	1	広島	1960－8	借地	% Mercado Municipal Corombá Bancca 80
	大竹					未調査
	比嘉					〃
	小川					〃
	日下部					〃
計	5家族	1人				
Varzea Alegre (Pedro Celestino)	宍戸順夫	4	福島	1959－8	自営	% Estacão Pedro Celestino N. O. B
	三宅義男	7	山口	1960－8	〃	〃 〃
	橋本政雄	4	〃	1960－8	〃	〃 〃
	田舎耕司	5	広島	1960－8	〃	〃 〃
	宍戸裕雄	7	福島	1959－8	〃	〃 〃
	中村喬二	5	北海道	1957－11	借地	〃 〃
	蔵重昌造	6	山口	1960－7	自営	〃 〃
	黒川要	3	〃	1960－7	〃	〃 〃
	坂井定雄	6	〃	1960－6	〃	〃 〃
	鈴川伊助	6	〃	1960－6	〃	〃 〃
	小川栄	6	石川	1959－9	〃	〃 〃
	小池満	8	山口	1960－7	〃	〃 〃

地域名	氏名	家族数	出身県	着伯年月	営農形態	通信先
Varzea Alegre (Pedro Celestino)	井上房二	9	山口	1960－8	自営	%stacao Pedro Celestino N Q B
	南谷満穂	6	〃	1961－4	〃	〃 〃
	池田節	7	〃	1961－6	〃	〃 〃
	高木平一	9	〃	1960－9	〃	〃 〃
	西山照夫	5	〃	1959－5	〃	〃 〃
	小倉勇一	4	〃	1960－7	〃	〃 〃
	石井光	6	福岡	1960－10	〃 兼組合職員	〃 〃
	相沢忠貫	5	山口	1959－5	〃 組合理事	〃 〃
	金崎九郎	9	〃	1959－5	〃 〃	〃 〃
	秋枝つね子	8	〃	1959－5	自営	〃 〃
	十倉多賀男	4	大阪	1960－8	〃	〃 〃
	林信行	3	山口	1960－8	〃	〃 〃
	田中正雄	3	〃	1960－6	〃	〃 〃
	山崎嘉信	6	〃	1960－6	〃	〃 〃
	大津和美	2	〃	1960－6	〃	〃 〃
	浅田憲照	5	石川	1961－6	〃	〃 〃
	沖島茂雄	4	山口	1960－6	〃	〃 〃
	宮原					未調査
	小野					〃

	鈴木恭介	3	千葉			〃
計	29家族	162人				
Terenos	入江輝重	1	福岡	1959－3	雇用	% Fazenda Sta. Eliza Terenos
	黒瀬利夫	8	〃	1959－3	分益	〃 〃
	森孝之	6	広島	1958－2	自営	% Shigeo Mori Rua 13 de Maio 1018 C. Grande
	日向野富雄	2	神奈川	1959－8	〃	% Correio Terenos
計	4家族	17人				
Colonia Nipo Brasileira (日の出植民地)	広川守	10	島根	1960－8	自営	C P 508 Campo Grande M T
	喜納政喜	5	沖縄	1958－7	借地	% Seitoku Ishikawa Rua 14 de Julho 1,576 C. Grande
	山内信徳	4	〃	1960－10	〃	〃 〃
	松田昌太郎	7	〃	1960－10	〃	〃 〃
	知花真勲	8	〃	1960－10	〃	〃 〃
	松田昌憲	5	〃	1960－10	〃	〃 〃
	知花奈平	8	〃	1960－8	〃	〃 〃
	国芳写生	8	〃	1960－8	〃	〃 〃
	西川義忠	7	和歌山	1953－8	自営	〃 〃
	小森寛	5	福岡	1960－10	借地	% Kobayashi Rua 15 de Novembro 115 C. Grande
	大成繁盛	5	沖縄	1958－6	雇用	% Seitoku Ishikawa Rua 14 de Julho 1,576 C. Grande
	国吉真助	5	〃	1960－8	借地	〃 〃
	当銘和繁	13	〃	1957－8	自営	〃 〃

地域名	氏名	家族数	出身県	着伯年月	営農形態	通信先
	山内昌文	8	沖縄	1960－8	借地	% Seitoku Ishikawa Rua 14 de Julho 1576 C. Grande
計	14家族	98人				
Seroura	長谷明美	3	宮崎	1957－1	分益	% Seitoku Ishikawa Rua 14 de Julho 1576 C Grande
	豊見本達男	7	沖縄	1959－8	借地	% Matusuke Agena Rua General melho 186 C Grande
	比嘉若俊	17	〃	1955－1	自営	Rua Antonio Almeida 88 C Grande
	比嘉栄秀	6	〃	1958－7	〃	% Tomoyoshi C. P 362 Campo Grande
	小川又市	8	和歌山	1954－8	借地	〃 〃
	源河新吉	5	沖縄	1955－9	自営	% Miyahira Rua 13 de maio 2109 C Grande
	大城勇雄	4	〃	1960－3	借地	% Yamauchi Rua 14 de Julho 1025 C. Grande
	八尋哲也	3	福岡	1960－10	分益	% Takemori Oshiro C. Postal 385 C. Grande
	城間政輝	1	沖縄	1959－8	借地	% Matsusuke Agena Rua General Melho 186
	棚原米次郎	5	〃	1957－4	〃	Rua Antonio Almeida 88 C Grande
	古川栄	8	和歌山	1953－8	分益	Caixa Postal 396 C. Grande
	大浜					未調査
	具志堅					〃
計	13家族	67人				
Casselinho	宮城亀助	6	沖縄	1956－10	借地	Rua 7 de Setembro 115 C Grande
計	1家族	6人				
Prousa	野原徳一	9	沖縄	1956－3	借地	% Nakamatsu Rua 14 de Julho C Grande

	当銘　弘	8	〃	1958－7	借地	〃　〃
計	2家族	17人				
Mato Segrêdo	小林恒直	9	石川	1961－5	自営	C. Postal 362 C. Grande
	新垣正英	11	沖縄	1951－5	〃	% Seikichi Arakaki Rua General mello
	大城盛昌	5	〃	1957－8	借地	% Oshiro Rua Caruyu 51 C. Grande
	新垣栄喜	6	〃	1959－1	〃	% Tosho Aragaki Rua Don Aquino C. Grande
	新垣栄徳	7	〃	1961－12	自営	〃　〃
	平良玉茂	4	〃	1957－4	〃	% Seitoku Ishikawa Rua 14 de Julho 1,576 C. Grande
	金城　衛	6	〃	1957－4	借地	Rua Maracaju 290 C. Grande
	中曽根　則					未調査
	仲下重男					〃
	山内昌吉					〃
計	10家族	48人				
Jaraguá	阿波根直頼					未調査
	伊礼義勝	10	沖縄	1958－7	借地	% Seitoku Ishikawa Rua 14 de Julho 1,576 C. Grande
	高峰次郎	7	〃	1960－10	〃	〃　〃
	伊礼　昇	3	〃	1958－7	〃	Rua Marechal Deodoro 50 C. Grande
	新垣平吉	6	〃	1960－10	〃	% Seitoku Ishikawa Rua 14 de Julho 1,576 C. Grande
	山内昌明	5	〃	1960－10	〃	〃　〃
	山内昌吉郎	3	〃	1960－10	〃	〃　〃

地域名	氏名	家族数	出身県	渡伯年月	営農形態	通信先
	又吉政永					未調査
計	7家族	34人				
Bandeira	新垣栄吉	6	沖縄	1955－7	借地	% Kichisaburo Aragaki C. P 105 C. Grande
	酒本正男	6	大阪	1960－9	〃	Rua Inhanduá C. Grande
	宮城良幸					未調査
計	3家族	12人				
Angico	安谷屋勇	3	沖縄	1957－9	借地	C. P 362 C. Grande
	比嘉健夫	2	〃	1956－9	〃	Rua 13 de Maio 1010 C. Grande
	福島薫	10	〃	1957－4	〃	Rua 13 de Maio 1735 C. Grande
	井上茂					未調査
計	4家族	15人				
Rajado	山内明松	9	沖縄	1957－10	借地	Rua Dom Aguino 385 C. Grande
	山田明弘	4	〃	1955－3	〃	〃 〃
	比嘉篤真	2	〃	1955－3	〃	Rua Maracaju 536 C. Grande
	木原市次郎	5	福岡	1960－7	〃	C. P 362 C. Grande
計	4家族	20人				
Cascudo	名嘉清徹	9	沖縄	1958－7	借地	% Seitoku Ishikawa Rua 14 de Julho 1756 C. Grande
	上地善信	8	〃	1959－11	〃	〃 〃
	呉屋清康	7	〃	1956－3	自営	% Seikichi Kohatsu Rua Saudonia Marinho 353 C. Grande

	小野田 格 郎	6	和歌山	1953－ 8	借 地	C. P. 430 C. Grande
	金 城 蒲 助	8	沖 縄	1957－12	〃	% Guiithi Higa C. P 204 C. Grande
	金 城 勇 吉	7	〃	1958－ 7	分 益	% Yoshikuni Sokei C. P 1335 C. Grande
	屋富祖 正 明	9	〃	1959－10	借 地	% Seitoku Ishikawa Rua 14 de Julho 1,576 C. Grande
	平 良 寅 吉	9	〃	1958－ 6	〃	% Miyashiro C. P 294 C. Grande
	新 垣 平三郎	7	〃	1960－ 9	〃	Rua Marechal Deodoro 50 C. Grande
	小波津 勇 善	5	〃	1954－10	〃	% Seikichi Kohatsu C. P 353 C. Grande
	上 原 亀 一	5	〃	1959－ 6	〃	〃 〃
計	11家族	80人				
Remonta	宮 城 初 公	3	沖 縄	1954－ 9	借 地	% Seitoku Ishikawa Rua 14 de Julho 1,576 C. Grande
	玉 城 清 栄	7	〃	1958－ 7	分 益	% Seiji Miyazato Rua 13 de Maio 1,146 C. Grande
計	2家族	10人				
Lincoln	古 堅 宗 治	3	沖 縄	1958－ 6	借 地	% Seikichi Harashiro Rua Afonsfena 572 C. Grande
	山 田 正 記	5	〃	1958－ 6	分 益	〃 〃
計	2家族	8人				
Nas Voltas	砂 川 定 金	1	沖 縄	1958－12	借 地	% Hotel da Estação C. P 39 C. Grande
	下 地 隆 敏	6	〃	1956－ 2	〃	C. P 747 C. Grande
計	2家族	7人				
Bom Fim	上 地 清 市	10	沖 縄	1953－10	自 営	% Seitoku Ishikawa Rua 14 de Julho 1,576 C. Grande
計	1家族	10人				

地域別名簿（南部）

地域名	氏名	家族数	出身県	着伯年月	営農形態	通信先
Nova Andradina	代田正二	3	長野	1954－8	自営 測量	C. P 1757 São Paulo Est de S. Paulo
計	1家族	3人				
Vila União	稲崎清太郎	4	和歌山	1958－8	自営	C. P 170 Dourados
計	1家族	4人				
14 linha	大場五郎		滋賀		自営	未調査
計	1家族					
Glória de Dourados (4ª linha)	玉置澄晴	5	和歌山	1953－8	自営 精米業	C. P 100 Glória de Dourados
	森下安雄	9	〃	1953－8	〃 雑貨商	℅ Correio Glória de Dourados
計	2家族	14人				
Matsubara (3ª linha)	三ツ森安吉	7	和歌山	1953－7	自営	℅ Toshinobu Katayama C. P 65 Dourados
	坂口元一	7	〃	1953－7	〃	℅ Takao Masago C. P 69 Dourados
	梅田幸治	8	〃	1953－7	〃	℅ Toshinobu Katayama C. P 65 Dourados
	尾崎新助	7	〃	1953－7	〃	C. P 45 Dourados
	山崎常雄	9	〃	1953－8	〃	℅ Casa Real C. P 7 Vila Brasil
	岩畑与八	6	〃	1953－7	〃	℅ Toshinobu Katayama C. P 65 Dourados

	岡田竜男	6	〃	1958－9	〃	〃　〃
	那須孫一	5	〃	1953－8	〃	C. P 48 Vila Vicentina
	坂本竹五郎	6	〃	1953－8	〃	％Toshinobu Katayama C. P 65 Dourados
	貴志啓治郎	3	〃	1953－8	〃	％Aida C. p 28 Dourados
	中屋　淑	8	〃	1953－8	〃	％Toshinobu Katayama C. P 65 Dourados
	丸山幸雄		〃			未調査
	尾崎恒三	7	〃	1953－8	〃	C. P 48 Vila Brasil
	中屋　淳	6	〃	1953－8	〃	％Katayama C. P 65 Dourados
	谷口広治	9	〃	1953－8	〃	％Toshinobu Katayama C. P 65 Dourados
	野口一郎	10	〃	1953－8	〃	〃　〃
	貞盛三男	2	岡山	1953－8	〃	〃　〃
	出合一男	6	和歌山	1953－8	〃	〃　〃
	納谷三郎	7	〃	1953－7	〃	〃　〃
	石神利七	2	〃	1953－8	〃	〃　〃
	裏　輝男	6	〃	1953－7	〃	〃　〃
	森　定男	7	〃	1953－8	〃	〃　〃
	高木伝造	5	〃	1953－7	〃	〃　〃
	西尾熊治	6	〃	1953－8	〃	C. P 20 Fatima do Sul
	広井富二郎	7	〃	1955－5	〃	％Toshinobu Katayama C. P 65 Dourados
	榎本庄太郎	5	〃	1953－8	〃	〃　〃

地域名	氏名	家族数	出身県	着伯年月	営農形態	通信先
Matsubara (3ª Linha)	柿本文二	3	和歌山	1953－8	自営	% Toshinobu Katayama C. P 65 Dourados
	茂由	6	〃	1956－2	〃	〃 〃
	宮下幸雄	8	〃	1953－8	〃	% Dokko C. P 41 Dourados
	柳生豊彦	4	〃	1953－7	〃	C. P 48 Fatima do Sul
	三栗国雄	6	〃	1953－8	〃	% Toshinobu Katayama C. P 65 Dourados
	島忠一	4	〃	1953－8	〃	% Sakaguchi C. P 142 Dourados
	西和蔵	5	〃	1953－7	〃	% Toshinobu Katayama C. P 65 Dourados
	馬所広一	5	〃	1953－8	〃	% Imai Aida C. P 28 Dourados
	宮井喜一郎	7	〃	1953－8	〃	〃 〃
	浦荒光	4	〃	1958－9	分益	% Toshinobu Katayama C. P 65 Dourados
	那須三代	8	〃	1953－7	自営	C. P 20 Fatima do Sul
計	37家族	217人				
Vila Vicentina	安中武弘	8	北海道	1954－2	自営	C. P 22 Fatima do Sul
	伊藤清吾	8	〃	1954－2	〃	〃
	安中信雄	4	〃	1956－3	〃	〃
	金繁久松	5	〃	1956－3	〃	〃
	安中虔一	9	〃	1956－3	〃	〃
	伊藤英二	4	〃	1954－2	〃	〃
	安中喜久次	5	〃	1956－3	〃	〃

	安中　武	10	〃	1954－2	〃	〃
	浜野一彦	9	〃	1954－2	〃	〃
	安中　進	6	〃	1956－3	〃 大工	〃
計	10家族	68人				
Fatima do Sul	塚越昭二	6	群馬	1955－11	自営	% Hoshika C. P 7 Fatima do Sul
	愛洲良一	6	和歌山	1953－8	〃	C. P 110 Fatima do Sul
計	2家族	12人				
Barrerão (共栄植民地)	伊藤正一郎	7	北海道	1956－6	自営	% Sakaguchi C. P 142 Dourados
	河内　実	9	〃	1954－2	分益	〃
	太田彌一	7	〃	1956－3	自営	% Toshinobu Katayama C. P 65 Dourados
	飯山元晴	13	〃	1954－2	〃	C. p 178 Dourados
	飯山幸雄	6	〃	1954－2	〃	% Toshinobu Katayama C. P 65 Dourados
	城田義男	7	三重	1954－2	〃	〃
	城田芳幸	3	〃	1954－2	〃	〃
	中野吉太郎	7	北海道	1956－6	〃	〃
	飯山信治	9	〃	1954－2	〃	〃
	上村和弘	7	〃	1956－3	〃	〃
	城田茂生	7	三重	1954－2	〃	〃
	桜井広治	5	北海道	1954－2	〃	〃
	住岡　一	8	広島	1956－8	〃	〃

地域別	氏名	家族数	出身県	着伯年月	営農形態	通信先
Barrerão （共栄植民地）	中島 清	5	北海道	1956－3	自営	Fatim do Sul C. P 110
	河内光一	13	〃	1954－2	〃	Dourados C. P 47
	大野発男	6	〃	1954－2	〃	％Toshinobu Katayama Dourados C. P 65
	木村佐吉	7	〃	1957－2	〃	％Hoshika Fatima do sul C. P 7
	田中 繁	6	香川	1954－9	〃	〃 〃
	城田健二	3	三重	1954－2	〃	％Toshinobu Katayama Dourados C. P 65
計	19家族	135人				
Laranja Lima （平和植民地）	長谷川義雄	11	北海道	1956－6	自営	％Toshinobu Katayama Dourados C. P 65
	大橋秀夫	5	〃	1961－3	〃	〃 〃
	岩城 馨	10	〃	1956－6	〃	％Imai Dourados C. P 47
	石見良一	5	〃	1962－4	借地	％Motonia Aida Dourados 28
	岩本俊彦	5	〃	1961－4	自営	％Toshinobu Katayama Dourados C. P 65
	田中キヌ	4	和歌山	1959－8	〃	〃 〃
	内山英一					未調査
計	7家族	40人				
Dourados	小原保男	4	和歌山	1958－9	自営	％Toshinobu Katayama Dourados C. P 65
	佐々木 上	6	広島	1960－8	〃	％Imai Dourados C. P 82
	山中隆雄	5	鹿児島	1957－4	〃	％Eikichi Sakaguchi Dourados C. P 142
	佐野米夫	3	福井	1958－5	〃	％Casa Yonekura Dourados C. P 153

Dourados	山崎正己	8	佐賀	1957－8	借地	% Toshinobu Katayama Dourados C. P 65
	大城勇二	2	沖縄	1962－10	自営	〃 〃
	宮城信夫	5	〃	1958－1	借地	〃 〃
	大城清輝	6	〃	1957－9	自営	% Miyagui Rua Presidente Vargas 734
	塚越由高	7	群馬	1955－11	雇用	% Fujinaka Dourados C. P 65
	栗山政治	7	北海道	1958－3	自営	% Katayama 〃
	大城元幸	8	沖縄	1958－1	〃	% Miyagui Rua Presidente Vargas 734
	増子清雄	5	東京	1962－4	〃	% Aida Dourados C. P 28
	増子文喜	4	〃	1962－4	〃	〃 〃
	向江　弘	4	和歌山	1959－9	借地	% Katayama Dourados C. P 65
	星野　清	3	茨城	1958－5	自営	〃 〃
	新垣盛喜	9	沖縄	1958－5	借地	% Foto Kaneshiro Dourados C. P 275
	大城光彦	3	〃	1962－2	自営	〃 〃
	中園譲治	3	鹿児島	1956－5	借地	% Katayama Dourados C. P 65
	内　勲	9	〃	1958－2	自営	Avenida 2217 Dourados
	徳光尊弘	6	広島	1953－8	自営 雑貨	Avenida Marcelino pires 2293, C. P 304
	平石力夫	6	和歌山	1953－8	〃 大工	Rua Rio Grande 2865 C. P 204
計	21家族	113人				
Itaporã	小野　仁	8	岡山	1953－8	自営	% Katayama Dourados C. P 65
	前田正雄	6	山口	1962－3	分益	〃 〃

地域別	氏名	家族数	出身県	着伯年月	営農形態	通信先
Itaporã	村上一二	1	宮城	1959－4	雇用	% Katayama Dourados C. P 65
	谷口文太郎	2	和歌山	1953－8	〃	〃 〃
	高橋健二	4	山口	1959－6	〃	〃 〃
	尾崎秋広	5	和歌山	1953－8	〃	〃 〃
計	6家族	26人				
Panambi	花岡政雄	5	和歌山	1959－8	自営	% Saruwatari Dourados C. P 15
	山本亮二	5	〃	1958－8	分益	% Katayama Dourados C. P 65
	倉田誠一	3	山口	1961－5	〃	〃 〃
	門屋四郎	6	〃	1961－9	〃	〃 〃
	黍野秀雄	6	和歌山	1959－8	〃	〃 〃
計	5家族	25人				
Vila Vargas	紺野一雄	5	大阪	1955-11	自営	% Koichi Enoki Dourados C. P 93
計	1家族	5人				
Curpai (和歌山移住地)	温井秀秋	5	和歌山	1958－10	自営	Dourados C. P 91
	久保富久雄	5	〃	1958－8	〃	〃
	汐見勝五郎	6	〃	1958－9	〃	〃
	鎌倉一治	7	〃	1958－9	〃	〃
	田口正次	5	〃	1958－9	〃	〃
	中野徳太郎	6	〃	1959－8	〃	〃

	芝田盛夫	5	〃	1959－8	〃	〃
	中根昭和	6	〃	1959－9	〃	〃
	浦上龍一	7	〃	1960－11	〃	〃
	浦野進吉	3	〃	1955－4	〃	〃
計	10家族	55人				
Café Porã	池田昌治	5	福島	1954－7	自営	% Imai Dourados C. P 82
	永久義高	1	広島	1962－8	雇用	% Teruo Natumeda Dourados C. P 21
	植広行	6	和歌山	1961－11	分益	% Imai Dourados C. P 82
	田村求	6	高知	1956－12	自営	〃 〃
	筒井義知	4	三重	1960－7	雇用	〃 〃
計	5家族	22人				
Navirai	三島京一	5	島根	1960－4	自営	% Correio Navirai C. Grande
	曾我部真喜雄	10	愛媛	1959－4	〃	〃 〃
	井手定男	7	北海道	1963－6	〃	〃 〃
	藤田敏	12	〃	1957－7	〃	〃 〃
	小原元治					未調査
計	5家族	34人				
Fazenda Caiuwa	小野寺守	3	岩手	1957－6	借地	% C. A. C Prudente C. P 443
	桜井広一	4	新潟	1956－9	〃	% Sakai Kamitami Paranavai C. P 16
	太田久仁博	2	青森	1961－11	雇用	〃 〃 320

地域名	氏名	家族数	出身県	着伯年月	営農形態	通信先
Fazenda Caiuwa	南 昭一	6	石川	1956－9	借地	℅ Sakai Kamitami Paranavai C. P 16
	井田善郎	6	東京	1954－11	〃	〃 〃
	田丸銑次郎	2	熊本	1959－5	〃	〃 〃
	竹原祐貞	3	宮崎	1958－5	雇用	〃 〃
計	7家族	26人				
Ponta Porã	深谷林作					未調査
	今城重松	6	福岡	1956－5	商業を兼ねる借地	Rua Marechal Floriano 464 Ponta Porã
計	2家族	6人				

37. 〃 編 集 後 記 〃

サンパウロ支部はサンパウロ州，パラナ州の調査に引き続き，1966年度（昭和 41 年）はマット・グロッソ州の戦後移住者の実態調査を実施した。

日本の約3倍の広さを持つマット・グロッソ州を僅か128万8千円の予算で調査することは非常に困難を極め且つ実施上の制約を受けたこと大であった。

調査期間は，1966年（昭和41年）8月1日から9月20日までの 50 日間であり，調査員は広く日系コロニアから募集し，応募者 30 余名の中から厳選の結果5名を選考した。

選考に当っては完璧な調査を期すため調査員の専門分野を考慮に入れ，大学卒を中心にして，社会学部，農業経済，拓植，商学部及び同種の調査の経験者の5名に決定したものである。

広大な未開地の調査であり資料も少ないため調査は数々の困難を来したが，あくまでも足による戸別訪問，聞きとり実査を行なった。

調査期間中のマット・グロッソ州の日系人を始め各種団体の積極的な協力が実を結んでここに予想以上の調査結果を収め発表する機会を得たことに，マット・グロッソ州の日系人と本件調査員に感謝の意を表したい。

かかる調査は，1958年日本移民50周年記念として実施された実態調査以外にはなく，調査をまとめるに当っては適当な資料が揃っていないために幾多の障害は伴ったが，昨年度のパラナ州の調査の経験を基にして更に詳細に亘った集計を行ない，日系コロニアは勿論，特に日本国内の移住希望者が最も切実に知りたい点に重点をおいてマット・グロッソ州移住者の赤裸々な実態を忠実に描写するように意を用いたつもりである。

なお，細かな数字にこだわることなく調査表の項目ごとに普通の集計には表われない点をも網羅して地域概況説明を加えたので少なからず参考になるものと自負するものである。

日系コロニア及び日本の移住関係当局にもこれを広く最大限に活用され又少しでもマット・グロッソ州日系邦人の活躍の姿を知っていただければ幸甚である。

参考までに全調査対象者の名簿を作成し日本の留守家族との通信に便宜を計るように住所録代りとして特に配慮した。

最後に，マットグロッソ州在住の日系人各位の健康を祈り，今後益々発展されんことを願ってやまないものである。

1966年（41年）12月20日

調査主任

上　園　義　房